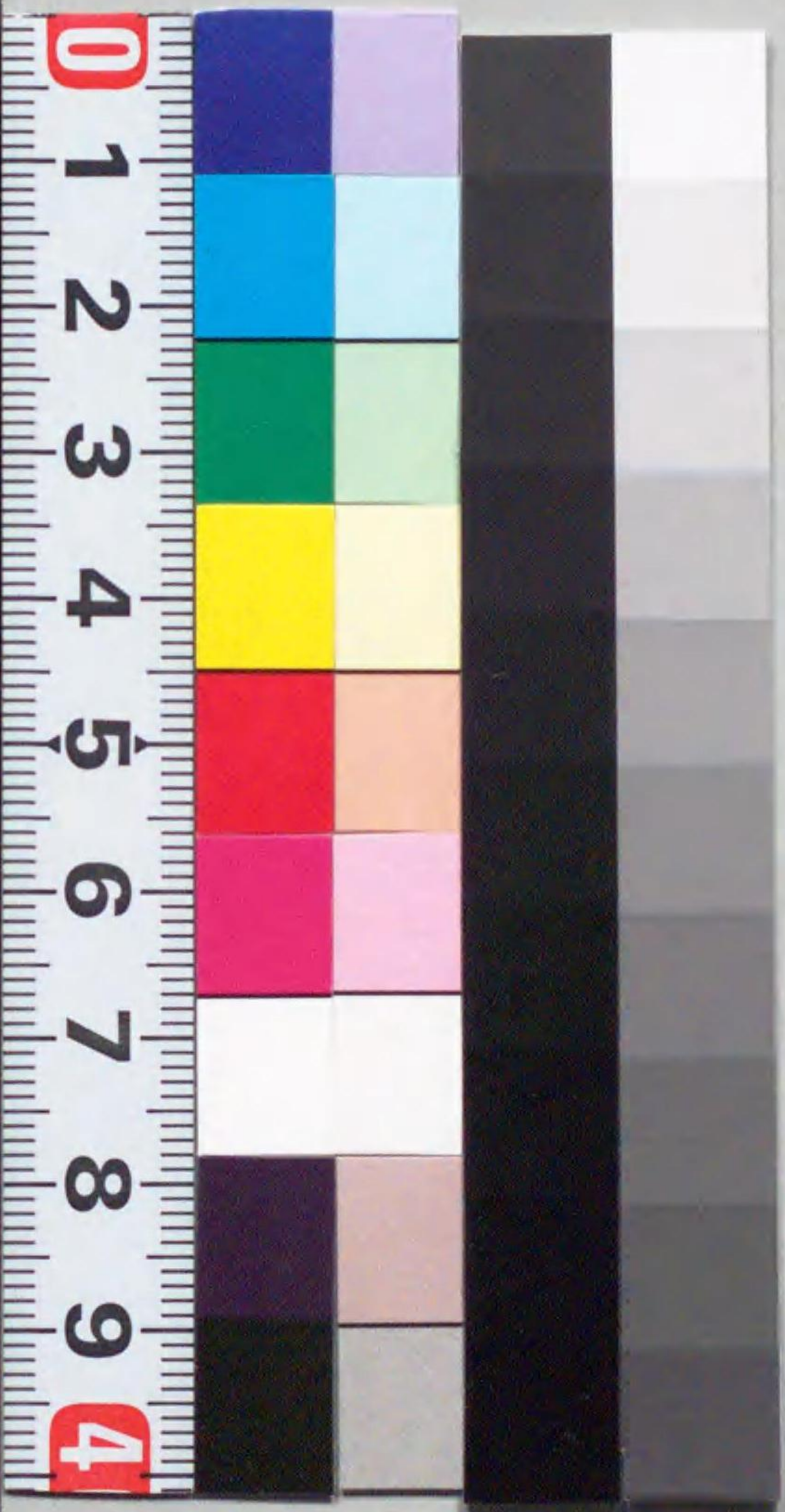


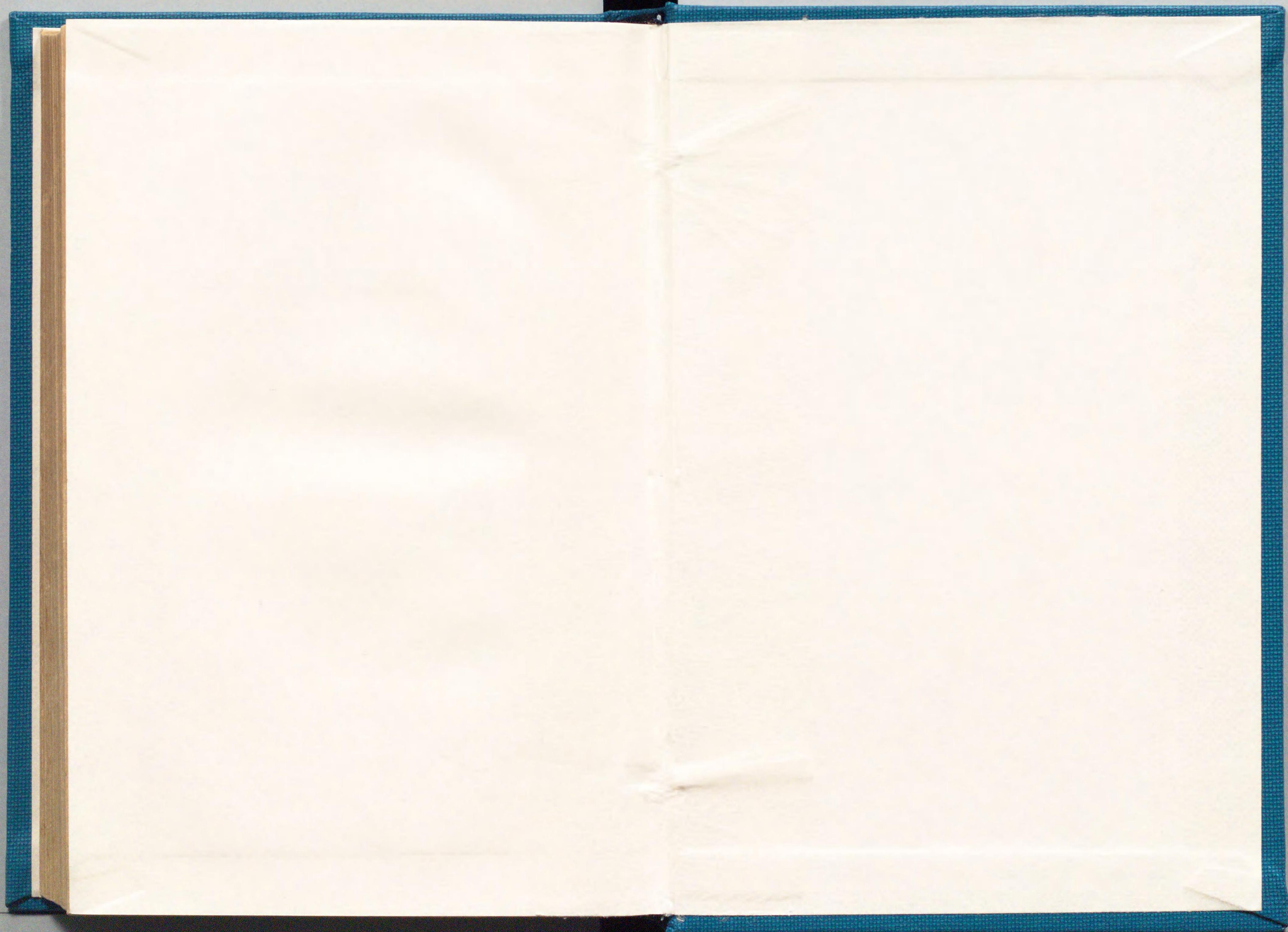
210.08
Ko5483



00712687

〇
複
写





H236-25



國史叢書

土佐物語 一

評	文學博士	萩野由之	文學士	笹川臨風
議	文學博士	黑板勝美	文學士	菊池謙二郎
員	文學博士	松本愛重	文學博士	三宅米吉

黑川真道編

(順ハロイ)

國史研究會藏版

210.08

K05483



712687

時に間断なく、往・今・來は一線の上に繋れり。夫れ現在に過去の生む所にして、未來を説き得るもの、現在に其の基脚を置けばなり。顧ふに世の人、多く現在を重んじて過去を輕んず。過去を輕んずるものにして、現在の眞想を窺知し得るものなく、現在の眞想を窺知し得ざるものにして、安ぞ未來に想到するの餘裕を存せんや。言ふ迄もなく我國の現在に、數千年に亘れる過去の産物なり。皇室の尊嚴・國民の性情、將又文物發達の徑路・治亂盛衰の顛末等、仔細に之を觀察すれば、現在の由つて來る所以を明かにし、隨つて未來の赴趨する所を察するに難からざるなり。

抑過去を觀察するには、根本史料に據らざるべからずして、一篇の成書に據るを非なりとす。蓋人各見る所あり、自家の見地は、是れ他人の見地にあらず。一篇の成書に頼りて過去を知らんとするは、即ち自家の見地を没却して、他人の見地に傾倒するものなり。讀史餘論・日本外史は、各其の著者の心に映り眼に現れたる日本歴史にして、之を以て眞箇の日本歴史と稱し得べからず。自ら眞箇の日本歴史を知らんと欲せば、根本史料たる當時の記録に由りて研鑽討究せられざるべからざるなり。是惟に日本の過去を正當に知り得るのみにあらず、研究の興味、亦實に津々たるものあらん。本叢書は眞に我國を了解せんと力むる特志者に、根本史料を提供せんと欲して刊行す。

蓋世には現在にのみ齷齪して、過去を觀察する興味と餘裕とを有せざるもの多しと雖、又汝々として往を彰にし今を知り來を考ふるの士尠しとなさず。此の書、或は少數篤學の士に容れらるゝも、多數俗庸の人に迎へられざるは固より期する所なり。さばれ需要の多少を論ぜず、必ず全部の刊行を大成すべし。敢て爰に之を聲明す。

國史研究會主幹

例言

- 一、原本二十卷なるも、頁数の都合に因り、本編には十五卷迄を採收して之を第一卷とし、十六卷以下は第二卷として分冊収載する事となせり。
- 一、名稱、引用文字等にして特長と認むべきものは、原本の儘に保存して、改竄する事なかりしと雖、讀誦の平易ならんを期せるが爲、假名を補うて語格を正したるもの尠なからざりき。
- 一、地名人名等にして原本假名書きのもの少なからざりしが、此等は出來得る限り他書を參校し、又は原本中彼此對照して正確疑なしと信するものに限り、漢字を補填したり。然れども其能はざりしものは、極めて稀に假名の儘としたるもあり。
- 一、魯魚の誤に因るもの又は字體不明にして讐校の途なかりしものは、時に口を填し又〔何字缺ク〕とせるもの二三これあり。

一、地名人名等稀に振假名を施したるは、唯讀惡からんことを慮りたるものに止ま
れり。

解題

土佐物語

二十卷

(本卷は前編として十五卷迄を收め十六卷以下は之を後編に收む)

本書は、應仁の大亂以後、將軍の命令行はれず、英雄四方に割據し、隨つて御膝元なる京都すら衰微を極め、朝臣にしては、攝家清花を始め落魄し、身の置き所なきに至り、武家にしては、大名小名といへども、一朝戰敗るゝや、領地城廓何れも他の有に歸し、一族直に流浪するに至れり。さればこれらの人々、或は縁を求め因を尋ねて、邊土遠國に漂泊す。中にも一條太閤兼良公は、奈良に身を潜め、幽閑疎の住居をなし、子教房公は、土佐國なる長宗我部文兼に迎へられて、遂に同國に移り、長宗我部氏の冊く所となれり。これを土佐の一條家といふ。

此の物語は、彼の教房公文明十年土佐國へ移住ありしより筆を起し、長宗我部文兼・元門・雄親・兼序・國親・元親・盛親の代々の事蹟と、其時代に於ける同國內の大小

の合戦等を記し、終には彼の關ヶ原の役に、盛親が石田三成に組せしを以て、徳川家康、盛親の所領を歿收し、慶長五年これを山内一豊に與へ、茲に山内氏の入部となり、盛親は京都に漂泊し、法體して遊夢と號せしが、猶本領を復せんことを希ひ、時機を窺ひたりしに、關東大坂との戦争起り、慶長十九年豊臣秀頼の招きに應じ、大坂に籠城して一方の將となる。然るに翌元和元年五月六日、矢尾に於て大敗し、遂に捕虜となり、同月十五日四條河原に於て殺され、長宗我部氏茲に亡滅し、入部せし山内氏の繁榮を頌し、筆を止めたり。されば本書は、文明十年一條殿下向より、元和元年長宗我部氏亡滅に至るまで、土佐國に於ける凡百卅八年間の史蹟を記したるものなり。此の外追加として、長宗我部先祖の事異説、土佐國守護の事并傳記、長宗我部家臣諸家へ被抱候有増、長宗我部家古き物語共、知行千貫の辨、室戸堀湊の記、朝倉宮再興記、土佐國廿一社の記等を附録とせり。本書作者詳ならず。但「長宗我部盛衰記」一名、土佐土産卷一敍文に云、偶土佐古城傳承記を得たり。何人の作と言ふ事を知らず。其始終節月の詳なる事、大に諸記

の類にあらず。大概難波戦記の説と符合す。蓋往日識者有て是を顯する。土佐物語は全く此の書を以て潤飾増修するのみ云々と見えたり。然らば「土佐物語」は、「土佐古城傳承記」を、何人か潤飾増修したるものなること知られたり。たゞ惜むらくは、「土佐古城傳承記」といひ本書といひ、共に作者の傳はらざるは頗る遺憾とする所なり。併し乍ら「長宗我部盛衰記」は、安永三年大神眞潮の序文を掲げ、中田氏の著述なる事を明記しあれば、「長宗我部盛衰記」著述の時は、既に本書は世に流布せし書なること明なり。猶又本書追加の文によりて考ふれば、土佐國朝倉宮再興記は、明暦四年林春齋の文を掲げ、室戸湊の記は、寛文元年山崎闇齋の文を掲げ、土佐國廿一社の記は、寶永二年大神重遠の著述を掲げ、また奥書には、享保五年庚子十二月下浣於土州高智山書寫畢と記載せるを見れば、寶永二年以後、享保五年以前の著述なることは推定せらるゝなり。猶識者の高教を俟つこととせむ。

本書は全本と抄録本とあり。共に世に流布せり。「土佐國群書類從」には抄録本

を採收せり。本編は全本を採收す。然れども寫本を以て世に流布せれば、魯魚の誤なしとも限らず。且類本至て尠なければ、反覆丁寧讀み得る限りは熟考を重ね、漸く斯く迄には成し遂げたり。讀者之を諒せよ。

大正三年五月

黒川眞道識



目次

土佐物語 一

卷第一

- 一條殿土佐國下向の事 長宗我部の事 本山傳記并岡豊城攻の事
- 長宗我部兼序自害の事 千翁丸中村に行附岡豊に歸る事
- 戸波城軍の事 津野降參附獵師物語の事 本山縁組附吉田周孝の事
- 山田治部少輔放肆の事 山田合戦の事 常通寺造立の事
- 岡豊城中楠折附八幡御託宣の事 大津城落去の事
- 坂折山合戦附工文遲參の事 下田城落去附一宮神職降參の事
- 十市・池降參の事 岩井屋次右衛門蛸魚を釣る事

卷第二

卷第三.....七三

西養寺物語の事 香宗我部和談の事 國親法體の事

太平山城守敗績の事 一條殿・本山不和附吉良駿河守自害の事

森山・蓮池砦落去の事 奇怪の事 朝倉神社の事

卷第四.....一〇五

岡豊・本山義絶并長濱城夜討の事 長濱合戦の事

元親潮江の城を乗捕并覺世卒去の事 吾川陣并一條殿蓮池城を攻め給ふ事

土佐郡城々軍の事 秋山城夜討并吉良城軍の事 朝倉合戦の事

草薙陣附茂辰本山へ退去の事

卷第五.....一三七

瑞應寺建立附豫岳寺の事 元親縁邊の事 秦泉寺并白岩夜討の事

馬の上の城番人狼藉の事 吉田伊賀介妻女の事

一條殿御簾中御離別の事 一條殿豫州合戦の事

江村小備後歸陣并五倫切の事 安藝より幡多へ加勢乞はるゝ事

安藝勢岡豊を攻むる事 峯寺觀音縁起附國虎・元親和談の事

卷第六.....一七五

本山陣の事 安藝岡豊義絶の事 姫倉・金岡落城附小谷・專當返忠の事

矢流崩の事 安藝國虎最後の事 國虎の北の方幡多へ送届附黒岩殉死の事

安藝滅亡瑞相并卒都婆が本の事

卷第七.....二二三

蓮池・戸波落城の事 日下の渡地藏附瀬上りの事

久禮陣并仁井田五社の事 權花の宮の事 島彌九郎戦死の事

一宮再興の事 小島源藏相撲の事 東灘邊退治の事

吉良式部少輔横死の事

卷第八.....二五三

中納言殿放蕩の事 黄門御出家の事 一條入道殿沈落の事

中村陣井内政朝臣大津城へ移らるゝ事 蹉跎山井加久見が形見の石の事
崎の濱合戦の事 所々一見の事

卷第九.....三〇二

四萬十川合戦の事 袖鏡の事 野根夜討の事

卷第十.....三一九

夢合の事 一條入道殿逝去の事 元親夫婦法號の事

海部合戦の事 八幡宮通夜物語の事 長宗我部彌三郎實名の事

豫州へ出勢の事 大西覺養降参の事 菅田隼人降参の事

曾根降参の事 大西陣の事 嘉例連歌井近衛殿御夢想の事

雲遍寺物語の事 河野・大津合戦の事

卷第十一.....三五五

三好傳記の事 諸將城々を守る事 三好長治自害の事

伊澤亂井一宮成助降参の事 大西上野計略の事

重清落城附三好山城守降参の事 小松島合戦の事

今市合戦附紀州湊雜賀降参の事 一宮成助・新開道善最後の事

香河井津野養子の事 財田討死井羽床降参の事 津島合戦の事

波川合戦の事

卷第十二.....三九〇

藤目の城兩度合戦の事 北の川討死の事 黒瀬城攻の事

羽林逝去の事 博陸侯詠歌の事 御庄降参附多田城落去の事

久武内藏助討死の事 竹内彌藤治妻女自害の事 岩倉合戦の事

卷第十三.....四一八

三好笑岸齋阿州下向の事 一宮神託の事 中富川合戦の事

勝瑞の城歿落の事附三好鳥指の事 三好山城守心替井人質の事

十河城攻の事 引田合戦井十河の城落つる事 高森城軍の事

美間合戦附中伊豫・西伊豫降参の事 須本へ計策の事

三州へ加勢催しの事

卷第十四

秀吉公四國御退治手配并元親出陣の事

金子陣の事 木津の城軍の事

一宮城攻の事

元親降参の事

四國分與附鶴雀の事

元親上京の事

元親大坂出仕附仕官の事

大佛材木并吉良久武不和の事

卷第十五

長宗我部父子西國發向并軍評定の事

戸次川合戦附信親討死の事

信親死骸葬る事

信親在世物語の事

長宗我部五郎次郎御朱印頂戴の事

秀吉公九州御退治の事

専式坊法印誅伐の事

城替の事

秦泉寺父子最後の事

不義の輩誅伐の事

目次終



土佐物語卷第一

一條殿土佐國下向の事

人皇百四代後土御門院の御宇、足利將軍源義政の時の管領細川右京大夫勝元といふ士所、山名右衛門佐持豊入道宗全と不和の儀起り、應仁元年より、兩家忽確執を結び、其黨日に起り月に會ひ、遂に京師東西に別れ、金鼓旌旗の動搖晝夜を分かず、年を歴て止まざりしかば、鳳闕の衰弊、公家の窮困此時に極り、攝家清花を始として、九陌の廣居、一身を置き難く、或は縁を求め因を尋ねて、邊土遠國に漂泊し給ふ中にも、一條太閤兼良公は、奈良の舊都に御身を埋め、幽閉閑疎の御住居あり。御嫡子前殿下教房公は引別れ、攝州兵庫の浦に逆旅し給ふ。爰に土佐國長宗我部兵部丞秦文兼、此由を傳聞きて、御迎の船をぞ參らせける。文明十年戊戌、彼浦より御船に召され、

一條教房
土佐に下る

土州甲浦に着御まし、夫より文兼が居城岡豊をかふに移り給ひければ、一の郭を點して御座所に定め、重く冊き奉る。此所に兩年を送り給ふ。其隣里はいふに及ばず、國中の領主參向して、悅緒を述べ、或は使者を進めて崇敬の誠を盡し、往來殊に繁かりければ、いつしか岡豊は、繁華の地とぞなりにける。是ぞ長宗我部遂に邦家を興すべき所表なりと、人申しける。然るに土佐國は、往昔康曆の頃、細川武藏守頼之を、四國の探題に補せられてより、代々彼子孫の下知に隨ひ、餘風猶新なりしに、五代の孫右京大夫勝元、文明五年卒去の後、四州悉く亂れて、一隍一壘を構へ、黨を結ぶもの其數多し。土佐國に宗徒の將は、安藝・香宗我部・山田・本山・長宗我部・吉良・片岡・太平・津野等なり。文兼諸將に謁し、或は檄書を飛して、誇していふ。一條殿御父子御下向の事、我國の面目、且安全の基なり。殊に隣國隙を窺ふ折なれば、彼御家門を國守と仰ぎ、拜趨の禮を事とせば、國中其化を戴きて、諸士の鬪諍忽に止まり、隣國より干戈の怖なかるべし。中に就きて思ふに、豫州の堺には、猛勇の將なきに因りて、動もすれば境内を犯す。然れば幡多郡中村は、西郡の府にして、伊豫に隣れり。彼

一條殿の
居城を中
村の御所
と崇む

中村の古城を點して、御家門を移し奉りなば、豫州よりの患もなかるべしといひければ、何れも此議に同じ、文明十一年己亥、中村の古城を結構に築きて、教房房家移り給ひ、國中の諸士、國司と仰ぎ奉り、中村の御所とぞ申しける。去程に封國の政務、日に新に月に盛にして、近國よりの妨なく、君民庶の間、各萬歳を唱へ、郊野に拵て喜びけり。抑文兼は、何故に斯程まで一條殿を崇敬するぞと、其謂を尋ね見るに、文兼が父備前守元親、先年上京の時、聊便の事有之、教房公の御祖父經嗣公の御館へ立入りしに、元親素より田舎に住みて、萬無骨なりければ、經嗣公儉に御家人に仰せて、起居・詞遣・衣食等の法式を指南せさせられ、厚く扶助し給ひける。されば元親常にいひけるは、一條殿の御厚恩は、七生迄も忘るべからず。我子孫、報謝の志を存すべし。若是を背かば、永く弓矢の冥加盡きぬべしと、言置きし故とぞ聞えし。此備前守元親は、後の宮内少輔元親には、七代の祖なり。一條教房公と申すは、かけまくも忝き天の兒屋根の御末、從一位關白左大臣經嗣公の御孫、從一位准三后左大臣攝政關白太政大臣兼良公の御子、御母は中納言宣俊卿の御女なり。牛車、兵杖、隨

土佐一條
の始終

身、左大將、左大臣、氏長者、從一位、關白を歴給ふ。文明元年辛卯、南都に屏居し給ひ、同十年戊戌、土州長岡郡岡豊に御下向、同十一年己亥、幡多郡中村に移住し給ひ、同十二年庚子十月五日、中村の城に於て薨じ給ひ、妙華寺殿と號す。其御子房家卿、文明六年甲午京都に於て御誕生、同十戊戌年、御父教房公に隨つて土州に御下向、時に五歳なり。五位、四位、少將、兼土佐守、中將、參議、三位、權大納言を歴給ひ、天文八年己亥の十一月十三日に薨す。享年六十六。藤林寺殿と號す。其御子房冬卿、御母は參議資冬卿の御女なり。明應七年戊午、中村に於て御出生、權中納言、二位、左大將、天文十年辛丑十一月、春秋四十四歳にして御逝去、後國明院殿と號す。其御子房基朝臣、御母は式部卿邦高親王の御女、大永二年壬午、中村に於て御誕生、從五位下、兼阿波守、右中將、從三位、天文十八年己酉四月十二日逝去、二十八歳、光壽寺殿と號す。其御子兼定卿、後に康政と改めらる。天文十二癸卯年、中村に生れ給ひ、四位、少將、中將、參議、權中納言、從三位を歴給ふ。然るに康政、不義非法の行跡に因つて、家臣背きて隨はず。天正元癸酉年九月十六日、薙髮して自得宗性と號し、國政を長男内

政に譲りて隱居し給ふ。時に三十一歳なり。同じき二年甲戌二月、家臣催して、康政入道を豊後國に送りしかば、遂に臼杵に行きて、大友義鎮入道宗麟を頼まる。康政は宗麟の婿なれば、懇に扶助せらる、所に、舊臣入江左近、是を弑す。内政朝臣は、中村に於て生れ給ふ。御母は豫州宇津宮某が女なり。左中將、從三位。長岡郡大津城に移りて、大津の御所といふ。天正八年波川玄蕃に語らはれ、隱謀を企て、終に露顯して、長宗我部宮内少輔元親、豫州に追出す。程なく逝去。天叟院守有と諡す。房家、房冬、房基、康政、内政、是を土佐一條と申すなり。内政の御子息政親、右衛門佐と號す。大津に於て産る。御母は長宗我部元親の女なり。長岡郡久禮田に住して、久禮田の御所と稱すれども、一條家の數には入らざるなり。慶長五年の冬、長宗我部歿落に因りて、翌年の春、政親は上京ありしと承る。是れ土佐一條家、始終の物語なり。

長宗我部の事

長宗我部
氏略系

彼の長宗我部兵部丞文兼が先祖を委しく尋ねれば、秦の始皇帝四世の孫功滿王、仲哀天皇八年に來朝、其男融通王又弓月王とも號す。應神天皇十四年に來朝、其男眞德王、仁德天皇の御宇に姓を賜はり、波多といふ。今の秦の字の訓なり。眞德王九代の孫、秦の川勝に至る。用明天皇二年七月、厩戸の王子、守屋の大連を討罰の時、川勝大きに軍功あり。川勝二十五世の孫秦の能俊、土佐國長岡郡にて三千貫を領し、宗我部村岡豊山に城を築きて入城して、氏を宗我部と改む。然るに同國香美郡にも、宗我部といふ所ありて、領主をも宗我部某と號しければ、其疑ありとて、長岡郡にあるを長宗我部と稱し、香美郡にあるを香宗我部とぞ申しける。この岡豊と申すは、往古の名にあらず。此城を築きて、長岡の府なれば國府といへり。然るに府の字を、豊饒の豊に書代へたるは、此山の西の尾に、豊岡上天神社御坐す故に、豊の字を申請けて、米穀豊饒萬民快樂を祝せられたり。於加布とは假名訓なり。抑豊岡上天神と申し奉るは、古老傳へて、天照太神にて御坐すといへり。神樂歌に、天爾坐豊岡姫。梁塵抄に、豊岡姫は天照太神也と云々。上天の二字は、天にましますの意と

長宗我部
と香宗我部

土佐國二
十一社

かや。此御社は、延喜式神名帳に載する所の、土佐國二十一社の其一座なり。二十
一社と申すは、安藝郡三座室津神社・多氣神社、坂本神社、香美郡四座天忍穗別神社・
小松神社・深淵神社・大川上美良布神社、長岡郡五座豊岡上天神社・朝峯神社・殖田神
社・小野神社・石土神社、土佐郡五座都佐座神社・葛木男神社・葛木咩神社・郡頭神社・朝
倉神社、吾川郡一座天石門別安國玉主天神社、幡多郡三座伊豆多神社・高知坐神社・賀
茂神社、所謂二十一社はなり。斯くて岡豊の北の山上に、山城國鳩の峯八幡宮を勸
請して、數の堂社石清水を移し、神主社人社僧を置き、毎年祭奠放生會を行はる。宗
我部村を改めて八幡村と號し、城下に大河あり、石清水の末なればとて、石清水とぞ
申しける。其擁護にやよりけん、能俊子孫繁昌して、俊宗・忠俊・重氏・氏幸・滿幸・兼光・
重俊・重高・重家・信能・兼能・兼綱・能重・元親・今兵部丞文兼まで十六代、岡豊に在城し
て、門葉見顧の者、其數を知らず。

本山傳記并岡豊城攻の事

本山傳記并岡豊城攻の事

去程に一條教房公、文明十一年中村に移らせ給ひ、國中の上下國司と仰ぎ奉り、拜趨の禮をぞなしにける。家臣には土居・安並・羽生・爲松たんまつとて四人相並び、仁義を宗とし、智勇を先として、成敗正しかりければ、國日に隨つて治り、民月を逐ひて豊なり。斯る所に、翌十二年の秋の頃より、教房公聊御不豫の事ありと聞えけるが、同十月五日、忽に薨逝し給ひける。妙華寺殿と諡す。哀れなりし事共なり。扱あるべきにあらざれば、御子房家卿、纔七歳にならせ給ふを國司に立て、四人の臣下、先代の法を守りて沙汰しけるが、我等不肖の身に、若君に代り奉り、政道を執行ふ事、其憚なきにあらず。理世安民の器に當れる人を選擧して、御代官に定め、國政を司らしめ、御幼稚の若君を輔佐し奉るべしとて、大小の領主を選ぶに、長宗我部文兼其の器用なりと、群議一同に定まりしかば、即文兼を御代官に備へて仰ぎける、忠貞こそは優しけれ。斯くて文兼、國の成敗を司りて諸事沙汰の途轍正しく、外相内徳、實にも人のいふに違はざりしかば、氏族も是を重んじ、外様も彼命を背かず、家益繁榮を得て、其子元門をちか、其子雄親おとむね、實は元門かひやくが弟なり、其子將監兼序かひやくに至つては、威勢甚盛にして、人唇を返す

本山茂宗
の威振ふ

事共多かりけり。其頃長岡郡本山といふ所に、八木左近大夫源茂宗といふ人あり。是は清和源氏吉良庶流と言傳ふ。茂宗祖父を、八木伊典といふ。其生國は知らず、假名實名も又詳ならず。何の頃にかありけん、彼本山に來りて居住す。其子養明、今茂宗まで三代、本姓を改めて本山と號す。伊典養明は本山を領して、僅に住居しけるが、茂宗其器傑出して、偏に興立の志ありければ、近邊の郷民に、金銀衣食を與へて是を懷け、諸士に賄を厚くして親みをなし、遂に人數を催して、土佐・吾川兩郡に發向して、隨はざるをば攻亡し、降を乞ふをば、免して幕下になし、兩郡悉く打靡け、猛威を振ふ事甚し。然るに長宗我部將監兼序盛勢あるを見て、常に憤りけるが、或時一族從類を呼集めていひけるは、長宗我部將監驕奢甚しく、諸士に對して無禮の體是非に及ばず。潜に是を察するに、彼が曾祖父兵部允文兼、一條殿を當國へ招請したる其報謝に、一條殿懇情を盡し給ふに因るなり。文兼初めて招請したると雖、中村へ移し、國司と稱する事は、文兼が一方の及ぶ所にあらず。我亡父を始め、國中の諸將一同しての事なり。たとひ彼一方の功なりとも、兼序武士の法を存せば、強に

誇るべき事にもあらず。よし何にもせよ、彼は僅に三千貫の領主、我は兩郡の大將なり。然るに毎度奇怪の行跡を、空知らずして暮らす事こそ無念なれ。然れども國の騒動、民の歎きを顧みて、鬱胸を抑へ過す所に、驕奢日々に長じ無禮月々に増し、傍若無人の行跡、堪忍は都て恥辱なり。急に踏潰すべしと思ふはいかにと申されければ、何れも御理至極なり。彼が爲體、我々迄も遠恨に候。急ぎ思召立ち給へとぞ申しける。茂宗喜び羽檄を飛して、香美郡楠目の城主山田治部少輔、高岡郡蓮池の城主太平山城守、吾川郡弘岡の城主吉良駿河守を語らふに、皆一言に及ばず組したり。其勢合して三千餘騎、永正六年五月初、岡豊の城へ馳向ふ。兼序は素より、武勇才幹衆に越え、大敵を見ては欺き、小敵を侮らず、寡を以て衆に勝ち、柔を以て堅を挫く事、孫吳が妙術を得たる大將なり。此由を聞きながら敵に寄せられんは、武門の瑕瑾なりとて、手勢僅に五百餘騎、中島に出張し、石清川を後に當て、陣を取る。是は味方淺瀬を越え、敵を深みへおびき入れ、討取らんとてだての方便なり。さる程に寄手の勢三手に別れて、鬨の聲を咄と上げ、互に矢一つ二つ射違ふ程こそあれ、敵味方入

本山茂宗
兼序我部
ふ兼序と戦

亂れ、討つ討たれつ組ぐんづぐまれつ、火を散らしてぞ戦ひける。兼序、時分はよしと馬引返し給へば、城兵崩れ、淺瀬に廻りて引取りけり。寄手是を見て、川は淺きぞと心得て、城へ入れじと眞一文字に追懸け、深き淵に飛込み、大勢浮きつ沈みつ流れける。淺しと思ひし事なれば、後勢是に途を失ひ、一度に渡さんともせず、川は深きぞ、留れ留れと呼ばはれども、大勢備を亂して追懸けしかば、耳にも更に聞入れず、我先にと進みて、淵に飛入り、前後不覺に騒ぐ所を、城兵淺瀬を渡して突いて懸れば、大勢の騒ぎ立ちたる事なれば、返して戦はんともせず、我先にと逃る。兼序、長追なせそと、人數を收め、城中へぞ引取りける。本山は初度の軍を仕損じ、安からず思ひける。兼序は、討取る所の首數二百卅五、されども寄手大勢なれば、城外を十重廿重に取巻き、晝夜廿餘日揉みにける。城兵も、爰を破られじと防げども、寄手は倍する大軍、新手を替へて戦ふ。城兵猛しと雖、替勢もなく、身金鐵ならねば、五百餘騎大半討死して、殘少なになり、其上俄の籠城なれば、兵糧盡き人馬飢に臨み、外に援兵の救なく、敵軍甬道を絶ちたれば、糧を入るべき様なし。斯くては此城、一日も持味へん様

なし。翌けなば、討死すべきにぞ極めける。兼序二人の子あり、一は千翁丸、永正元年に産れ、今年六歳。次は女子、三歳になり給ふ。近藤某とて、幼少より膝本にて召使はれ、漸く成長、智信兼備し、禮厚く言寡き者なれば、二百貫の地を興へ、千翁丸に附置かれけるを呼出し、此間の戦に、味方聊勝に乗ると雖、士卒過半討たれ、兵糧も盡き果てぬ。憑み甲斐なき籠城して、徒に餓死せんより、明けなば死を快くせんと、思ひ極めたるなり。よしや骸を軍門に曝すとも、名を後代に揚ぐるこそ、武士の本意なれ。汝は譜代相傳の者といひ、年來千翁丸を守立てしといひ、其身甲斐々々しき者なれば、千翁丸を抱き、いかにもして重圍を出で、一條殿へ参り、兼序武運盡きて、此度討死仕候最後に申置き、此子を君へ参らせ候と申せ。何の仔細もなく、御憐愍あるべきなり。是ぞ我爲め第一の忠勤なりと、繰返し宣へば、近藤畏りて、此年月恩澤に俗し、今迄は一身の安善を、御家の存亡に任せ候ひつれ。命を惜むべきに候はず。今既に御運盡きさせ給ひて、一筋に討死と思召極められ候上は、御最後の御供をこそ、願ひ奉り候へ共、生を全うして命を待つは、遠くして難く、死を輕んじて節

を守るは、近くして易しと申す事の候へば、斯く取卷きたる圍を出で、若君を一條殿へ参らせ、守立て奉らん事は、遠くして難き事に候へ共、此仰を蒙る上は、隨分命を全うして、若君を養育し奉り、再び御家を起し、素懷を遂げさせ奉る、計を廻らすべく候と、義を金石に比して、信を面まことに顯し、涙をはらくと流しければ、兼序大きに悦び給ひ、頼もしき詞の末、今は思置く事なしとて、千翁丸を呼出し、汝幼少なりとも、父が言を能く聞け。夫頭伽鳥は、卯の内より、聲衆鳥に勝るといふ。勇健に成長して、廢れたる家を興し、讎敵を亡し、會稽の恥を雪ぎ、我亡魂の鬱憤を散せよと庭訓を残し、近藤に渡しければ、近藤千翁公を抱き、其用意をなしける。扱又北の方を賺し参らせ、三歳の姫に、乳母一人郎等二人相添へ、大忍の庄池の某は、乳母が内縁なれば、彼を頼み、北の山傳ひに落し、其外古老譜代の者共の、妻子下僕に至る迄、偷に忍び出しける。

長宗我部兼序自害の事

其後兼序、士共に向ひ宣ひけるは、旁が勇氣、豫て知るとはいひながら、此度の働、兎角詞に述べられず。一騎當千と云つべし。縦ひ一方を打破り、落ちん事は易かるべけれども、情事を案するに、我死すべき期に迫れり。其仔細は、東に山田あり、香宗我部と一味なり。北に本山あり、奥の山分、其外土佐、吾川兩郡は、南の果迄も本山が領分なり。西に吉良、太平あり、彼等は津野、波川、片岡と與したり。されば四方皆敵にして、我一人、籠中の鳥の如し。若爰を落ちたりと聞かば、草を分け搜すべし。雜人の手に懸り、汚名を残さんも口惜し。潔く討死すべし。扱も旁、此際迄附纏ひ、死を俱にせんと思ふ志、中々いふに詞なし。但千翁丸を残置く間、一人なり共活残り、千翁を守立て得させよ。最後の供には増さらんと宣へば、何れも道理に服し、兎角言出づる人もなき所に、中島某進み出で、御誕尤至極に候。各若き輩は、斗擲行脚に身を寄せても、隨分に活残り、若殿の御用に立ち給へ。但某を始め誰々は、皆六十に餘り候へば、若殿を見備へ奉る月日なし。是にて大殿の御供仕るべし。若き旁は急ぎ給へと、夫々に名をさして、老人十一人、郎等下部五十三人残りければ、若き輩、此

上は否むべきにあらずとて、親子兄弟別々に落ちて行く。兼序、今は心に懸る事もなし。明けなば、大勢攻め來るべし。終夜最後の酒盛せんとして、大盃三度傾け、中島にさし給ふ。中島謹んで押戴き、君臣は、三世の縁と申傳へて候。況や斯様に御最後の御供仕る上は、未來迄も斯の如く、御近習仕らん事疑なしと、三盃ほして兼序にさし上げ、夫より次第に飲交す。中島申しけるは、旁此中に、誰か一人活残らん。一所に討死して、同じ道に生れん。此悦に一さし舞はん、はやさせ給へと、兼序に小鼓を參らせ、野田太鼓、桑名笛を仕り、兼序のきりをぞ囃しける。岡豊の城は、山高く聳えたれば、笛鼓の音空に響きて、敵の陣にぞ聞えける。寄手の者共、こはいかに、味方は多く討たれつ。何の樂に、通夜諷ふらん不敵さよ。悪さも悪し、いざ夜攻に押寄すべしといひければ、いや〜是は樂にはあるべからず。味方悉く討死し、其上俄の籠城なれば、兵糧も盡さぬべし。最後の酒盛と覺えたり。天晴名ある大將程ありけるよと、考する人も多かりけり。去程に東雲漸く棚引きて、寄手太鼓を打ち鐘を鳴らし、九折なる山路を、曳々聲を上げて攻上る。兼序は、六十餘人を前後に備

へ、驀地に暗に突いて出づる。寄手は、元來城兵を小勢と見濟しければ、何故にか些も休らふべき。我先に討たんと、喚いて駈向ふ。城兵は、今日を限りと思ひ極めし事なれば、一足も後へは退かず、前後に當りて打破る。本山が士大將本山勘解由左衛門、深手負うて引退くを、城兵是非なく追懸け討取りけり。池田左衛門は、兼序を目にかけ、寄せ合せんと進み討つ所を、兼序の郎等、馬の諸膝薙ぎて、落つる所を討ちにけり。此外目の前に切らるゝ者五十餘人、手負ふ者は其數を知らず。寄手終に追立てられ、開き靡きて引退く。城兵龍虎の勢をなせども、皆討死して、十三騎にぞなりにける。兼序、暫しは敵も寄せ來まじ。少しなりとも休息して、最後の軍快くせんと、態と敵を引入れん爲に、大門を押開き、靜まり返つて居たりけり。本山は、城中既に勢力極りぬと見澄しければ、諸軍に下知して、一同に関を作つて攻上り、廣庭に亂入る。中島是を見て、腰の刀を抜き、廣庭に飛出づれば、残る人々遅れじと、二人一所に打て出で、捲り立てゝぞ切つたりけれ。寄手の大勢恠へ兼ね、門より外へ引いて行く。兼序立歸り見給へば、主従三騎になる。今は是迄と鎧脱捨て、腹揆

長宗我部
兼序自盡

切つて臥し給へば、二人の郎等も、刺違へてぞ死に、ける。長宗我部十九代も、粟飯の炊く程、哀樂轉變の世の野風こそ果敢なけれ。

千翁丸中村に行く 附岡豊に歸る事

斯くて兼序の北の方は、乳母郎等に介錯せられ、岡豊の城を落出で給ふ。痛はしや將監殿、明けなば大勢寄せ來り、さこそ隙なくましまさんと、我身の憂に取添へて、涙を袖に包み兼ね、大忍の庄池の某が許に至り給へば、池は情ある者にて、よきに饗應し奉る。北の方には、只ならぬ御身にて、早月頃過ぎけるが、物うき月日を重ね、終に爰にて御産あり、男子出生し給ひけり。後に長宗我部國康といひしは、此若子の御事なり。去程に近藤某は、十死の内に一生を得て、岡豊の國を忍び出で、商人の姿に様を變へ、千翁丸をば籠に入れて背に負ひ、幡多中村へと急ぎける。土佐・吾川・高岡は、弓手も妻手も敵なれば、暫も身を隠すべき陰もなく、虎尾薄氷を踏む恐れ肝を冷し、漸々として中村に至り、一條殿の御館に着き、千翁丸を下し置き、家老土居

の某に對面して、是は長宗我部將監が士にて候と、ありし次第を具に述べて、慇懃に頼まれける。土居熟聞きて、急ぎ台聽に達すべしとて、頓て御前に罷出で、事の由を申上げければ、房家卿聞召し、大きに驚き給ひ、誠に不便の事なりとて、急ぎ兩人を召寄せられ、涙を流して仰せけるは、先考教房公、京都の亂を避けて、攝州兵庫に漂泊し給ひしを、兵部丞文兼が招請して、當國に御下向あり、安座し給ふ耳ならず、勅許にあらずして國司と仰がれ給ひ、今に至つて國中の諸士に冊かるゝ事、併文兼が厚恩なり。我豈其報謝せざるべきや。當家僅二代の内に、彼は十四代に及ぶ事、悲歎するに餘あり。但千翁丸が恙なきこそ大慶なれ。我れ隨分養育して、成長せば、亡父が讎をも報せさせ、本領安堵相違あるまじ。此度近藤が忠貞、古の程嬰にも越えたり。思へば兼序は、能く人を知るの明ありて、汝が如き忠臣を扶助す。汝又義を守りて、幼主を世に立てんとの心底、誠に主従一致なりと、甚感賞し給へば、近藤謹んで承り、誠に難有御誼に候。身不肖に候へ共、譜代の列に交り、兼序の大恩を蒙りし身の、此度主の先途をも見果て申さず、おめくくと立退き候事、全く本意にあら

ず候へども、主命辭するに詞なく、甲斐なき命を存へ、御所に參上仕候。返すくも千翁丸に御憐を願ひ奉り候と、謹んで申上ぐれば、房家卿、心安く存すべしとて、千翁丸をば御側に置かせられ、深く劬り給ひけり。其後兼序菩提の爲に、覺譽常通と諡して、様々の追善をなし給ふ。難有かりける例なり。去程に一條の大納言房家卿、御慰の爲に境地を選び、高樓を立てられ、常に是にて、遠近海山の景、四季の色を御覽じて、歌を詠じ詩を賦し給ふ。既に其年も暮れて、翌る春過ぎ夏の頃、彼樓閣に登らせ給ひ、近士を召され、御酒宴酣にして御機嫌甚し。千翁丸御膝近く在しけるに、輿に乗じて御戯に、いかに千翁丸、此欄の上より庭中に飛下りなば、父が名跡を取返し得さすべしと仰せければ、御詞の下より、あつといひて、つるくと走り寄り、一丈餘り高き樓閣の欄より、庭中へ飛下り、莞爾と笑つてぞ立つたりける。大納言殿、掌を抵つて大きに驚き感じ給ひ、彼は今年七歳なり。流石名ある武士の子程ありけるよ。幼稚の身として、恐るべき所を怖れず、名字の爲に身を顧みざるこそ、天晴行末頼もしとぞ宣ひける。斯くて年往き月來りて、千翁丸既に十三歳にぞなりにけ

る。先年房家卿樓閣にての御戲言、稚心に嬉しく思ひ、忘れもやらず、時々本領安堵の事をぞ歎きける。房家卿誠に不便に思召し、若此事相違せば、第一詞僞ならん。第二には、彼成長の後、深く我を恨むべし。彼といひ是といひ、措置くべきにあらずとて、吉良・太平・山田・本山に、様々御扱ありければ、辭する所やなかりけん、永正十三年、長宗我部本領三千貫を、千翁丸にぞ返し與へける。千翁丸大きに悦び、急ぎ岡豊に立歸り、昔の跡を修補して住しければ、方々へ分散せし譜代の諸士、此彼より馳集り、涸魚の水を得、春雷震つて蟄蟲出づるが如く、再び家運を開きけり。敵の末、根を掘りて葉を枯らせとこそいふに、本山等が、千翁丸を思ひ悔つて、本領を返す事、千里の野に虎を放つに同じとぞ、心ある人は申しける。

戸波城軍の事

一條殿は、幡多一郡を領し給ひしが、永正十四年に、高岡郡悉く采録となりける事の根元を尋ぬれば、其頃津野刑部少輔在原元實とて、高岡郡津野の主あり。津野山よ

り須崎・野見浦迄悉く領して、葉山と須崎に城郭を構へ、五千貫の主なり。其先祖を尋ね聞けば、平城天皇の御子阿保親王の曾孫、從五位下越中守在原經高、延喜十年庚午、故ありて伊豫國浮穴郡川上の庄山の内に下向、同十三年癸酉三月、土佐國高岡郡津野の庄床鍋村に來りて住す。同十八年、深山を伐開き里となして、櫛原と號す。櫛の木多きに依つてなり。暫く爰に住す。同十九年勅命に依つて上京、同年津野庄に於て、祿食一千町を賜ふ。依之氏を改めて津野と號す。經高五代の孫彌次郎高行、津野の庄一圓に領す。高行より今刑部少輔元實迄は、十代とぞ聞えし。其家の臣下には、古見・長深山・向井・隱田・小野・中村・梅原・久松・市川・味元・下元・本井・高橋・今橋・吉岡・谷川とて、譜代相傳の士相並び、徳を戴き恩を蒙る者、境内に満ちて、家の繁昌いふ計なし。爰に福井・玄蕃頭とて、同郡戸波の郷岩戸村井場の城主あり。其身小身といへ共、常に剛にして、人の下手に附かん事を思はず。津野領須崎と戸波は、相並びて堺を交へし事なれ共、常に津野と不知なり。津野は大身なれば、福井を幕下にせんとす。福井は、何條津野が分際にて、我を直下にするこそ安からねとて、都て

津野元實
福井玄蕃
を討つ

津野領に入りて、鹿狩鷹狩をして、油断もあらば、須崎の城を切取らんと、の氣色なり。津野、初の程は、知らぬ由にて過しけるが、油断大敵措くべきにあらずとて、津野の一族十餘輩、徒士雜兵二十餘騎、井場の城に押寄せたり。玄蕃手勢二百餘人打つて出で、大きに勇を振ひけり。され共勢微なれば、叶ひ難くや思ひけん、久禮の城主佐竹掃部頭へ使を遣し、加勢をぞ乞ひける。佐竹急ぎ中村へ立越え、一條殿へ此由を申上げければ、さらば加勢せよとて、雜兵二千餘人、戸波の郷へ差向けらる。津野是をば夢にも知らず、是程の小城に、目を經るやうやある。力攻にせよとて、眞先に進みて、曳々聲を出して攻懸る。城中にも、爰を専途と防ぎけり。斯る所に中村勢、関を作りて押寄せたり。津野勢、すは後詰のあるはといふ程こそあれ、我先にとぞ崩れける。城兵是を見て、門を開いて打つて出で、前後より引包み、火水になれとぞ揉んだりける。津野勢、前後の敵に揉立てられ、散々になりて逃げけるが、かまちの沼とて大なる沼あり。寄手是をば知らず、我先にと駆込み、底の藻屑となりける。大將元實是を見て、南無三寶、こはしなしたり、今は遁れぬ所なりと、馬駆据る。

大音上げ、行先は沼なるぞ、泥水に溺れ死して、名を汚さんより、一人なりとも敵を討つて、潔く討死せよ。士は名こそ惜しけれ、返し合せよと呼はりければ、踏止り踏止り、返し合せて戦ひける。元實鞍笠に立上り、津野刑部少輔元實なり。我と思はん旁は、元實が首取つて高名に備へよと、大勢の中へ駆入りて、蜘蛛十文字、八方亂して切つたりける。手元に進む兵十七八騎切つて落し、残る者共追散らし、勢ひ懸けて控へたり。津野が一族從士共、大勢に隔てられ、此彼に討合ひしが、又一所に集り、其身を見れば、深手薄手の嫌なく、五ヶ所三ヶ所疵を蒙らぬはなかりけり。迎も遁れぬ期に迫りぬと、津野豊後守・同藏人・同但馬守・同出羽守・同越前守・同新左衛門・同新右衛門・同又四郎・仲平備後・市川石見・關和泉・船戸左衛門・江村右近・山内次郎兵衛・古見河内・佐川越中・中村兵衛左衛門・吉村左衛門三郎・南部山城・水野彌平左衛門・西村伊豆・隱田新六・野見大助、是等を始として、一族從士五十三人、雜兵都合三百八十餘人、永正十四年丁丑四月十三日、一所に討死して、名を後代に止めけるこそ哀れなれ。元實行年三十六、元亨院勇公と謚し、須崎の郷に一字の伽藍を建立して、

津野元實
戦死

元亨院と號し、彼菩提をぞ弔ひける。元實の一子孫次郎國泰、此時僅二歳なりしを、仲平兵庫元忠養育して、葉山の城をぞ守りける。

津野降参附獵師物語の事

爰に一條殿の士に、安並彌惣・出間九郎兵衛といふものあり。數度戦功を顯し、今度戸波の合戦にも、高名したる者共なり。津野の一族皆亡びたるを見て、彼領分は、一條殿の采録とや思ひけん、須崎の浦里順見して、戸波へ立越えんと、吾井の郷に至る所に、何として聞き出しけん、仲平兵庫市川三郎右衛門・高橋鍵右衛門・永山平次兵衛、大勢を引具し、旅人の體に出立ち、後より靜に追懸けたり。安並・出間は思ひも寄らず、後を見れば、大名と覺しき旅人來るを見て、是は何方より、何方へ行く旅人やらんと、道の側の石に腰をかけ、休み居たる所に、若侍一人走り來りて、誰人にて御渡り候や。是は豫州より、當郡へ所用ありて參る者にて候が、見申せば御歴々、御慰の體に見え申候。乗打尾籠に候間、御斷の爲、使を以て申上候と、慇懃に述べければ、

兩人、御念入りたる御使、早速御通り候へと、何心なく行烈を見物して居たる所を、是はといふ聲を合圖にて、一度に咄と取巻き、手取り足取り主從残らず押へて、繩をぞ懸けにける。兩人大に肝を消し、こは何事ぞと問ひければ、兵庫聞きて、汝知らずや、津野が一族仲平兵庫元忠なり。一條殿の首を切ると思ひ、汝等が生首拔きて本望を達せんと、さゝめかいてぞ歸りける。兩人、え、口惜や、たばかられぬ。よしや尸は土に埋むとも、一念の悪鬼となりて、此鬱憤を散すべしと、躍り上り狂へども其甲斐なし。終に葉山にて、誅せられけるこそ無慙なれ。大納言殿此由聞召し、扱も無念の事共かな。急ぎ津野を攻め、仲平が首取つて、兩人に手向くべしと、佐竹掃部・福井玄蕃を先として、都合其勢三千八百餘騎、葉山の城へ押寄せたり。津野には期したる事なれば、一門從士馳集り、郷民共を駈催し、逆茂木石弓用意して、靜まり返つて待懸けたり。何れも山家に住馴れて、鹿狼を取る獵師なれば、山坂をも、平地の如く駈廻り、鐵炮の上手、下針さしはしをも外さぬ程の者共、千五百人籠りければ、寄手の大勢山川一面に押來るを、狙ひ澄して打つ程に、あだ矢は一つもなかりけり。寄手若

干討たれ、引退けば又入替り攻懸る。城は聞ゆる名城なり。籠る所の兵は、究竟の者共なれば、輒く落つべきとは見えざりけり。若し日を経るならば、豫州より加勢來るべし。急に攻めよといふ儘に、入替りく夜晝の堺なく、廿五日ぞ攻めにける。城中には、替る勢もなし。其身鐵石にあらざれば、上下疲れ果て、次第に兵糧玉薬も乏しく、防ぐべき勢も弱りければ、城を明けて、大方山へ取籠りけるを、寄手追懸け四方より攻めければ、遁る所やなかりけん、津野が一人當千と憑みたる宗徒の士十二人、並居けるが、士の死すべき所にて死せざれば、恥を見ると言傳へたり。軍も思ふ程はしつ、今は力盡きぬれば、冥途黄泉迄伴ふべしといひも敢ず、同時に腹をぞ切つたりける。爰に仲平兵庫元忠は、いかにもして降を乞ひ、孫次郎を助け、世にあらすべし。若叶ばざらんに於ては、其時こそ限りなれと、一途に心を取定め、鎧甲を脱ぎ、太刀刀を帶せず、下人をも具せず只一人、佐竹掃部が陣に駈入りて申しけるは、此度の軍は、元忠、出間、安並を生捕り、雜言仕りたる御咎に候へば、唯元忠が首を召され、孫次郎を御寛宥の御慈悲を仰ぎ奉候。此旨御披露憑入候と、頓首してぞ居た

りける。掃部熟と彼形粧を見、其演説を聞きて涙を流し、忠といひ義といひ、感歎するに詞なし。此上は我又身に代へても申許し、安堵せさせ奉らん。御心安かれと、一獻を進めてぞ返しける。此由御申上げければ、房家卿、安並、出間が供養に、津野從類を攻干すべしと思へども、畢竟彼等が働、私の宿意にあらず。主君忠節の爲なれば、我れ強に憤るべきにあらず。此度兵庫降參の體、忠臣なり義士なり。誠に武士の手本なり。宥免せずんばあるべからずとて、津野が本領相違なく、孫次郎にぞ給はりける。此勢に高岡郡攻めらるべしと聞えければ、太平、佐川、波川、片岡、能津等敵し難く、皆降參をしたりける。扱こそ高岡郡、悉く一條殿の御領になりける。其頃高岡に一人の獵師あり。狙ひ狩に出で、彼方此方と窺ふ所、大きな熊一つ、子熊二つ連れて出で、大石を引上げければ、子熊下に入りて、蟹蚯蚓やうの物を取喰ふ。獵師是を見て、矢頃少し延びたれば、如何にと思案する所に、大きな猪鹿、近々と出來る。木陰より鐵炮を以て狙ひ澄し、真只中を打ちければ、猪鹿驚き、大きに猛つて駈廻る。熊は鐵炮の音に驚き、持ちたる石を落したり。其儘石を引上げ見れば、子熊

は鮮の如くなりて死にけり。親熊大きに歎きけるが、猪鹿を見て、偕は此者の爲事とや思ひけん、飛んで懸る。猪鹿も亦、我を打ちたるは此者とや思ひけん、互に負けじと争ひしが、共に疲れて死にけり。獵師、熊猪鹿を拾ひ取りてぞ歸りける。友達來りて、扱々能き仕合かな。御所と同じ幸なりといひければ、何としたる事ぞと問ふに、されば津野殿は、戸波殿を亡さんとて、却て其身打負け給ふ。さらば戸波殿、津野を領し給ふと思へば、脇より御所取らせられ、夫が事になりて、高岡悉く御所の御領になる。其如く其方も、熊と猪争ひて、脇より利徳を得給ふは、誠に御所と同じ幸にあらずやといひてぞ笑ひける。兎犬俱斃、鵝蚌相持、田漁老父坐而利、之とは、斯様の事をや申すべき。御所とは、一條殿の御事なり。

本山縁組附吉田周孝が事

長宗我部千翁丸は、一條殿の口入にて本領に歸り、岡豊に在城して漸く成長し、永正十五年戊寅の春、十五歳にて元服して、即信濃守國親とぞ名乗りける。國親常に申

されしは、父の讎には、俱に天を戴かずといふに、敵藩牆の内において、肩を並べ膝を合せぬ計にて、年を送る事こそ口惜けれ。されども吉良・太平・山田・本山、素より親昵の上に、太平は津野・片岡と組し、吉良・本山は山田・香宗我部と一家の親をなす。多勢の上に、一味同心の者多し。我は獨夫に等し。尤一條殿の取持にて、本領には歸れども、本山等が、我に心を許すまじければ、行末都て覺束なし。何とぞ一人なり共、父の敵を討たばやと、明暮肺肝を碎きけれども、其甲斐なく年月を送りける。爰に吉田の領主吉田備中守周孝とて、智謀勇猛の士あり。其先祖を尋ねれば、大職冠鎌足の末裔、鎮守府將軍秀郷公六代の孫、三河國の住人守部主馬首助、清本姓を改めて首藤と號す。其男枝頭助道、其子親清、皆首藤といへり。親清が男義通、相模國鎌倉郡山内の庄を領して、山内と申しき。是より子孫、或は首藤と稱し、又山内とも號しける。義通より四代の孫、瀧口三郎俊氏・同四郎俊宗兄弟、同國山内吉田を領して、吉田とも申しけり。然るに俊氏・俊宗は、平家の方人たるに依つて、平氏滅亡の後、流弊の身となり、尾張國に蟄居す。其子孫足利將軍尊氏に屬して軍功多く、土佐國長

岡郡にて、十四村をぞ領したる。其内に吉田の邑は、我事名の地なればとて、即其所に居城を構へ、數代相續き、今周孝迄は十二代とぞ聞えし。昔は家榮え威勢強く、國に又肩を雙ぶる者もなかりしが、數代の間親族に押領せられ、又は敵に狹められ、家漸く衰へ、今は居城吉田の近邊のみを領して、昔を忍び時節を待ちてぞ暮らしける。吉田と岡豊は、其間僅に一里計なれば、國親、吉田を語らはん爲、常に音信をぞなしにける。猶も親くなる事を、立てんとや思ひけん、媒を求め、國親が妹を、周孝にぞ嫁せしめける。されば互に兄弟の思ひをなし、厚く親みをなしければ、國親、父の敵を討ち、會稽の恥を雪がん事をぞ談じける。周孝其志を感じて、明暮軍評定の外は、他事なしとぞ聞えし。周孝いひけるは、古人の詞に、天の時は地の利に加かず、地の利は人の和に加かずといへり。大事を思ひ立つものは、人を懐くるを先とす。人を懐くるは、慈悲を先とすとて、田畠の高免を避け、課役を許し、法度を緩くし、鰥寡孤獨の便なきには、住家を定め衣食を興へ、偏に子を憐れむ如くなりければ、如來の再誕とぞ仰ぎける。されば近郷の民百姓はいふに及ばず、諸士招かざるに隨ひ付く事、草

長宗我部
國親、吉
田周孝と
結ぶ

の風に靡くが如し。勢漸く盛なれば、秦家を興立せん事、此人なくてはと、いはぬ者こそなかりけれ。一條殿此由聞召し、家臣を召して仰せけるは、長宗我部將監兼序は、吉良・太平・山田・本山が爲に亡され、國親孤にてありしを、房家が口入を以て、本領に返しぬ。信濃守幼稚の時の志を思へば、親の敵を餘所に見て暮らす者にあらず。され共無力にして、年月を送るなるべし。然るに吉田備中守と諸事談じて、近邊の諸士郷民を語らひ寄ると聞く、備中守は隱なき智謀勇氣の者なり。彼と共に、終に旗を立てん事疑なし。然れば弓矢の騒ぎとなりて、國亂れ民苦しみ、治るべからず。何卒彼等和順せしめ、國家安養になさばやと思ふなり。其方便といつば、先づ本山は、國親が敵の隨一なれば、國親が娘を、本山左近大夫茂宗が嫡子、式部少輔茂辰に縁を組み、父子の親をなさしめば、互に和順すべし。吉良・太平・山田との和談は、猶安かるべし。然らば國治長久なるべし。但讐敵の事なれば、國親心得難く思ふべけれ共、我媒せば、よも違背はすべからず。此事いかいあるべきと仰せければ、諸臣皆、誠に餘義なき御誼に候。是に越えたる事候べからずと、一同にぞ申しける。さあらば岡豊

へ通達せよとて、爲松左馬助を使者として、委細に仰遣はさる。岡豊に至りて國親に對面し、事の由を述べにける。國親心得す思へ共、誠に有難き御志、御請は追つて申上ぐべし。先づ御休息あるべしと酒肴を調へ、様々に饗應し、儉に周孝を呼びて、斯様々々の次第なり、いかゞ計ふべきやと宣へば、備中守、是は天の與ふる所なり。年來の御本望遂げらるべき瑞相なり。我れ思ふ仔細あり、急ぎ御同心の御返答あるべしと申しければ、國親悦び、爲松に近付き、同心の御返事をぞし給ひける。爲松も面目施し、急ぎ幡多へ立歸り、此由申上げければ、大納言殿御悦喜甚しく、即本山へも仰せ達せられ、茂宗は、信濃守の威勢漸々に募るを聞き、行末いかゞあるべきと、安き心もなき折節なれば、渡りに船と悦び、頓て同意して、婚姻の儀をぞ定めける。爰に尾立の城主中内記は、秦氏にて、長宗我部が氏族なり。初は中島と名乗りしが、何れの頃よりか島を略して、中を氏とす。祖父下野守、本山に屬してより、無二の忠義を盡しけり。内記此度の縁組を聞きて、急ぎ本山へ立越え諫めけるは、斯る事と承候。是禍を招るゝ所とこそ存じ候へ。其故は、御當家は、長宗我部が爲には、怨讐の

張本にて候へば、縦ひ御縁を結ばれ候共、争か遺恨を忘れ候べき。古より、父子兄弟の合戦珍しからず。況や一族に於てをや。察するに御當家は、國中一の大家と申し、殊更味方の歴々多く候へば、怨を報せん事を存すと雖叶はず。又其身の行末も覺束なく、一條殿へ頼り所縁となり、御當家を見賺さん爲の方便なり。其上國親と内縁を結ばれて候はゞ、味方に狐疑生じ、諸方の合戦破れ候べし。然れば自然の時、援兵の便候はず。彼といひ是といひ、岡豊は腹心の病なり。急ぎ御約諾を變せられ、此度縁邊の悦にて、上下油斷すべし。此時急に押寄せ、討取り給ふべしと詞を盡し諫めけれども、一度約をなしたる上は、再び變改するは本意にあらずと、茂宗許容し給はざりければ、内記深く歎き、病と稱し、出仕を止めて居たりけるが、後に思合はする事にぞなりにける。其頃又香宗我部出羽守秀義といふ人あり。香美郡香宗の城主なり。備中守、本山に約諾しける國親の娘を、出羽守に嫁せしめんとぞ言送りける。秀義悦び許諾して、婚禮の用意をなし、吉日良辰を選び、既に日數を算ふる所に、又引替へて本山へぞ嫁せしめける。秀義此由を聞き大きに怒りて、我れ國親に欺か

る、事こそ無念なれ。所詮國親を打果し、此鬱憤を晴らさんと、馬物具と犇きける。此由岡豊へ聞えければ、備中守急ぎ剃髮染衣の姿となり、香宗へ立越え、是れ全く國親が所爲にあらず、周孝が荒卒の致す所なり。罪を謝せん爲に男を止め、法體黒衣になり、首を延べ推參致候と、人を以て申入れければ、秀義此方へ呼び、對面せんと吉田を請じ入れて、饗應禮謝してぞ返しける。是より吉田は、實名を法名とし、備中入道周孝とぞ申しける。出羽守、此上は國親に恨なし。本山は年來親しき中なれども、我面目を失ふ上は、音信通路は是迄なりと大きに怒り、遂に香宗我部・本山合體の好を翻し、いつしか胡越の隔をぞなしにける。夫より雜説區々にて、吉良・太平・山田・本山、無二の同心皆破れ、己れくが城を守りて、互に威をぞ争ひける。周孝是を聞きて、年來待つ所の時節到來なり。今は諸方援兵の恐れなし。急ぎ御旗を立て給ふべしと勇めければ、國親悦び思立ち給ふ。其後程なく、國中の諸士を隨へ給ひにけり。其功偏に、此の謀より出でければ、誠に秦家の良雄なりと、國親重く饗應し給ひければ、家中の尊崇斜ならず、次第に一族繁昌し、嫡子次郎左衛門尉重貞・二男孫

長宗我部
國親の威
振ふ

次郎周重・周孝が舍弟備後守重俊、大備後と稱す。其子伊賀介重康・其弟江村備後守親家、是を小備後と號す。父子兄弟其外一族、皆庄園數々所給はりけり。彼吉田・江村を、大備後・小備後と申すは、其頃江村備後守親政とて、長岡郡江村の領主あり。彼は長宗我部の元祖、秦の能俊が三男宗貞、江村の庄司に養はれ、子孫連續して、今親政迄は、十八代とぞ聞えし。親政女子有之男子なし。吉田備後守が二男を養ひ、娘を妻せ家を繼がしめ、己は薙髮隱居して名をも譲り、江村備後守親家とぞ名乗りける。父子同名なればとて、吉田をば大備後、江村をば小備後とぞ申しける。

土佐物語卷第一終

本山縁組附吉田周孝が事

土佐物語卷第二

山田治部少輔放肆の事

爰に山田治部少輔大中臣元義といふ人あり。香美郡山田郷二千貫の領主、楠目に在城す。數十代此所を領しければ、門葉恩顧の者共、領内に充滿す。其家臣には、賀茂の城主西内常陸、元は細川氏なり。談議所の城主山田監物、其外奥宮傍士、川久保加藤・北村・江本とて、仁義勇智の輩是を守護す。元義榮耀の餘りに、猿樂を集め能を好む事甚し。凡善となく悪となく、上に倣ふ下なれば、家中の諸士亂舞遊興に長じ、月に酔ひ花に狂し、武の道漸く廢りけり。監物常陸是を歎き、元義を諫めけるは、治世に亂を忘れずと申すは、先哲の戒なり。況亂世をや。近年互に隙を窺ふ折といひ、長宗我部國親の父兼序は、本山殿の爲に亡されて候。其時御當家も、吉良殿・太

山田元義
放恣

平殿と同意にて、御加勢の事に候へば、國親、怨敵と思はれぬ事は候べからず。然れ共彼三家并香宗我部殿・津野殿等と、玉を貫きたる如く、隔なき御親みに候へば、援兵の便候故に、國親手指す事なく打過ぎられ候ひぬ。然るに不慮の事にて、諸方の合體破れ候へば、國親いかなる所存も測り難し、御油斷あるべきに候はず。猿樂を召放され、武義の御勤候へかすと、時々諫言をなしけれども、良藥口に苦く、金言耳に逆ふ習、元義曾て聞きも入れず。今何事か眼に見えて、斯る事をいふらん。國親が、警敵の張本本山とさへ和順して、父子の親みをなす。何に依つて其事を捨て、枝葉に懸り、近きを除きて遠きに寄らんや。用もなき賢人顔はむづかしくて、兩人出仕の時は、元義虚病を構へて對面なし。驕侈日に長じ、遊興止む時なかりしは、偏に家運の末とはいひながら、うたてかりし事共なり。されば同氣相求め、同聲相應する習、讒諂面諛の佞人傍に徘徊し、都て常陸・監物を、惡様に讒言しける程に、兩人此體を見て大きに歎き、此上は力なし。當家滅亡遠きにあらずと、世を味氣なく思ひ取り、出仕を止めて、蟄居してぞ居たりけり。長宗我部信濃守此由を聞き、家臣を集

めて宣ひけるは、父の讐と俱に、日月の光りを戴く事、武士の本意にあらずといへども、第一には、一條殿の媒介なり。第二には、彼等は多勢の上に味方多し。我は小身にして、而も猛夫なれば、時節を待つて暮らす所に、周孝の謀にて、諸方の合體破れぬれば、今は援兵の恐なし。されば山田治部少輔は、寇讎の張本ならずといへども、本山吉良・太平と、一味同心の人なれば、先づ山田を討つべしと思ふなり。幸彼は近里にありて、逸遊を事とし、武備忽なり。先づ是を討つて其勢に乗つて、近郷に勢を出すべしと宣ひければ、吉田大備後進み出で、仰の趣、御理に候。去ながら山田の家臣西内常陸と申す者、勇氣ありて智慧深く、禮讓厚くして人を懐け、軍士を使ふ事手足の如し。彼が候はん程は、山田を亡さん事難かるべう候。先づ謀りて常陸を討取り、其後山田に御馬を向けらるべし。但常陸を討つ方便は、重俊謀り候べしと申しければ、國親信腹し給ひ、宜しく計らへとぞ許されける。

山田合戦の事

山田の士に、加藤飛驒といふ者あり。元義の近習に仕へて、身ぞ委ねければ、主君の覺も厚かりしに、不慮の失ありて勘當を得、西内常陸に預けられて、賀茂の城にぞ居たりける。飛驒が家僕寄る方なく、野田の片邊に忍び居たるを、吉田大備後尋出し、不便を加へ、衣食を與へて扶助しけり。大備後彼者を呼出し、飛驒は近日誅せらるべき由其聞えあり。我常に飛驒に親しければ、知らするなり。汝賀茂へ行き、飛驒に告知らせて、何とぞ常陸を討つて此方へ來られよ。本領はいふに及ばず、加恩を申與ふべし。此旨偷に言聞かせよと申しければ、彼者涙を流し、手を合せ悦び、頓て賀茂へ立越え、加藤に斯くと告げければ、飛驒打うなづき、さらぬ體にて居たりけり。其夜しも雨降りければ、常陸若士を呼集め、碁を打つて居ける所を、飛驒給仕に事寄せ立寄り、一太刀に討つて燈を消しければ、士共大きに驚き、遁すまじとはいひながら、暗さは暗し、互に飛驒よと心得、打合ひ切合はするもあり。彼方此方へ逃ぐるもあり。上を下へと返しつゝ、前後不覺に騒ぎける。其隙に飛驒は難なく立退き、佐古村を経て、野田の城に立越えければ、岡豊に參じ、爾々の由を告げたりける。國親

大きに悦びて、時既に至りぬと、五百餘騎を引率して、天文十二年の秋、山田へぞ押寄せける。一手は吉田大備後・同次郎左衛門・江村小備後・幸名丹後・中島大和を先として二百餘騎、坂折山の北の方に打向ひ、國親は三百餘騎を隨へ、國分寺の前を、東へぞ向はれける。山田には思ひも寄らず、例の猿樂を召し、能を催しければ、見物の男女、擧る事斜ならず。元義自ら江口の役にて、曲舞も既に半に及びけるに、元來名を得し堪能なれば、見物の上下、耳を澄し目を驚かし、感に堪へ餘念なき所に、百姓遠しく進み走り來りて、岡豊より、軍勢押寄せ候ぞ。急ぎ出合ひ給へと、聲々に呼ばはれば、樂屋芝居に充滿したる者共肝を消し、是はと一度に立騒ぎ、我先に逃出でんと争ひて、押しつ押されつ犇く程に、老人女童、押倒されたる者に轉び懸り、彌が上に重なり、足腰を踏折られ、或は己が抜きたる太刀刀に、突貫きて喚き叫ぶ。元義は、女面に鬢かけながら走り廻り、前後不覺に見えしかば、家中の上下、周章騒ぐ事限りなし。流石武士の印にて、鎧は着ても甲を着ず、弓は持てども箭を知らず、鎗よ太刀よと犇けども、軍しつべきとは見えざりけり。治部少輔は漸々に甲冑を帶し、馬に助

け乗せられ、門外に出でられけれども、軍の下知もなく、只呆れたる風情なり。斯る所に向より、百騎計左右に備へ、旗一流押立てさせ、馬を閑に歩ませ來る武者あり。見れば山田監物なり。本陣近く馭寄せ、大音にて、抑是は當今に仕へ奉る臣下なりと、押返し三返謳ひ、馬より飛下り長刀杖に突き、四方をきつと見渡し、大腰拔の猿樂士は何所にあるぞ。今の用に立つべからず。敵より先に踏殺せ。日頃某申せしは是なり。思ひ知り給ふかと、大の眼を瞋し、治部少輔を睨みければ、元義兎角の詞なく、俯目になりておはしける。監物駈廻りて、軍の手分をしたりけり。元義は、奥宮傍士を先手として、國親に馳向ふ。治部少輔の伯父山田丹波守并加藤・北村・江本は、吉田・江村・中島に向ひ、互に鬨の聲を上げ、足輕の鐵炮軍を始むる程こそあれ、兩方互に入亂れ、鎗を削り鏑を割り、切先より火を出し、千日一時と戦ひける。元義は鬨の聲に驚き色を變へ、先手の軍には目もかけず、はや落支度のみして、旗打絞り、遙に遠見してぞ居たりける。國親此旗色を見て、先手の軍を餘所になし、元義の旗本へ、眞一文字に打つて懸る。大將臆したる事なれば、士卒いかに進むべき。戦は

んともせず、十方に散亂す。山田の先手是に氣を失ひ、しどろになりて見えければ、爰を揉めや者共と、吉田・江村・中島、駈出でく下知すれば、なじかは少も猶豫すべき。一度に咄と突懸る。山田勢遂に打負けて、上村の前山を経て、楠目を指して引退く。此時より此所を陣山と申すなり。戦死の者を、其所に葬りける。今四塚といふは是なり。其日は暮れて翌日、山田監物、今日を最後とや思ひけん、黒糸緘の鎧を着、三枚甲の緒を蠅頭に結び、其端を切つて捨て、手勢百五十騎を随へ、大手より五六町南、西伏原の大塚に屯す。寄手には江村小備後先陣として駈向ひ、一矢射違ふ程こそあれ。曳々聲を上げ、攻太鼓を打ち、黒煙を立て、相戦ふ。終に兩將端なく渡合ふ。監物是を見て、それなるは小備後か、問ふは監物かといふより早く下立ち、監物、長刀打振りて切つて懸れば、小備後は太刀を以て、人交ひきあはもせず切合ひけり。暫く勝負見えざれば、いざ組まん、心得たりと、太刀長刀をからりと捨て、押雙べて組む。互に聞ゆる大力、曳々と踏む力足に、大地も揺ぐ計なり。小備後、終に監物を討取りけり。元義是を見て、駒引返し逃げられければ、諸勢一度に崩れけり。加藤・川

山田元義
降伏
元義死去

久保・奥宮・傍士・北村・江本等、いつの爲に命を惜まん。引くな引かじと詞を交し、勝誇りたる勢に割りて入り、西東北南捲り立て、切つて落し突落し、八方亂して戦ひけるが、大將の行方覺束なしとて、城中へ引いてぞ入りにける。寄手透間なく攻入りしかば、大手をも打破られ、三の丸の坂下に、暫し支へて戦ひしかども、其所をも固め得ず、北の出丸に引籠りけるが、搦手より廻る勢に破られ、元義僅の勢にて、山傳ひにらぶににらぶ生を指して落ちられける。生四十餘村の者共、數代の領主なりければ、厚恩忘れ難く、深く隠して勞りけれ共、國親の威風に恐れ、後難をも憚る者もありと聞えしかば、元義、南岡左衛門太夫に所縁の由緒ありければ、南岡に便り降を乞はる。治部少輔は懦弱にして、恐るゝに足らぬ人なればとて命を扶け、生にらぶの窪にぞ置き給ふ。後に亂心狂氣して、程なく死去せられけり。山田に萬松山豫言寺にいふ寺あり。元義先祖の菩提寺なりければ、此寺にぞ葬りける。此時大谷左馬介が大谷の城も歿落す。此大谷と申すは、山田同氏の親族なり。父は神谷出雲守大中臣道直とて、吾川郡神谷に居住せしが、大永の頃、香美郡佐古の郷六ヶ村を領し、大谷に移住して、

大谷を姓とす。左馬介、山田の餘黨なりしかば、遁るべきやうなく、固く守りて防ぎしかども、多勢に無勢叶はず。終に攻落され、其子隼人諸共に、彼方此方漂泊して、當國安藝の領主安藝備後守、又は幡多一條家を憑みけるに、彼兩家も程なく亡びて、立寄る陰なく、伊豫・播磨・紀の國を經廻り、又土佐へ立歸り、安藝・奈半利の片邊に住みけるとぞ聞えし。

常通寺造立の事

信濃守國親は、山田治部少輔を打亡し、年來の宿望を遂げ、降人を扶け、寺領社領先規の如く宛行ひ、郷人共本の如く還住せしかば、諸士招かざるに隨ひ、攻めざるに靡きて、威勢日を逐うて盛なり。國親宣ひけるは、父兼序、本山が爲に討たれ給ひし時、我れ僅六歳なりしを、近藤が忠節にて、萬死を出で一生に會ひ、一條殿の恩恵を得、本領に歸り、再び家を興すといへども、父の讐と、親友の如くにして年月を送る事、先祖の名を穢し、我が生前の面を汚し、人口防ぐに所なし。然りといへ共、無力なれば心に任せず。短慮は却て不覺なりと悟り、張公藝が、百餘書きたる忍の字を、晝夜胸臆に積み重ね、今年天運循環して、怨敵の張本ならずといへども、治部少輔を退治して、亡魂の鬱憤を少し晴させ候事、生前の大慶、何事か是に如かん。然れば尊靈菩提の爲、一字の伽藍を建立して、追善をなさばやと思ふなり。幸賢法山悉地院安祥寺は、御菩提所なれば、此寺を再興すべし。是は昔聖武天皇の御願行基の開基なり。其後代々、帝王の勅願所たり。延喜式主稅式に、安祥寺寶塔料五千束と云々。然りといへ共、澆季濁世に及んで、勅願の沙汰もなければ、私の造替も憚りなしとて、天文十三年の春より、遠近の大工小工を集め、斧鉞を廻し繩墨を正し、佛殿・法堂・庫裏・僧堂・山門・惣門・鐘樓・浴室・輪藏・數多の寮舎廻廊迄、不日の經營事成りて、金銀を鏤め、善盡し美盡しければ、七寶の淨土、眼の前に移り、覺譽常通の菩提寺なれば、安祥寺を改めて常通寺と號す。院號山號は本の如し。同十五年の夏、成風の功終りて、春惠法印を住持とす。是常通寺の元祖なり。斯くて數多の僧侶、日夜の讀經怠慢なければ、常通尊靈、九品上乘の臺に至り給ふらんと、有難くぞ覺えける。さるに依つて

此所を、常通寺島と名付けたり。其後子息宮内少輔元親、居城を土佐郡大高坂に移され給ひたる時、常通寺をも、同郡石立村岩戸に移して、造立ありしが、其後浦戸へ城を移されたる時、又此寺をも引取らるべきに極りける所に、其頃より太閤秀吉公、朝鮮御征伐に極りて、國々も鬧しく、御平均の後には、程なく元親卒去ありて、上下歎きけるに、又子息盛親、不慮の逆徒に組し、領國を召放されければ、其沙汰もなくなりし所に、山内對馬守一豊、當國を給はりて、大高坂山を居城に定め給ひ、彼寺を、小高坂村へ移されて、國土安穩、米穀豊饒、萬民快樂の祈願所に定めらる。夫れよりして岩戸をば、常通寺と申すなり。

岡豊城中楠折る附八幡御託宣の事

天文十三年二月五日の夜子の刻計に、不思議の事こそ候ひけれ。岡豊の城中に大きな楠あり。周一丈餘にして、長十餘丈に及び。緑の梢四方に蔓り、幾春秋をか歴たりけん、類もなき大木なり。風も吹かぬに、中より折れて倒れける。其音天地に響き、太山も崩れ、坤軸も摧けぬるか、上下男女肝魂を消す。國親人をして見せしめ給へば、爾々とぞ申しける。是直事（まことごと）にあらず。天いかなる凶瑞をか示すらんとて、其頃天文卜筮に名を得たる池澤某を召して、考へさせらるゝに、池澤謹んで申し上げけるは、耆策を取るに及び候はず。是れ御當家興隆の奇瑞なり。其故は、今文字に就きて判断するに、楠は、木に南と書き候。木は東なり。然れば東南の方亡ぶべき瑞相にて候。時今春の半にして、最東南強盛の折なるに、兩方倒るゝ事、天の與へ給ふ時至れり。秋節來り、殺伐の氣を得て、西北より是を討ち給は、敵は木の葉の如く散り失せ候べしと申しければ、國親大に御感ありて、當座に恩賞を給はる。其後國親宣ひけるは、池澤が占を考ふるに、全く私意憶見の及ぶ所にあらず。偏に八幡大菩薩の當家興復を示し給ふ御告と覺ゆるなり。吉日良辰を選び、八幡宮にて臨時の祭禮をなし、神慮をすゝしめ奉るべし。其用意すべしとありければ、家臣承りて、社司神主に申付、其支度をぞなしにける。斯くて其日になりければ、國親社參し給ひ、岡豊の貴賤老若男女、社頭庭上に群集せり。八人の八乙女、五人の神樂男、袖を

返し幣を捧げ、神樂を奏し、神慮をすゝめ奉る。斯る所に庭上に、年十二三計なる童ありしが、飛ぶともなく走るともなく、社壇の階に駈上り、我は是れ正八幡大菩薩なり。我を此地に勸請して、上下渴仰の運はこびをなす事、悦びに堪へたり。我れ亦守らずんばあるべからず。就中國親、父祖の敵を討ちて、彼鬱憤を散せん事を思ひ、日夜己を忘れて、寢食を安くせぬ志、誠に不便の至りなり。然れども前生の果を放れず、時至らずして年月を過しぬ。今既に家を興すべき時節到來なり。されば此度楠の奇瑞を顯し、池澤をしていはしむる所に、國親早く其理を察し、臨時の祭をなして、我を勇むる事、尤神慮に叶へり。急ぎ南方より初めて、四方へ馬を出すべし。我れ前後に附添へて、力を加ふべし。見よ、信濃守が向ふ所、隨はずといふ所なく、攻むる所、傾けずといふ事あるべからず。行末猶守るべし。憑もしく思ふべしと、四方を見廻し、神は上らせ給ふと覺えて、彼童子も庭上に飛下り、倒れて寢入りたるが如くして、暫くありて起上り、何心なくぞ見えたりける。諸人大きに驚き、皆々頭を傾け、禮拜をぞなしにける。國親餘りの有難さに、感涙を止め兼ね、又悦の神樂を奏し奉り、田畠數個所寄進し給ひけり。岡豊の上下、勇み悦ぶ事限りなし。此事隠れあらざれば、四方の諸士百姓に至る迄、大きに恐れ戦くとぞ聞えし。

大津城落去の事

長岡郡大津の城主天竺孫十郎は、其先祖知れず。一説に天竺は城地の名なり。元松族なりといへども、其身は無位無官にて、一生終りけるといふ。又一説には、大津天竺の城主細川肥前守、其男幼名は孫十郎、後には左衛門太夫と號すといへども、國俗は、只後迄も、孫十郎といひしとかや。又或説に、細川天竺禪門、暫く此所に在城ありければ、時の人天竺殿と申しき。それより國俗誤つて、此城主を、代々天竺殿と唱へ來るともいふ。其是非を知らず。此禪門は、細川氏の嫡家なり。貞治三年正月廿七日、豫州湯月山にて、河野六郎通堯が爲に、討たれ給ひし人なり。今孫十郎迄は、七代といひ傳ふ。大津と岡豊は、僅に一里に足らぬ程なれ共、兩方常に不和にして、絶えて音問をなさず。若事もあらば、彼を亡し我有にせんと、互に虎狼の心を狭み、

時節を待つてぞ居たりける。凡そ上に従ふ下なれば、大津岡豊の士はいふに及ばず、郷民百姓に至る迄、互に婚姻を結ばず、音信を通せず。若し道にて行逢ふ時は、目を怒らかし口を歪め、臂を張り睨み合ひてぞ過行きける。斯る所に岡豊八幡の御神宣、上下男女語り傳ふる程に、遍く隠れなかりければ、國中の諸士縁を求め便に附きて、詞を卑くし禮を厚くして、岡豊へ近寄り親まん事を望みける。中にも大津は隣里といひ、而も岡豊の南方なれば、郷民共は大に恐れ、住家を捨て、立去る者もありしとかや。國親此由聞き給ひ、さらば神託に任せ、先づ南方大津を討たるべきにぞ定まりける。此大津の城と申すは、二十町計東に、的り池とて、五十間四方の泉あり。涌出づる事、沸湯の如し。其流れ滔々として、城の東北の麓を、東より西に流れ、深き事計りなし。切岸高く、屏風を立てたるが如し。西は岩崎とて、前は漫々たる入海なり。鹽屋崎・津の崎・岩崎とて、三の崎の其一なり。湖の満干、風の順逆に依つて、入海ながら、船の往來自由ならず。漁獵を業とする船人も、胸を冷し肝を消す事多し。昔日紀の貫之、當國の任果て、歸京の時、國人追來りて、「をしと思ふ人や止るとあ

長宗我部
國親大津
城を攻む

しかものうち群れてこそ我は來にけれ」と詠みし、鹿兒の崎まで十七八町、西南山傳ひに續きたれども、前も後も海なれば、西北の里よりは、船ならでは行交ふ道なし。扱また城の東南は、山重りて道細く、人馬の駈引自由ならず、東北のみ平地にて、吉原・篠原・鑑の野迄續きたり。追手には、おめての橋とて、北南大橋を架けたり。此橋を引く時は、船なくては越ゆべからず。誠に堅固の城地なり。曾我・井上・横山・依光・宮地・坂本などいふ究竟の士、常に武藝を好み、軍法に訓練したる者共、敵寄すると聞きて少しも騒がず、人數を賦り手分をして待懸けたり。孫十郎は、宮地・依光を隨へ、百五十騎、東の山に陣取りたり。曾我・井上・坂本は、北の廣地に打出で、三百五十騎、段々に備へたり。さる程に國親は、久武・肥後・吉田・大備後・中島・大和を先として、八百餘騎にて押寄せ、互に旗を進め、攻鼓を打つて、鬨の聲三度上げ、鐵炮を打ち、弓を射違ふ程こそあれ、拔連れて入亂れ、追つ捲つ戦ひけるが、多勢に無勢叶はず、天竺が憑み切つたる長崎・井上を始として、究竟の兵、或は討たれ深手負ひ、残り少なくなりて、城の内へぞ引取りける。城兵共橋を引かんと、川端に出でて犇く所を、大

勢攻寄せ、鐵炮を打懸くれば、皆城中へ逃入りけり。寄手續いて橋を越え、大手の門を破らんと、喚き叫んで攻めたりける。孫十郎、今は偏に討死と思ひ定め、一子兵部少輔に向つて、汝は曾我伊豆を召連れ、急ぎ落行き、京都に上り、一族親友を頼み、大軍を催すべし。我は讃岐へ立越え、親族を語らひ、會稽の恥を雪ぐべし。早疾く急げとありければ、辭する所なくして、兵部少輔は鎧を脱捨て、微服して主従一人、南の山傳ひ、片山指してぞ落ちられける。是を限りの憂き別れ、思ひやられて哀なり。夜須浦にて、商人船に便船乞ひて、海路恙もなかりければ、程なく京着ありしとかや。斯くて寄手は、追手の門を打破り、大勢亂れ入りければ、何を期すべき命ぞと、主従一所になりて、四方八面に切つて廻れば、寄手怵へず、門より外へさつと引く。城兵僅三十五騎にぞなりにける。孫十郎申されけるは、旁日來の好を忘れず、此際まで附纏ひ、死を共にせんとの志、中々いふに詞なし。我一所に討死して、旁の志を死後に報すべし。構へて自害する事なかれ。多年の本望今日にあり。一騎にても敵を討つを以て、勇士の本意とす。我れ信濃守と組み、勝負を決せばやと宣へば、何れも、

こは有難き御誼に候。此年月御恩澤を蒙り、妻子を扶持し、身の安樂を極め候事、今生一世の内には、争でか報じ奉るべき。冥途黄泉迄も御供仕り、二世の忠勤候てこそ、少しは報謝致候べけれ。天晴國親を射て、閻魔の廳の土産に仕るべしと、聞くも潔く、其形粧見るも涼しくぞ覺えける。斯る所に、寄手四方より亂れ入りて、城中に充滿みちみけれ共、元來命を塵芥に比し、名を金玉に倣はんと、思ひ設けし事なれば、中々騒ぐ氣色なく、鳴を閑めて息繼ぎ居たり。寄手是を見て、押取り巻きて討取らんと、一度に咄と駈寄するを、卅五人の兵、會釋もなく真中に駈入りて、切れども突けども事ともせず、手負死人を乗越えて、面も振らず戦ひけり。寄手大勢討取りて、引退けば、又入替りて攻懸る。城兵、今は只七騎にぞなりにける。それも皆、疵を蒙らぬはなかりけり。孫十郎は、いかにもして國親に近付かんと、駈廻らるゝ所を、寄手大將と見澄しければ、爰に遮り彼所に横切り、我討取らんと進み懸るを、駈破つては打通り、打通りては駈入り、千變萬化して、主従一所にて、枕を雙べ討死して、骸を山溪の叢にぞ殘しける。天竺の城主七代にして、亡びぬることうたてけれ。國親宣ひけるは、

長宗我部
國親大津
城を陥る

敵ながら潔き舉動かな。流石名ある武士の死骸、捨置くべきにあらずとて、城の東に小山のありけるに、彼遺骸を葬り、岩崎の寺にて、大將を始め戦死の輩を、弔ひ給ひけるこそ有難けれ。

坂折山合戦附工文遅參の事

長岡郡けら介良の庄の地頭をば、横山九郎兵衛とぞ申しける。もと平氏にして、武藏の七黨横山の氏族なりしが、故ありて出家して、當國最御崎寺はつみさきの住侶なるが、剃髮以前に一子あり。其子孫、遂に介良の庄の城主となると言傳ふ。介良と大津は相並びて、其間僅に五十町に過ぎざれば、國親大津發向、曇りなく聞えける。家臣、横山を諫めけるは、國親山田を退治有之、勢漸く盛なる所に、八幡の御神託あらたなれば、益機を得て、南方大津へ出勢と承り候。當城も岡豊の南方なれば、大津落着候は、當地向あるは必定なり。彼方は多勢、此方は少勢、殊に神力擁護の鋒先に、争でか當り給ふべき。所詮此方より降を乞はせ給ひて、然るべしとぞ申しける。横山聞きて

打笑ひ、岡豊の神託の事、女童を誑す方便なり。取上げて評するに足らず。又軍は、將の謀と、時の運に寄る事なれば、勢の多少によらず、國親武勇なりといへども、何程の事のあるべき。又多勢といふとも、我工文將監と由緒ありて、親しく豫て申合せし仔細あり。下田は近邊にありて親しければ、彼是勢を合せば、岡豊の人數に、さのみ甲乙あるべからず。汝等がいふ如く、大津若し落去せば、介良下田へ出勢あるは必定なり。下田工文を語らひ、大津に加勢して、國親が後卷して、引包み討取るべし。油斷すべきにあらずとて、書簡を書きて、工文が方へぞ遣しける。斯くて其身は、取る物も取敢へず、下田へ立越え、所存の通りを談じければ、下田打うなづき、元來望む所なり。先んずる時は人を制す。片時も早く急ぐべしと、兩勢合せて三百五十騎、片山の東へ打出づる所に、大津は早や落去しぬと聞えければ、後卷の手立も相違したり。此勢計にては、あの大軍に向はん事いかゞあらんと、軍兵共固唾を呑みて、勇む氣色はなかりければ、横山申しけるは、凡戰場に臨む者、出づるを最後と思ひ定むる事勿論なり。敵大勢なればとて、是程首途したる軍に、敵の旗をも見ずして、

引返さんも無念なり。岡豊勢勝軍して、歸る所へ行向ひ、たばかり寄せて討取るべし。其方便といへば、旗を巻きて擔がせ、急ぎ行くならば、加勢か降參かと油斷すべし。近付き信濃守と見ば、一文字に駈入り、組んで勝負を決すべしとて、旗を巻きて擔がせ、捫みに採みてぞ急ぎける。案の如く岡豊勢、大津の軍に打勝ちて、勢ひ懸つて歸りしが、此有様を見て、是は下田・片山・池十市の者共、降參の爲め來ると見えたり。いさかひ果て、の捧ちぎり木、何の用に立つべきぞと、一度に咄と大笑ひし、篠原にて、其間三十間計になりて、旗をさつと差上げ、横山九郎兵衛・下田駿河守と名乗りて、篤真に打つて懸る。岡豊勢、こはたばかりぬと騒ぐ所を、縦様横様十文字に破りければ、岡豊勢若干討たれて、蜘蛛の子を散らすが如く、東西へ分れ、南北へ亂れて逃げにける。下田・横山は、暫時の軍に打勝ちて、坂折山に打上り、勝鬨をぞ上げにける。されども國親は、未だ大津に居給ひければ、下田、いざ此勢に大津へ押寄せ、國親を討取るべしといひければ、横山申しけるは、工文も追付け來るべし。一所に馳向ふべし。周章て急ぐべからずと、大様に控へて居たりける。斯くて打洩らされ

たる岡豊勢、追々大津へ逃歸り、此由を申しければ、國親大きに驚き給ひ、それ餘すなど、久武・中内・桑名等を先として、坂折山に押寄せたり。勝誇りたる下田・横山、なじかは少も擬議すべき。一度に咄と突懸る。岡豊勢立足もなく、四方へさつとぞ散りにける。下田・横山、透さず國親の旗本へ、眞一文字に駈込み、火花を散らして戦うたり。幸名・久武返し來り、中に包みて攻めければ、下田・横山、心は猛く勇めども、前後の敵に揉立てられ、残り少なに討なされ、南を指して引退くを、岡豊勢遁すまじと追懸くる。國親下知して、長追なせそと、直に岡豊へ歸陣あり。爰に工文將監は、約議の如く、徳善を立ちて急ぐ所に、物部川の水深く、諸軍渡り兼ねて、彼方此方とする程に、相圖の時刻押移り、坂折山に來てみれ共、敵一人もなし。唯今軍ありと見えて、手負死人は數を知らず、算を亂して、血は涿漉の川をなせり。工文、扱は遅なはりぬ。横山が心底の恥かしさよ。一軍してこそ申披かめ。但敵は大勢、此方は無勢、殊に敵地の事なれば、只潔く討死せんと、馬より下りて、軍配團を腰にさし、大長刀を取つて眞先に進み、坂折山の西の方に、旗押立てさせ、鬨の聲三度上げ、敵遅しと待懸

けたり。岡豊へは廿町計隔てたれば、城兵是を見て、扱もく、世には命知らずのあ
るものかな。愚人、夏の虫、飛んで火に入るとは是なるべし。此大勢の中へ、あの僅
なる勢にて、來る事の不敵さよ。我討取らんと争ひける。信濃守聞き給ひ、いやく
輒く討取らるべき敵にあらず。彼様子を考ふるに、下田横山と、一味同心の人と見
えたり。障る事ありて遅參して、先度の戦に合はぬ事を恥ぢて、一軍と望むものな
り。あの小勢にて、敵城近く來りて、戦を好む程のものなれば、十死一生と思ひ定め
たるなり。小勢なればとて侮り惡し。殊に此人は、隠れなき勇者なり。たとひ大勢
を以て打勝つとも、味方に手負死人多かるべし。所詮一人も出合ふべからず。日の
暮るゝを待つべし。然らば彼、いかなる方便にやと不審すべし。日の暮るゝに及び
て、扱は夜討の支度なり。敵は多勢にて、所案内者なり。味方は小勢にして、不知案
内なり。夜討に逢ひては、以の外の不覺を取るべし。敵城近く日を暮らしたるを譽
にして、引返さん事疑なし。戦はずして勝つを、良將とするぞと宣ひける。案の如
く將監は、敵城近く來りて、待てども敵一人も出合はず。扱は我れ小勢なれば、何程

の事のあるべきと思ひ侮りて、捨置くが無念なりとはいひながら、流石城へ寄する
事も叶はず。兎角する程に、日既に夕陽に及びければ、扱は夜討の爲に、日を暮らす
と覺えたり。案内知らぬ敵地にて、大軍を引請けては、却て不覺を取るべし。敵城
近く入りて日を暮らしたれば、一面目なきにあらず。さらば引取るべしとて、閑々
と徳善を指して引返しける。將監が勇氣、信濃守が思慮、智あるも智なきも諸共に、
感せぬはなかりけり。

下田城落去附一宮神職降參の事

斯くて岡豊には、近日介良を攻めらるべきと聞えければ、横山が家臣共、兎角國親に
敵對は叶ひ候べからず。只此方より降を乞はせ給ひ然るべしと、理を盡し諫めけれ
ば、横山實にもと思ひ、人質を出し降參して、幕下にぞ屬しける。下田聞きて大きに
怒り、彼程の不覺人と知らずして、年來親みけるこそ悔しけれ。某に於ては、城を枕
にして討死すべし。皮籠童が下手には、得附くまじとぞ申しける。是は其先永正の

頃、岡豊の城歿落の時、國親未だ千翁丸といひて六歳なりしを、近藤某、皮籠に入れ、幡多中村に落行きし故、斯くいひけるとぞ聞えし。國親此由聞き給ひ、憎い下田が雑言かな。さらば攻めよとて、久武肥後・福留隼人を大將として、其勢八百餘騎、既に岡豊を打立つ所に、老尼一人、隼人の前に來りて、畏つて申しけるは、是は下田の百姓の妻にて候。夫は死して、常陸と申す一子を持ちて、杖柱とも憑み候所に、去年の秋、年貢所納遲滞したる科に、是非なく殺されて候。明日をも知らぬ老の身の、寄る方なき儘に、所縁の者に扶けられ、今日迄存命候。此度下田へ御旗向けられ候はば、自ら城中へ手引致し、御手をも碎かれず、城を燒崩させ、下田殿に思ひ知らせ、一子が供養に備へ、老尼が恨を晴し度候と申しも敢ず、聲をあげてぞ泣きにける。隼人も涙を流し、即國親へ、此の由申しければ、信濃守大きに悦び給ひ、究竟の若者三人、老尼に添へてぞ遣しける。城中に火の手上らば、攻入れとて、軍兵二百五十騎、福留隼人を大將にて、片山・衣笠の山陰に、十人廿人五人七人忍ばせ、相圖の煙を待ちにける。斯くて老尼は、三人の男を下人に仕立て、一人には、袋に衣裳を入れて持たせ、

二人には、雜掌と思しき物を擔がせたり。是れ火打附竹其外兵具を入れたりけり。下女一人召連れ、下田の城蝟魚たこの森へ參りける。番の者に近付き、衣笠の何がしが母にて候が、御臺所へ御目見の爲に、參り候といひければ、仔細あらじとて、慇懃にして通しける。元來案内は知つたり。直に木陰に立寄り支度して、其儘火をぞかけにける。折節西風烈しくて、堀門矢倉に燃付きて、黒煙天を燒きて上る。城中には、敵の所爲とは思ひも寄らず、手過あやまちと心得て、火を防げ、財寶を出せと、上を下へと返しける。三人の男、彼處爰に走り、鬨の聲を揚げしかば、隠れ居たる軍兵共、火の手を見て、貝を吹き太鼓を打ち、鬨を作つて押寄せたり。城兵是に驚きて、敵を防がんとすれば、猛火盛に覆ひ來る。すべき方便もなければ、我先にとぞ落行きける。大將駿河守は、數度の高名隠れなき、勇猛の士なれば、煙の中を遁れ出で、大勢群りたる寄手の中へ、少しも猶豫する氣色なく、一文字に打つて入り、七八騎切つて落し、十四五人に手を負はせ、殘る奴原追散らし、岩に腰かけ、息繼ぎ居たる所に、誰とは知らず大の男、大太刀を差翳し、走り懸つて打つを、駿河守飛違ひ、右の脇に挟みし

め、殺さんとする所に、流矢來つて胸板に立つ。口惜き事かな。今は是迄なり。最後の供せよとて、火の中へ飛入り、俱に焼けてぞ死したりける。駿河が弟七郎右衛門は、寄手の大勢を追靡け、兄の行方を知らざれば、一先づ落ちて見ばやと思ひ、山傳に西の方へ落行く所に、寄手の勢是を見て、遁すまじと追懸けたり。城より廿町計西の方、おき岩とて大岩あり。七郎右衛門其蔭に隠れて、追手の勢を待懸けたり。寄手是を見て、あの岩の陰へ隠れたるぞ。餘すなとて、岩の廻を十重廿重に取巻きたり。七郎右衛門、岩の上に駈上り、是迄來つるを、逃げたると思ふかや。兄の生死知れざれば、行方を尋ね來りたり。手並の程を見すべしと、尋常の人の二三十人しても動かし難き大石を、軽々と提げ、真先に進んだる男を、開いて打ちければ、落花の如く打散らす。引懸けく二三、續打ちにぞ打つたりける。寄手の勢、楯の板を微塵に打碎るゝのみならず、少しも石に當る者、尻居に打居ゑられければ、軍兵共肝を消し、一度に崩れて逃げにけり。石や木の根にけし飛んで倒れければ、人馬彌が上に落重り、或は己が鎧長刀に貫かれ、死するもの其數を知らず。是より後は、近付

きて討留めんといふ者一人もなし。只遠攻にせよやとて、弓鐵炮を放し懸くれば、七郎右衛門に當る事、雨よりも猶繁かりければ、七郎右衛門、今は是迄なりと突立ちて、腰の刀を抜き、自ら首を搔落し、立竦んでぞ亡せにける。其頃何者かしたりけん、

いでもせで焼崩したる蛸魚の森いかなべの〔字句足ラズ本ノマ、〕料理なるらん

爰に石谷民部少輔とて、布師田金山の城主あり。源氏細川の末流なり。一宮高鴨大明神の神職に備はり、三千石をぞ領しける。岡豊と其間、僅に一里計なれば、國親の言行、日々に曇なく聞えけり。其武勇といひ、八幡の御詫宣といひ、敵し難く思ふ所に、近日に至りて、大津・下田を攻傾け、諸將靡き隨ふと聞えければ、所詮此方より、先達つて降參せんには如かじとて、同宮神主永吉飛驒守を始め、七十五人の神職を進めて、一同に、國親の幕下にぞ屬しける。土佐郡の内、是初めて手に入りければ、高鴨大明神の擁護の驗なりと、悦ぶ事限なし。其後はいかなる故にかありけん、民部少輔所領二千餘石を減らし、千石の地を領して、高鴨の社境内に居宅を移し、入道して執行宗とぞ申しける。惣じて此宮に、執行・神主・社僧・一和尚・國實社人とて、十

五人ありて、年中に七十五祭を執行ふとかや。民部少輔が弟工文將監は、坂折山の軍場より、徳善に引退き、猶も岡豊を窺ふ所に、下田は討たれ横山は降参し、舎弟石谷民部少輔も、國親の幕下に屬すと聞えければ、一身の功立て難くや思ひけん、頓て降を乞ひ、在岡豊して、忠義をぞ顯しける。

十市池降参の事

長岡郡十市の城主をば、細川備前入道宗桃とぞ申しける。細川武藏守頼之十代の孫なり。息男二人あり。嫡子備前守某二男池豊前守頼和、是は池を領して、栗山に在城す。「淺茅生の野邊にしあれば水もなき池に摘みつる若菜なりけり」と詠みし、池といふ所是なり。長宗我部信濃守、山田・大津・下田を討取り、勢漸く強大なれば、此人に向つて敵せん事、蟻螂車を遮るに等しからん。只此方より降を乞ひて、彼旗下に屬し給ふべしと、家臣一同に諫めければ、備前入道兎も角も、旁が意見に任すべしと評議極りて、豊前守へも言遣しけり。頼和家臣を呼びて、此事いかゞあるべきと申

されければ、何れも承り、十市殿御降参に於ては、御同意然るべく候。同根一枝の御事に候へば、吉凶榮辱一同の儀、勿論に候とぞ申しける。池の長臣岩松七郎經重は、常に武勇を專にして、假にも懦弱を好まぬ者なり。默然として聞き居たりけるが、進み出でて申しけるは、こは御詮議とも覺えぬものかな。國親武勇なりといひなせども、恐るゝに足らず。其軍功を考ふるに、山田治部少輔は、武道拙なき不覺人なり。大津は又、岡豊の神託に恐れ戦き、家中の上下、攻めざる先に、逃支度したる者共なり。下田は、老女が手引して焼崩したり。國親の武勇智謀は、偶中の幸なり。何ぞ譽とするに足らん。武士たるもの、見逃をさへ恥辱といふに、聞逃に等しく、敵の旗色をも見ず降参あらん事、此七郎に於ては、ふつと同意せしめず。此上にも御降参あるべきに候は、經重は御暇給はりて、國親に一箭射て、腹切つて死すべしと、傍若無人にぞ申しける。頼和も、不快には思はれけれども、其理なきにあらざれば、重ねて談すべしとて、其日の評議は止みけるが、兎角岩松が詞にや恥ぢたりけん、十市も池も、降参の沙汰はなかりけり。國親宣ひけるは、十市が一族、間近く下田が滅亡

を見ながら、降を乞はぬは痴者なり。近日踏潰すべしとありければ、中島大和申しけるは、池の家老に、岩松七郎と申者の候が、勇猛にして智慧深く、人を懐くる事、妻子の如くなれば、士は申すに及ばず、郷民までも父の如く、随ひ付くと聞え候。彼一人討ち給はんとては、數多の人を失ひ給ひ候べし。御家興起の始に候へば、一人にても失ひ給はぬ御思慮專要なり。爰に一つの愚案候。池萬五郎とて、是も同じく池の家臣にて候が、智慧淺く欲心深き者に候へば、賄を遣し誑し候はんに、味方に與せぬ事は候まじ。随分彼に親しみ寄せ、七郎を討たせ候べし。其時御馬を向けらるゝに於ては、即時に攻取り給ふべしと申しければ、國親實にもと思ひ給ひ、さらば汝計らへとぞ仰せける。去程に大和は、様々に便を求め、萬五郎に親しみ寄り、折に觸れ事に寄せて、太刀・刀・馬鞍・金銀・衣服、數を盡して送りける。案の如く萬五郎、是は思ひ寄らざる厚志、報謝するに詞なしと、無二の氣色に見えければ、或時大和、萬五郎に囁きけるは、我れ岩松七郎に、年來遺恨ありといへども、本望を達せず。無念日夜胸を焦し候。何卒彼を討つて給はれかしとぞ頼みける。萬五郎、それこそ易き事に

候。近日討取り、數日の御芳志を謝し奉るべし。御心安かれとぞ諾しける。七郎是をば夢にも知らず。或日慰の爲、劔尾邊に出で徘徊する所を、萬五郎、木陰より鐵炮を以て、狙ひ澄して眞只中を打ちければ、岩松うんと計にて、馬より逆に落ちて死にける。郎等共肝を消し、主の死骸を引起し、是はいかにと周章する隙に、萬五郎は逃返り、急ぎ大和が方へ注進し、空嘯きて居ければ、何者のなせし事とも、知る人更になかりし。斯くて池十郎には、國親近日進發あるべき由聞えければ、老臣共評しけるは、兎に角國親に敵對は叶ふべからず。然りと雖、今又降參あらんは、經重討たれたる故に、早臆したりと、諸人に笑はれん事疑なし。幸ひ市正殿、未だ御妻室ましまさねば、國親の息女を御縁組ありたき由、仰入れらるれば、國親争でか違背あるべき。斯くして和睦あらば、誰か褊し申すべきと、評議一同して、岡豊へ言送りければ、信濃守大に悦び給ひ、許諾ありて吉日を選び、入輿の行粧刷ひ、豊前守頼和の子息市正頼定へ歸嫁し給ふ。互に寇讐の心を翻し、いつしか父子の親みにて、隔てぬ中となりければ、上下安堵の思をなし、皆萬歳をぞ唱へける。斯りしかば、池萬五郎が悪行

曇なく顯はれて、頼和深く憎み給へば、萬五郎身の置所なく、急ぎ立退き、一向坊主になりて、一生を送りけるとぞ聞えし。

岩井屋次右衛門鮪魚を釣る事

彼岩松七郎經重が家傳を聞けば、盛衰掌を返したり。其の先祖を尋ねれば、清和源氏の流岩松四郎經氏が末葉なり。經氏は、後醍醐天皇に仕へ奉り、武名を顯し、忠賞他に異にして、肩を雙ぶる者もなかりしが、天皇逆臣の爲に御沈落の後は、一族郎從散々になり、諸國を牢浪して、經氏當國に下り、片山の邊に忍び居たるを、細川某が招に依りて、遂に家臣となる。今七郎經重迄は、十一代と言傳ふ。經重家を繼ぐべき男子なかりし故、須賀刑部が一子を養ひて子とす。此須賀と申すは、當國安藝の領主安藝備後守蘇我の元親の家臣なり。不慮に横死して、一子僅に九歳なるを、後家連れて、長岡郡種崎浦に、所縁の者あるを便り、忍び居たり。岩松七郎是を聞きて、名ある者の子なればとて、母共に迎へ取りて、養ひける所に、幾程なく經重は、池萬

五郎が爲に討たれければ、女房は詮方なく、又種崎へ立越えける。一子漸く成仁し、次郎左衛門とぞ名付けゝる。其母の種姓は知らね共、女心の淺ましきは、常に次郎左衛門に教訓しけるは、構へて武士になる事なかれ。先祖は代々武門なれば、彼所の軍爰の戦に討死す。たま〜生残れば、武士の本意にあらずとて、生甲斐もなきやうにはいはれぬ。さらば男役を立てんとすれば、二つなき命を失ひ、兎に角武士程うたてしき者はなし。汝不思議に、命生残りたるこそ幸なれ。我に孝行には、商人になりて、世を樂しく渡れよと、明暮申聞かせけり。朱に交はれば赤くなる、母が心にや似たりけん、又母の訓誡否み難くや思ひけん、武士を止め、爲松といふ姓を改め、岩井屋と號し商人となり、種崎にぞ住しける。其上當國土佐郡に、一人の寡婦あり。大江の某が妻なりしが、夫は死して、十二三計の男子を持てり。家貧しく、朝夕の殮も微なり。或時此子、母に向つて申しけるは、斯る御有様こそ悲しく候へ。終に道路に飢ゑ死なん事、程候べからず。所詮武士を止め商人となり、利を得て、御心安く過させ奉らばやと口説きければ、母涙を流して、やさしくもいひつるものかな。流

石大江程ありけるぞや。志はさる事なれども、武士の本意にてはなきぞよ。汝幼少と雖、我一言を耳に止めて、忘るゝ事勿れ。夫れ人としては、衣食住の三つ、一つも缺けてはなるべからずと雖、武藝の家に生れては、是を調へなすものにてはなきぞとよ。是を調へなすものは、農工商の三民なり。是を天下の三寶といふ、三寶を亂るを盜賊といふ。其盜賊を征討するものを、士といふなり。士農工商の四民と雖、士と三民とは、其道大きに替れり。武士は國家を護持するを道とし、弓箭を業とす。安樂に住する身にあらず。然るに高祿を得て、安逸を求め、武義を勤めざるは、誠に武門の盜賊なり。僭偷の罪に百倍す。夫れ武士は信を以て本とす。信にあらざれば道立たず。商人は偽を先とす。偽にあらざれば利少し。武士は、財を捨て義を思ひ、命を輕んじて名を惜む。商人は、財を惜しみて義を知らず。恥を忍びて命を惜む。士と商とは、黑白表裏の違なり。されば利を見て義を忘れ、危きに臨んで恥を忘るゝは、武士にあらず。凡そ武の家に生るゝ者は、假初にも名を下さぬを心とすべし。名を惜む時は、たとひ譽はなくとも、恥辱に遠ざかるべし。只一盤の殮と一

日の命を惜み、名を下す。淺ましき事に非ずや。郡縣廣大の國も、百萬斤の金も、末代の名に比ぶれば、只一盤の殮に等し。百年の命も、末代の名より見れば、一日に同じ。古き歌に、「世の中は今日ばかりこそ悲しけれ昨日は過ぎつ明日は知られず」と詠めり。一日の命にあらずや。道を守りて飢死すると、不義にして身を保つとは、何れを褒め、何れをか誹らん。他人の上を以て考ふべし。勇と義とは武士の面目なり。勇は面を清め、義は名を汚さず。我れ女なりと雖、武士の家に生れたるは不運なり。家貧しきは天命なり。飢死すといふとも、悔ゆる所にあらず。武士の道に違うて、安樂を求むるは、我心にあらず。況商人となりて、貴賤を選ばず、是に手を束ね詞を卑くして、生きて何の益かある。早く死せんには如かじ。構へて患ふる事勿れとぞ申しける。事に觸れ時に臨みて、常に是を教誡せしかば、其子成長して、再び家を興し父母を顯し、先祖の名をも揚げにける。彼も寡婦、是も寡婦、彼も一子、是も一子、其見る所は一つなれども、其揆は懸隔せり。黃精釣吻、其形相似たり。清濁もと一なりとは、斯様の事をや申すらん。次郎左衛門二人の子あり。兄は次右衛門、

弟は茂右衛門とぞ申しける。天正十三年四月七日、次右衛門小舟に乗り、椀島の沖へ漁獵に出で、一つの蛸魚を釣上げたり、見れば茶碗二つ手に纏うてあり。飴色にて、亘り三寸四五分、深さ二寸四五分あり。是は奇代の珍事なりとて、宮内少輔殿へ、是を差上げければ、元親御覽じて、誠に前代未聞の不思議なり。彼が家の吉慶なるべし。重寶にせよとて、返し給はりけるとぞ聞えし。

土佐物語卷第二終

土佐物語卷第三

西養寺物語の事

長宗我部信濃守國親は、大津・下田を退治あり、介良・十市・蚊井田等降参しければ、近國の在々巡見の爲め、先づ下田に至りて、彼城中へ手引したる老女を召出し、過分の恩賞をぞ給ひける。それより介良に立越え、源の希義の古墳に詣で、即西養寺に入り給へば、住持出でて、様々にぞ饗應しける。國親仰せけるは、希義は、年越山にて討たれ給ふと言傳ふ。今尋ね見るに、年越山といふ所知るものなし。又夜深けて野の宮まで來りしといふ此宮も、又知れず。當寺に委しき傳記ありやと尋ね給へば、住持申されけるは、昔は寺の傳記、將軍家の御下文、諸家の寄進狀等ありと雖、近代の兵亂賊徒の爲に紛失し候か、頃日考ふべき舊記もなく候。愚僧一年關東へ下りし

時、不思議の縁にて、三代將軍鎌倉日記東鑑と申す物を求め出して、悉く書寫致度は候ひつれ共、事繁多故、無力の及ぶ所に非ず。只當寺の由來、希義君の御事のみを書拔きて候間、御目に懸け申すべきとて、取出でてぞ見せられける。

養和二年壬寅

一、九月廿五日癸巳 土左冠者希義者武衛弟也。母季範女。去永曆元年依左典厩縁坐配流于當國介良庄處。近年武衛於東國舉義兵給之間、稱有合力疑可誅希義由平家加下知。仍故小松内府家人蓮池權守家綱平田太郎俊遠各當國住人為顯功擬襲希義。希義日來與夜須七郎行家土州住人依有約諾之旨、辭介良城向夜須庄。于時家綱俊遠等追到于吾河郡年越山誅希義訖。行家者又家綱等圍希義之由聞及之、為相扶件一族等馳向之處、於野宮邊希義被誅之由聞、空以歸去。而家綱等又欲討行家之間、粧船一族相乘之、自佛崎海上逃亡。家綱等馳到于其船津、先為度行家遣二人使者於行家之船、有可談合事、稱可乘臨由。行家令察家綱等造意、斬二人使者首、掉船赴紀伊國云々。

一、十一月廿日丁亥 為征土左國住人家綱俊遠等、被差遣伊豆右衛門尉有綱於彼國、有綱以夜須七郎行家為國中仕承、今曉首途。件家綱等依誅土左冠者科如此云々。

元曆二年乙巳

一、三月廿七日庚戌 土左國介良庄住侶琳猷上人參上于關東。是有功于源家者也。去壽永元年武衛舍弟土左冠者希義、於彼國為蓮池權守家綱被討取之時、欲曝死骸於遐邇。爰土人之中自雖有存忠之輩、怖平家後聞不及葬禮沙汰。而此上人以往日師壇垣田郷内點墓所、訪歿後未怠。又取幽靈鬚髮今度懸頸所參向也。屬于走湯山住僧良覺申仔細之間、武衛有御對面、以上人之光臨用亡魂再來由被盡芳譜云々。

一、五月二日甲申 土左上人琳猷歸國。令止住關東可掌一寺別當職之由頻雖抑留給、於土左冠者墳墓可擬佛事之旨申請之間有御餞別會、是上人住所介良庄恒光名津崎在家被停止萬雜事畢。加之此上人依訪故希義主夢後、為酬其志

可賞翫之趣被仰土佐國住人等云々。

文治三年丁未

一、正月十九日辛酉 文治元年所被寄附于希義主墳墓之土佐國津崎在家等、爲甲乙人致濫妨狼藉之間、琳猷上人參訴右武衛。仍可停止濫妨之由被加下知訖。彼上人雖可參訴關東、行程隔遠路之條、武衛爲二品衛耳目在京之間如此云々。

一、三月十日壬子 土左國伴人夜須七郎行宗與梶原平三景時遂對間、二品直令決斷之給。行宗壇浦合戰之時生虜平氏家人周防國住人岩國三郎兼秀、同三郎兼末等召進畢。募其功可被行賞之由日來言上之處、景時支申云、彼合戰之比全無稱夜須之者。件兼秀等者自然歸降之輩也。經年序後行宗廻奸曲申仔細之由訴申之。而行宗彼時者與春日部兵衛尉令乘同船之由令陳謝之間召出春日部被尋問之處、申勿論之旨已爲分明證人。仍可被加賞之趣被仰含行宗。景時依讒訴之科可作鎌倉中道路云々。俊兼奉行之。

一、五月八日己酉 爲土左冠者希義主追善於彼墳墓被建一箇梵宇、以介良恒光名并津崎在家御寄附先訖。而今日又有沙汰、供料米六十八石爲每年役被施之。若令不足者引募庄內乃貢可沙汰珞猷上人。於事可施芳志之由被仰遣源內民部大夫行宗。于時介良庄地頭兼預所也。

一、八月廿日戊子 民部大夫行景使者自土左國參着。以弓百張并魚鳥干物以下積一艘船進上之。又依勵故土左冠者希義追善、可愍琳猷上人之由、先日被仰事、殊可存其旨之趣捧請文云々。件弓廿張者仰堀藤次被納置之。八十張者分給伺候壯士等。其中勤仕弓場御的之輩者賜二張。所謂下河邊庄司行平、和田小太郎義盛、佐野太郎基綱、三浦十郎義連、稻毛三郎重成、榛谷四郎重朝、藤澤次郎近清以下也。

建久元年庚戌

一、七月十一日癸亥 土左國住人夜須七郎行宗可安堵本領之旨賜御下文。是土左冠者被討取給。于時不惜身命討取怨敵蓮池權守以降度々有勳功云々。

是れ將軍家の記録にて候へ共、一つ不審なる事の候。希義、介良の庄を辭して、夜須に向ひ給ふ所に、家綱・俊遠等、吾川郡年越山にて追着き討取ると云々。平田太郎は、幡多郡平田の住人、蓮池權守は、高岡郡蓮池の城主なり。當國七郡は、御存知の如く、先づ東は安藝郡、其次は香美・長岡・土佐・吾川・高岡・幡多郡と、西へ段々に並びて候。彼介良は、長岡郡なり。然るに希義、介良を出で、東の方香美郡夜須へ落ち給ふに、西の方土佐郡を経て、吾川郡敵地近く起き給ふ事、不審し。長岡郡を、吾川郡と事誤りたる爲、又年越山は、今坂折山の事なりと申傳へ候。彼山を、祈年山と號す。此山中に、祈年の神坐ますに依つてなり。三代實錄に云、清和天皇御宇貞觀八年五月廿二日乙丑、授土佐國正六位上祈年神從五位下云々。此社の事なり。祈年を誤り、年越と書き候か。又野の宮は、香美郡深淵の郷、大谷深淵の神社の事分明なり。當國廿一社の其一、深淵の神社是なり。夜須より介良への道筋なれば、七郎是迄出來り候事、さもあるべし。扱又佛ヶ崎は、同郡今の手結崎の事と言傳ふ。或説に、希義君は、初は鎌田兵衛正清養ひ奉りて、鎌田の冠者と號す。其後當國に流されさせ給ひて、

土佐の冠者と稱し、又吾川郡弘岡の郷、吉良に御坐しければ、吉良の冠者とも申すなり。然るに平田・蓮池、西の方より討手に來ると聞えければ、夜須七郎を頼みて、香美郡に越えさせ給ふ所に、吉良より二十町計東鳥越山にて、平田・蓮池追着きて討取り、御死骸を路街に捨置きたるを、當時の住侶琳猷上人、修行の折節見奉りて、深く勞り、傍にて煙になし、御骨を首にかけ當寺に歸り、御墓を築き、西養守殿圓照と號して、後生菩提を弔ひ參らせ、仍つて當寺を、走湯山密嚴院西養寺と號す。されば鳥越山を誤りて、年越山と記したるか。希義住居は吉良、墳墓の地は介良なり。吉良・介良詞近ければ、在世の住所も墳墓の地も、介良と申誤り候か。又彼日記に、介良をひらきと讀めり。是國人の知らぬ事にて候。東國にひらきといふ所、此文字なりと承る。其例を以て、訓點を附け候か。扱今の吉良駿河守殿は、希義君の末葉と申候。其謂は、希義配所の御徒然に、一人の美女を愛し給ひ、男子を産めり。暫は人是を知らず。希義討たれ給ひて後、民間に養はれて成長せしが、將の器や坐しけん、終に吉良の城主となり給ふ。今駿河守殿までは、十三代とも又十二代とも申すなり。扱彼

夜須七郎、始めには行家、後には行宗とあれ共、二人には候はず。建久元年本領安堵の所に、土左冠者被討取給。于時不惜身命討取怨敵蓮池權守以降度々有勳功といへり。同人なる事明らけし。今此の如く彼鎌倉日記を疑ひし事、御不審に思召さるべく候へ共、聖經賢傳にも、闕文錯簡少なからず、近き事には玄惠法師の記したる太平記は、諸國の事を、正しく書きたるものに候へども、元弘の昔、一宮尊良親王、當國幡多へ流されさせ給ひしを書きたるを見るに、彼幡多と申すは、南は山の岨にて高く、北は海邊にて下れりと云々。黒僧修行の折節、當國殘らず一見仕りて候が、當國は總て六十町を一里にして、東西灘道九十七里餘、浦の數は九十九浦、東と西は數十里、南へ出でて、彎々として三日月の如し。南は蒼海漫々として、天を浸す。天武天皇白鳳十三年十月壬辰、違于人定諸國大地震、土佐國田苑五十餘萬頃沒爲海とは、此所かと驚く計なり。南に見ゆる山の端もなく、歌にも詠みたるとかや。北は山にて高く、南は海にて下れり。遠國の事は、人傳へ聞傳へに候も、事の相違あるまじきにも候はず。必罪を筆者に歸し難く候と、二時計り語られければ、國親大きに

感じ給ひしとぞ。

香宗我部和談の事

其頃香宗我部出羽守秀義といふ人あり。其先祖を尋ぬれば、清和天皇の御末甲斐源氏武田の姓氏族なり。當國香美郡宗我部そがめに在城して、武田の姓を改めて、宗我部と名乗りけるが、香美郡の領主なればとて、香宗我部と號し、所の名をば下略して、香宗そがとぞ申しける。源順が和名集に、香美郡會我といふ所是なり。三千餘貫の領主なり。家の臣下には、池内肥前眞武・岡本伊賀・下司九郎左衛門・北村新左衛門・久甫くはう内芳威・池田長介・岡本與兵衛とて、譜代相傳の士相並びてぞ守護しける。數代此所を領しければ、恩を荷ひ徳を戴く者多く、繁榮の家とぞ聞えし。斯る所に長宗我部國親、近邊の城を打隨へ攻靡け、其の威漸くに強大なれば、岡豊八幡の神託、愈疑ふ所にあらずと、上下恐怖する事斜ならず。秀義も豫て敵し難くや思はれけん、家臣を呼びて、我れ女子のみありて男子なし。信濃守息男一人申請け、養子婿にして、家督

を定むべきと思ふは如何にと申されければ、家臣共、是は餘儀なき御思慮に候。國親頃日の勢を以て考へ候へば、國中を平呑あらん事、程候まじ。然れば御和睦の御計策、根を深くして帯を堅うするの儀、是に過ぎ奉らずと、一同に申しければ、出羽守悦喜ありて、さらば通達せよとて、即池内肥前を使として、岡豊へ遣し、秀義老年に及ぶと雖、名跡相續の男子なし、只一人の女子を持ちて候。願くは御息達の中御一人申請け、箕箒の妾に致たく候と、懇にぞ申送られける。國親甚だ喜び、香宗我部は、甲斐源氏武田の一族として、氏も種姓も凡俗ならず。大慶是に過ぎずと、許諾禮謝して、使者をば返され、吉日良辰を選び、三男内記を、香宗へ召遣しける。後に香宗我部左近大夫親泰といひしは此人なり。出羽守の弟に、孫十郎といふあり。彼を家督にせんと、豫ていひしに引換へ、内記を家嫡に定めければ、孫十郎怒りて、兄ながら心得ぬ事共かな。豫て某を家督にせんと宣ひしは、人皆知る所なり。然るに變改あるは、我に不義ある故なりと、諸人に指を指されん事こそ口惜しけれ。所詮折を窺ひ、刺違へ死すべしとぞ怒りける。出羽守聞きて、こは心得ぬ所存かな。家あ

長宗我部
國親香宗
我部秀義
と結ぶ

りてこそ、家督も所領もあるべけれ。此度は當家安否の境なれば、力なく降を乞ひ、和睦する所に、其儀をも顧みず、不義の企、天理に背ける者なれば、儉に討つて捨つべしと、八木何某に下知しければ、たばかり寄せて討取りける。無慙なりける事共なり。其子は未だ幼稚なるを、乳母抱へて、母方の祖父池備前入道を頼みて、他へぞ立越えける。さる程に出羽守は、内記に家を譲り、其身は法體にして、中山田に營を構へ、隱居して居たりけるが、つくづく心に思ふやう、さるにても孫十郎が、我を恨みしは理なり。又骨肉を分けし兄弟を討ちし事、我ながら無道の至り、今更悔ゆるに益なし。切て孫十郎の一子を養ひ立て、此隱居の領を譲り、孫十郎が亡魂の、恨を少し晴らさせばやとて、書簡を認め、起請文を認めて、池備前入道へぞ遣しける。池斜ならず悦び、頓て華やかに仕立て、送りける。此上にも若し出羽の入道、不義の程計り難しとて、一人の郎等を相添へ、内議を示して遣しけり。秀義入道大きに悦び、實子の如く養ひ立て、中山田左衛門佐とぞ名乗らせける。

國虎^親法體の事

さる程に信濃守國親は、亡父覺譽常通幽靈菩提の爲め、安祥寺を再興して、常通寺と改め、追孝の作善、所存の如く執行はれけるが、常に宣ひけるは、我六歳にして孤となり、九歳にて母に後れぬ。人間の不幸、身に於て止めぬ。然るに不思議の天運に叶ひ、今既に家を興すと雖、心常に是を悲しむ。孔門には、身體髮膚を毀ひ傷らざるを孝とすといへども、我は是れ釋尊の道教に任せて、兩親尊靈と一佛淨土、二世の縁を願ふべしとて、齋惠法師を戒師として、天文十六年四月初め、春秋四十四歳にて薙髮法體して、覺世とぞ申しける。

太平山城守敗績の事

爰に太平山城守とて、高岡郡高岡郷、其他近郷を領して、四千貫の主にて、蓮池に在城す。去永正六年、本山に語らばれ、長宗我部兼序かねつぐを討ちし太平是なり。同十四年、

津野が一族降參の後は、太平を初め高岡郡、悉く一條殿の幕下にぞ屬しける。彼蓮池の城は、本山左近大夫茂宗が領分、吾川郡の境なれば、用心の爲に、一條殿より加勢を籠置き、番手に代へて守らせらる。始の程は、山城守も番手の士も、互に隔意ありて、懇勸に禮厚かりしが、交久しき時は、敬み衰ふる習なれば、後には膝を組み脛をもたせて、心の底をぞ語りける。或時山城番申しけるは、各何とか思ひ給ふ。御所教房公・房家卿・房冬卿・房基卿は、何れも性質正直溫和にして慈悲深く、萬事儉約を守り、民の費を厭ひ給ひしが、今の中納言殿は、萬づ雅意に任せ、放逸無慙の御行跡なれば、行末覺束なし。畢竟一條家の末になり給ふと覺えたり。長宗我部・本山兩家の内に奪はれ給はん事疑なし。何れも豫て其覺悟し給へと申しければ、番の士、されば我々共が所存も、同意なりとぞ申しける。山城守、是は互に隔なき雜談なり。構へて洩らし給ふなと、囁きてぞ止みにける。病は口より入り、禍は口より出づと、文士の格言なるを、知らぬ事こそ悲しけれ。其中に船戸左衛門は、本は津野の士なるが、近年一條殿に屬して、在中村しければ、此番手に入れられたり。常に山城守と不

快にて、萬づ後向うしろむきなりければ、此雜談を聞きて、哀れ事こそ出来たれ。是を披露して讒せばやと案じ濟し、俄に病と稱して城を出で、町屋を借り療治すといひて、潜に櫓原へぞ立越えける。仲平兵庫是を見て、こはいかに、御邊は蓮池の城番に越されたりと聞きつるに、只今は何の爲に、是迄來られ候や。不審なりと申す。左衛門小聲になりて、さればよ夫につき、忠節の爲に參じて候。山城守逆心を企て、番手の士を語らひ、本山に與すべきとの内談にて、何某は兎申し、誰々は角いひてと、針を棒にぞなし、事々しくぞ支へける。兵庫聞きて打うなづき、能くこそ告知らせたり。其方存知の如く、津野・太平は年來親しく、互に患難を救ひ候ひし。然るに去る戸波へばの合戦に、いかなる所存にかありけん、知らぬ由にて打過ぎぬ。彼戸波と蓮池は、僅に一里計なり。遙々中村より大軍後卷ありて、津野の一族、數を盡して討死しけるに、太平近里にありて、知らぬ由にて過ぎぬこそ遺恨なれ。何卒此鬱憤を散せばやと、晝夜胸を焦す所に、本意を遂ぐべき時節到來なり。此旨言上して、元忠討手に向ふべし。御邊は急ぎ歸られよと、引出物して返しけり。左衛門は、急ぎ蓮池に立歸

り、病氣本復せしとして番所に出で、さらぬ體にて居たりけり。斯くて兵庫は、急ぎ中村へ立越え、羽生肥前に對面して、太平山城守、番手の士を語らひ、逆心を企つる由、船戸左衛門訴人仕り、證據分明に候。急ぎ討手を遣はさるべし。但元忠案内よく存じ候。御先手仕るべしとぞ申しける。羽生即ち申上げければ、一條殿四人の家臣を召集め、内議評定取々なり。土居宗三申しけるは、唯今討手を遣さるれば、番手の士共も、一所に籠城すべし。先づ何となく、番手代りの士を遣したばかり寄せ、一々首を刎ね、其後討手を差向けられ、然るべしと申しければ、一座此議に決定して、究竟の者を選び、方便を言含め、蓮池城へぞ遣しける。さる程に代の士、蓮池に着く由聞えければ、前の番人打寄り評しけるは、是は不思議の事共かな。毎年十月、番替りの定例なるに、今漸く四月なり。若し違亂の事あらば、先達て案内通達あるべき所に、何の沙汰もなく、俄に代の士差越さるゝ事こそ心得ね。いかさま仔細あるべしと、取々評定する所に、船戸左衛門は、身の上をや危みけん、何心なく座敷を立ちて出でけるが、行方も知らず逐電せり。人々驚き、此者元來佞奸にて、常に我々共と不快な

り。去頃病と稱して暫く籠居して、人に對面せざりしは、扱は儼に中村へ立越え、此方の雜談を、讒言したるは必定なり。夫につけ我々共をたばかり寄せ、一々首を切らん爲、何心なく代の士を差越さるゝ事疑なし。今は遁れぬ所なり。代の士を討取り、一所に腹を切るべしと、詮議一途に相極めてぞ待ち居たる。程なく皆々着きければ、さらぬ體にて請じ入れ、遠方御越は苦勞の至りなり。永々の御勤、隨分御精入られ候べし。此度は例に替り、各早く御越し候へば、我々共は、頓て在所へ立歸り、緩々休息致し、此程の勞氣を休め候べし。暇乞の盃なりとて、珍膳を認め、様々に饗應し、亂酒になり、入替りく大盃にて強ひたりければ、皆々飲み酔ひ、前後不覺にぞ眠りける。時分はよしと立寄り、残らず首を打落す。附き來りし家人共をば、態と別屋に置きければ、是をば夢にも知らず。遙々の道を凌ぎ來り、足洗ひ湯浴して、帶紐解きて休み居たる所を、大勢一度に押入り、是はといひて周章ちまつるを、撫切にしたりけり。さらば最後の用意せよとて、逆茂木・搔楯・堀を掘り、其役々の手分して、寄する敵を待懸けたり。さる程に番手の下人、漸く四五人遁れ出で、中村へ逃歸り、

此由を告げければ、一條殿、こは手延にして不覺を取りたり。さらば討手を遣はせとて、弘治三年四月半、仲平兵庫・福井玄蕃を先として、都合其勢卅餘騎、蓮池の城へぞ押寄せける。太平は、一千餘騎を二手に分け、鐵炮足輕二百餘騎、ふんぎりの橋へ差向け、其身は八百餘騎、十町計り引退きて控へたり。是は足輕を以て敵をおびき寄せ、川へ追箝めんてぞ方便なり。寄手は、蓮池勢の分際、豫て知つたる事なれば、只一軍の勝負なりと、鬨の聲三度揚ぐる程こそあれ、皆拔連れて、橋の上を一息にぞ押入りける。蓮池勢、鐵炮少々打懸けて、跡をも見ずして引退く。寄手勝に乗つて、さこそあらめと、備を亂して追懸くる。太平は豫て定めし事なれば、真先に進んで些も擬議せず、大勢の中へ駈入りて、東西に追靡け、南北に駈散らし、八方透さず切つて廻れば、寄手案に相違して、一度に崩れて逃げけるを、太平急に追懸けしかば、返し合する者一人もなく、行先狭き橋の上に、大勢我先にと込合ひける程に、或は堰落されて水に溺れ、又は己が太刀長刀に貫かれ、命を墜し疵を蒙る者其數を知らず。親討たるれども子は知らず、主討死すれども、郎從之を扶けず。物の具を脱棄て、弓を

杖に突きて逃げふためき、戸波の城へぞ籠りける。斯くて四五日人馬の息を休め、軍評定ありて、又蓮池へぞ向ひける。仲平兵庫申しけるは、古人の詞に、大敵を欺き、小敵を侮らすといへり。然るに最前は太平を思ひ侮りて、却て不覺の負軍して、人口に落ちぬる事、生涯の恥辱なり。今度の軍、又先の如くして退きなば、萬人の嘲笑たるべし。相構へて、面々身命を輕んじて、以前の恥を雪がるべしと、衆を勇め氣を勵してぞ打立ちける。山城守ふんぎりに出向ひ、弓を射かけ鐵炮を放し、互に時をぞ移しける。斯る所に福井玄蕃、豫て相圖やしたりけん、手勢二百騎計り引分けて、波介の山際を東へ、敵の後を遮り、蓮池の城下へ入らんとぞ進みける。太平是を見て、城下へ敵を入立て、は叶はじと、馬引返せば、仲平兵庫得たり賢しと、橋を打越え突いて懸る。蓮池勢、引立ちたる事なれば、一度に吐とぞ崩れける。されども太平、町口にて馬駈居る、貳し返せと呼ばはつて、一支支へて防ぎけるが、爰をも終に押破られ、城中へ引いてぞ入りにける。寄手は大勢なれば、荒手を入替へ息をも繼がず、夜晝九日攻めたりけり。城中小勢と申せども、究竟の者共、死を一途に定めて、攻寄す

れば追拂ひ、懸れば追戻し、討らつ討たれつ、何れ勝負見えざる所に、俄に空搔曇り、雷電稻妻頻にて、大雨車軸をぞ流しける。蓮池の城と申すは、南北は高山にて、其間に田澤ありて、戸波谷三里に續きたり。東は贊殿川とて、國中への大河なり。洪水出づれば、逆様に蓮池戸波へ押入りて、海の如くなる所なり。寄手も案内あるなれば、洪水の程計り難し。先づ此陣を引返し、重ねて寄せられ然るべしと、攻口を開きて引返す。城中には是を見て、籠の鳥の、空を翔ける心地して、悦び合へること斜ならず。雨は次第に降増る。高岡・蓮池・波介・北地・戸波谷、一面に海となる。元より城は小城なり、兵糧矢玉の蓄も乏しければ、重ねて敵寄せ來らば、網に掛れる魚の如くなるべし。此の隙に落つべしとて、皆散々にぞなりにける。斯くて空晴れ水も干落ちければ、さらば急に攻めよとて、始の如く押寄せ、鬨の聲をぞ上げにける。城中には音もせず。さては落失せたりといひければ、いやしく如何なる方便にやといふもあり。兎角一度に攻入れと、四方より押入り見れば、敵一人もなし。津野某取敢ず、

蓮池は花はいつしか散りはて、みはとびぬけて行方しられず
と詠みければ、諸軍勢笑壺に入りてぞ笑ひける。其後又此城を攻めて、番手の士を
籠置かる。

一條殿・本山不和・附吉良駿河守自害の事

昔日は國中一和して、一條殿を尊崇し、國主と仰ぎ拜趨せしが、近年は諸將各になり、
私領を守り威を争ひ、御所に入出る者もなし。一條の黃門兼定卿仰せけるは、昔は國
中の上下我命を重んじて、大小事となく、違背する者もなかりしが、近年に至つて命
を輕んじ、下知を背く者多し。其根元を考ふるに、是本山が驕奢より起るなり。其
仔細といつば、頃日大名と稱ふるは、安藝・本山・長宗我部なり。安藝は我親族なり。
長宗我部は、又當家の從屬なり。されば此兩家は、我を輕んずべき謂なし。本山は
土佐・吾川兩郡を領して、手さす者なければ、驕奢の餘りに昔の好を忘れ、我を蔑如
する故に、以下の諸士是に習ひて、無禮を盡すと覺えたり。去頃蓮池の番人共、反

逆を企てしも、畢竟本山が逆威を振ふに依つてなり。哀れ本山を亡し、諸士の法令
を正さばやとぞ宣ひける。言の漏れ易きは、禍を招く媒とかや。壁に耳、岩の物い
ふ世の中なれば、誰いふともなく、本山左近大夫義宗此由を傳聞き、こは不思議の事
を宣ふものかな。國中の上下昔に替り、一條殿の命に隨はざるは、其身の行跡法に
違ひ、人々に疎まれ給ふ故か、又世の末になれば、人の心もすなほならぬ故かなるべ
し。何ぞや罪を、我一人に歸せられたるぞ心得ね。教房公、京都の亂を避けて漂泊
し給ひしを、長宗我部文兼勞り、當國へ招請すと雖、國中舉つて尊崇するは、文兼が
一身の功にあらず。我が父祖を始め諸將一同して、勅許にあらずと雖、國司と仰ぎ冊
きしなり。されば我々をば、親しみても猶親しみ給ふべきに、恩を讐にて報じ給は
んと志は、天理も知らぬ愚人かなとて怒られける。其の頃吉良駿河守とて、吾川
郡弘岡の郷吉良の城主あり。去る永正六年本山に力を合せ、長宗我部兼序を討ちし
かば、本山も他に異なる思をなし、互に肩を並べ膝を組み、詞を譲らぬ友なりしが、
近日本山發向して、土佐・吾川兩郡を掌に握りければ、時世に隨ふ習にて、今は吉良

も本山が旗下に屬し、媚び諂ひて居たりしが、いつしか不和になりて、萬快からぬ事共多かりけり。され共互に色を立つる事もなかりし所に、駿河守儉に蓮池に立越え、番人に便りて、一條殿の幕下にぞなりにける。是は本山と不快なれば、行末覺束なく、自然の事あらば、一條殿へ加勢を乞はん爲とぞ聞えし。是に依つて西畑・仁村・森山・仁井・秋山等も皆降参して、在中村しければ、一條殿より森山に砦を構へ、數多の士を籠置かる。本山是を聞きて、一條殿我を惡口し給ふさへあるに、況して領内を犯さるゝ事こそ安からね。是駿河守が胸臆より出づるなれば、彼が首取つて軍神に捧げて、直に幡多へ攻入るべしとぞ申されける。此本山左近大夫茂宗は、祖父伊典より相續きて、本山に在城せしが、去る天文の頃、子息式部少輔茂辰に城を譲り、其身は法體して梅慶と號し、土佐郡朝倉山重松が古城を攻めてぞ移られける。此城より吉良へは、行程僅に一里計りなれば、儉に忍を入れ、日々に敵の陣をぞ窺ひける。是をば知らず駿河守、家臣共を召集め、面々も存知の如く、我常に鶉鷹の逍遙を好むと雖、近年諸方の急劇に依つて、其沙汰も聞かず。此度一條殿へ降を乞ひ、存分に任

本山梅慶
吉良駿河
守を討つ

する上は、是に過ぎたる悦なし。夫に就き來る二日、贊殿川にて鶉を使はせ、家中の面々にて見物させ、若者共に一曲謠はせ、共に慰まんと思ふはいかにとありければ、老臣承り、誠に有がたき御志なりとて、役人共に申付け、其用意をぞしたりける。忍の者を聞き、究竟の事こそあれと、朝倉へぞ告げたりける。梅慶喜び其日を待ち、七百餘騎を二手に分け、弘岡へぞ向けられける。一手は鶉來巢うくるす紀伊守・義井修理を先として、吉良の城に向ひ、一手は式部少輔を大將として、贊殿川へぞ押寄せける。此川に如來堂といふ島あり。是阿彌陀如來を安置したる所なれば、如來堂と申すなり。斯くて駿河守は士共を引具し、彼島に渡り、鶉を使はせ見物あり。雞飼を取散らし、主従の隔なく、さいつさゝれつ飲醉ひて、謠ひ舞ふ。折しも城に當つて、関の聲鐵炮の音聞えければ、こはいかにと驚く所に、ゆきとうの山陰より、ひゝかふと三百騎計り、関を作りて駈出で、如來堂に向つて、弓鐵炮を放つ事雨の如し。駿河守些しも騒がず立上り、大音上げ、是へ寄せたるは、式部少輔と見るは僻目か。某が手並は豫て存知の前、其處を引くなど、舟に乗らんとする所に、流矢來つて眉間にはつしと

當りければ、口惜や是迄なりと押肌脱ぎ、腹十文字に搔切りければ、郎等頓て介錯して、其太刀を取直し、己が咽笛に突立て、主の死骸に打重つてぞ死にたりける。吉良掃部・齋藤新五・中島近江・幾間才藏を始め、究竟の者共、心は猛く思へ共、弓鐵炮五ヶ所七ヶ所二ヶ所三ヶ所、疵を蒙らぬはなかりければ、逆も遁れぬ所なりと、腹搔切つて死するもあり、或は刺違へ、又は川に飛入るもあり。哀れなりし有様なり。恥をも知らぬ下部共は、用石・高岡へ逃ぐるもあり、右往左往になりけり。斯くて城の寄手共、大手の門に押寄せ鬨を上げ。城中には唯女童、扱は用にも足らぬ老人、又は若き番の士、今日は殿の留守なればとて、帯紐解きて晝寢して居たる折なれば、防ぐ兵一人もなく、皆散々に逃げければ、寄手難なく乗取り、悦びの鬨を上げ。去程に式部少輔は、本山の城には、伯父本山佐渡守茂定を入置き、其身は吉良の城に移りて、本山を改め、吉良式部少輔とぞ申しける。

森山・蓮池・砦落去の事

森山の砦は吉良へ程近く、聲も届く計なれば、駿河守討たれ、式部少輔吉良へ入替りたるを聞きて、彼番の者共、定めて聞逃せんすらんと思ふ所に、結句反つて弘岡の郷人共を追捕して、些も油断あらば、吉良へ逆寄にせんと議する由聞えければ、式部少輔、小敵と思ひ侮つて、膝下に差置く事、百足を懷中に育つるに同じ。油断すべきにあらずとて、弘治三年二月廿日、六百餘騎を引率して、森山へ押寄せたり。城兵二百餘騎、元來期したる事なれば、些も擬議せず打つて出で、前後に當り左右を拂ひ、駆破り打通り、千變萬化手を碎きしかば、寄手若干討たれ、色めき立ちて見えければ、式部少輔馬を控へて、言甲斐なき者共かな。敵縦ひ鬼神なりとも、あれ程の小勢を見て、引く事やあるべき。只一度に駈寄せ中に取込め、息をも繼がせず捫立てよやと下知せらる。六百餘騎の兵共、此詞に力を得て、二百餘騎の敵を、真中に追取込め、餘さじとて捫んだりける。城兵心は矢竹に逸れども、敵は雲霞の如くなれば、爰に圍まれ、彼處に取込められ、二百餘騎の勢、僅に廿五騎に打なされ、一所になりて息繼ぎけるが、我々城を預りて、言甲斐なく攻落され、何の面目ありて、再び中村へ歸る

べき。此城こそ墓所なれ。迎も遁れぬ命なれば、潔く切死と、又敵の中へ駈入りて、一足も退かず、一人も残らず討死す。吉良方の手負死人を算ふるに、三百人に餘れりと雖、究竟の敵二百人討取りければ、人皆勇みをなす。さらば頼て蓮池の城へ寄せよとて、同廿五日の早旦に、贄殿川を越えて馳向ふ。大將茂辰申されけるは、森山の城は、力攻にしたる故に、多く士卒を討たせけり。蓮池をば、方便てだてを變へて攻むべしとて、高岡の在家に火をかけ、関を作りて押寄せたり。蓮池には、森山の城攻落されぬと聞きてければ、定めて是へも寄せんすらん。今日は遁れぬ所なり。死して野外の犬の腹に葬らるゝ共、逃げて人口には落ちまじものをと、互に機を進め、静まり反つて待懸けしかば、高岡の火の手を見ても、騒ぐ景色はなかりけり。斯りしか共寄手の勢、城の邊へは近寄らず、遠巻してぞ居たりける。城中には是を見て、敵深き慮あるべし。油断するな面々と、役所々々へ下知をなし、晝夜物の具をゆるめず、今や寄すると待つ所に、寄手は己が陣々を構へて、幾年をも經べき氣色なれば、城中には慰む方なく、退屈してぞ見えにける。斯る所に或夜、南の方より関の聲を上げ、鐵

炮の音頻なり。すは敵の寄すると見る所に、さはなくして、北の方より関を作り、鐵炮を打かけ押寄すると見れども、さもなく、又東の方に関を上げ、鐵炮をつるべ掛けたり。城中には其中々を守りて、待明し待暮らす。斯の如く煩す事、七日七夜なり。寄手は時を定めて入替り、息を繼ぎ身を休む。城中には替る勢もなし。食する隙もあらばこそ、玉薬さへ打盡し、心身共に勞れ果て、此體にては、手もなく攻取らるゝは必定なり。迎も死すべき命なれば、敵陣へ逆寄にやする、又は城を明けて落ちや行くと、僉議區々たる所に、八日に當る早旦に、敵陣を見渡せば、燒捨てたる篝火少少残りて、敵一人もなし。扱は南の山より、西へ勢を廻すか、北の山に勢を隠したるか、と、四方へ人を遣して尋ねれば、夜中に弘岡へ引返したりといひければ、涸魚の海に出でたる心地して、先づ些なりとも息を繼げとて、籠手脛當を枕として、前後も知らず寝入りたり。吉良勢、時分や計りけん、又大勢寄せ來り、関の聲をぞ上げにける。疲れ果てたる城兵共、寢怯れたる事なれば、始めの義勢も失せ果て、塀を越え狭間を潜りて、我先にと、城を明けて落行きければ、寄手頼て入替り、勝関をぞ上げたりけ

る。式部少輔打笑ひ、何と茂辰が計策を見たるかと自讃し給ふ。即ち城を改めて、番の士を籠置かる。

奇怪の事

永祿元年六月十一日の早旦、本山梅慶入道、庭に出でて、諸木の梢を見給ふ所に、年の程十七八歳なる美しき女房、あざやかなる衣裳を着、松の梢に立ちて、梅慶を見て、莞爾と笑ひて居たりけり。入道見給ひ、誰かある、弓持つて來れと呼ばはり給へば、何事に候と、若侍急ぎ弓矢を揃へて差出す。梅慶弓を取つて見上げたるに、形は失せて見えぬ、虚空に大きに笑ふ聲して、朝倉の宮の方へぞ行きにける。四五日計ありて、城の大手に植ゑたる大木の杉の根より、火燃え出でたり。見る内に數百本に燃付きて、黒煙天を掠めり。諸人驚き、水よ態手よなど騒ぎて、立寄り見れば、火にはあらず、杉の枝毎より血流れ出でたり。集りたる人數、皆朱に染みてぞ歸りける。斯る不思議もある事にやと、上下叫く所に、或夜女の聲にて、數百人踊る音しけり。

是を聞けば、本山は又本山になると諷ひける間、月陰に見れども、其形は見えざりけり。其次の夜、二三千人の聲して関の聲を上げ、大石大木を崩す音しけり。すはや敵の寄せたるはと、上下騒ぎて立出で見れども、人もなし。いかさま天狗の所爲にやあらん。遠行寺に於て、大般若經を眞讀あるべしとて、彼寺へいひ送られければ、住持頓て返答ありて、使をぞ返され、例の眞經の時節になりければ、直に佛前に向ひ勤行ある所に、何處より來るとも知らず、大なる鼠一つ、燈明の油錠あぶらづぎの中へ飛入り、油に浸り、本堂の棟木に駈上り、身を擦りて又走り來り油に浸り、棟木へ身を擦る。斯の如くする事百餘度に及べり。住持不思議に思ひ、目も放さず守り居たる所に、鼠又來りて、己が尾に火を附けて棟木へ上ると見れば、猛火忽に燃え出でたり。同宿下部驚き騒ぎければ、住持見給ひ、是自滅の時節到來なり。人力の及ぶ所にあらず。經臺を初め、寺物一つも出すべからず。其儘焼捨てよとて、本尊藥師如來を同宿に負はせ、寺の方を二目とも見ず、朝倉へぞ立越えける。七八町に作り並べたる寺堂、廻廊・鐘樓・經藏・二王門、工人妙を盡し丹青を飾りしも、一時の程に焼失せて、灰燼

忽に地に充てり。悲みても猶餘りあり。住持朝倉へ立越え、此由を申されければ、大きに心に懸けられけるとかや。其後も朝倉の城中に、不思議の事共多かりけれども、深く隠して、沙汰はせざりしと聞えし。

朝倉神社の事

朝倉神主共是を聞きて、是唯事にあらず、當社の御祟なるべし。其故は過し頃、何の爲にやありけん、梅慶の下知にて、此宮林の木を伐らせしに、神主出でて、神木を伐らせ給ふ事、いかなりと申しければ、入道是程の茂りたる林にて、僅の木を切りたりとて、何程の事あるべき。但し神の惜み給ふにはあるべからず。神人達の私ならん。若し又神の惜しく思召すとも、梅慶此所の領主なれば、少しは見許し給ふべしと笑はれたれば、神主共、穴恐し。此御神は、土佐國風土記曰、土佐郡有朝倉郷、郷中有社、神名天津羽々神、天石帆別命、今天石門別神子也云々。是當國廿一社の其一、朝倉の神社是なり。齊明天皇六年に當りて、百濟王より日本へ加勢を乞ふ事あり。

天皇御許容あり、明年の正月、攝津國難波浦^{今の大坂}より御出船、御子天智天皇、時に皇太子たり。其御弟清見原王子^{後に天武天皇}共に供達せらる。同年五月、土佐國朝倉へ御着船ありて、橘の廣庭の宮に入らせ給ふ。朝倉山の材木を以て、假の内裏を作らせ給ひて御座す。丸木の黒木にて作りたる假の皇居なれば、木の丸殿とぞ申しける。是より廿町計西南の方、八田海道苜萱の地に關を居ゑて、晝夜警衛怠らず。百官軍兵に至る迄、内裏へ參る者は、其名を名乗りて關を過ぎぬ。天智天皇、

朝倉や木の丸どのに我居れば名乗をしつゝ行くはたが子ぞ

と詠せさせ給ふ。然るに宮林の木を伐りたるによつて、神の祟にかゝらせ給ひ、齊明天皇御惱まし〜、同年七月廿四日、此行宮に崩じ給ふ。盤瀬を御廟所として、八月朔日の夕送り奉る。時に山上に鬼出で、大きな笠を着て、是を望み見る人、皆奇異の思をなす。盤瀬は今の鶉來巢山^{うくるす}なり。天智天皇喪慮に御坐して、

秋の田のかりほの庵のときをあらみ我衣手は露にぬれつゝ、

と詠じ給ふ。抑此喪慮と申すは、平民にも倚慮とて、父母の喪の時は、謹み居る所

天子は諒闇の間、御悲に堪へず、假庵を作り、かたはいにして板敷を下げ、葦の簾をかけ筥にふし、壤を枕にし給ふとなり。斯る御起臥なれば、民の上を思召やらせ給へる御製とかや。其後天智天皇勅詔ありて、齊明帝の盤瀬の御陵を、天津羽々神の宮に遷し奉り、羽々神・齊明帝一所に祭るなり。國俗誤つて朝倉の宮を、齊明天皇といふは此謂なり。羽々神の御祭日は八月十八日、齊明帝の御忌日は七月廿四日なり。和歌の家の説には、朝倉木の丸殿は、筑紫に舊跡ありと雖、日本紀延喜式に記して、土佐國にありといへる事慥なれば、是を正説とすべしと、藤原兼良公書置かせ給ふ。されば天子の御上にさへ、宮林を伐らせ給ふ神の御祟まします。況凡下の身として、奢侈の餘りに、神木を切りたらんに、なか神意に背かざるべき。穴怖しといひ給へりけるが、果して思合する事にぞなりにける。

土佐物語卷第三終

土佐物語卷第四

岡豊・本山義絶并長濱城夜討の事

さる程に本山左近大夫茂宗入道梅慶は、永祿二年夏の始より、例ならぬと聞えしが、老衰の極なれば、藥力針功も叶はず、同年八月下旬、朝倉の城にて死去し給ふ。子息式部少輔茂辰は、吉良の城には番の士を入置き、頓て朝倉へぞ移られける。國親入道覺世も行き弔ひ、萬づ隔なかりし所に、禍は下より起る習にて、不慮の事こそ出来けれ。永祿三年五月初め、岡豊より艦一般に兵糧を積みて、種崎の城へ漕せらるゝ所に、茂辰の領分潮江より舟二艘乗出し、孕の渡間にて、彼水主を切捨て、兵糧船を乗取りける。覺世聞き給ひ、大きに忿りて宣ひけるは、梅慶は予が爲に、父の怨敵なりと雖、先年一條殿の口入に依りて、止む事を得ず、一家同門の好をなす。況孫共多く

本山茂宗
死去

出来せしかば、俱に天を戴くの辱を顧みず、寇讎の意を翻す事、親睦に人口を忌みたり。然れば式部少輔も、父子骨肉の思をなすべき所に、此度潮江の郷人共が惡逆は、是併茂辰が心底より起るなりと、大きに怒られける。式部少輔驚き、是全く茂辰が知る所にあらず。欲心熾盛の溢者共の仕業なりとて、彼海賊の棟梁三人の首を斬つて出され、様々陳じ給へども、覺世曾て承引なく、遂に親子厚縁の道絶えて、胡越の隔をなしければ、今に國の騒となりて、いかなる事か出来んと、歎かぬ者もなかりけり。さればあらぬ事をも評するは、斯る時の習なれば、是を聞きける者共申しけるは、潮江の郷人の惡行は、吉良殿の心底より起ると、覺世入道憤らるゝは理なれども、其惡黨共を殺害して陳謝せらるゝ上は、何の遺恨かあるべき。夫に猶覺世憤を含み給ふは、畢竟梅慶の死去を幸にして、事を左右に寄せらるゝと見えたり。親族に於ては不仁なり、武義に於ては不覺なりといふべし。兎にも角にも、兩家の確執に及ぶべき時節到来にこそあらめ。是父祖の惡は、子孫に報ふ習なれば、朝倉の御神の、本山家へ祟をなし給ふ所なるとぞ申しける。其頃長濱に、福原右馬丞とて、上

本山茂辰
長宗我部
國親不和

手の名を得たる大工あり。元は岡豊の者なりしが、故ありて家領を歿收せられて、吉良の屬士、長濱の城主大窪美作守が扶持を得て居たりけるが、密に岡豊に來りて申しけるは、先年不慮の過失に依りて御勘氣を蒙り、御家を立去り、一日の飢渴凌ぎ難く、大窪美作を頼み罷在と雖、重代の主君争か忘れ奉るべき。哀れ先非を御寛宥あらば、一命を抛つて、忠節を盡し候べきと、起請文を捧げて申しければ、覺世、是天の與ふる幸なり。吉良への事始に、先づ長濱の城を夜討にすべし、手引仕れと仰せければ、右馬丞悦び畏りて、彼城は、某棟梁にて築き候へば、案内曇りなく候。誠に某、城中へ出入仕るに、晝夜共誰咎むる者もなく候間、手引仕らん事、いと易き御事に候と申しければ、覺世悦び給ひ、さあらば汝は急ぎ歸り、時分を計り告知らせよとて、右馬丞をば歸され、頓て究竟の兵三百人勝り立て、種崎の城へぞ遣はし置かれける。斯る所に同月廿六日、暮過ぐる頃より暴雨頻にして、夜色窈冥たり。是ぞ待つ所なりとて、三百人の兵、宵より種崎を出で、御磐瀬に至り、右馬丞が一左右をぞ待ちにける。是をば知らで美作は、今宵雨中の徒然に、酒宴して慰まんと、家の子郎等

召集め、諷ひ戯れ舞ひ遊ぶ。此有様を見澄し、右馬丞手引して、城に忍び入り、頓て火をかけ、関の聲をぞ上げにける。城には思ひ寄らざれば、防がんとする者一人もなく、火の光を便にて、敵なき方へと逃ふためき、我先にと落行くを、追詰めく討取り、勝関を挙げ、生捕少々連れ、種崎へ歸りしは、勢猛にぞ見えにける。浦戸の城は、其間手指す計に近けれども、風雨烈しかりければ、數輩の士、徒に門を締め戸を立て、前後も知らず休みしかば、関の聲も聞かず、火の手をも見ず、味方の城の落ちけるを、餘所にして夜を明しける。

長濱合戦の事

大窪美作は、希有にして命を助り、急ぎ朝倉へ立越え、此由を申しければ、茂辰大きに驚き怒りて、此上は是非を評しても益なし。唯運命を天に任すべしとて、一族従兵二千五百餘騎を率して、長濱に馳向ふ。さる程に長濱の城夜討の次第、岡豊へ注進ありしかば、覺世大きに悦び、取る物も取敢ず、急ぎ種崎へ立越え給ふ所に、茂辰

長濱へ出張あると聞えしかば、頓て其勢一千餘騎、慶雲寺の前へ打出でらる。式部少輔は日出野の西の方に備へ、兩陣互に弓鐵炮を進めて、関の聲を上ぐる程こそあれ、敵味方三千五百餘騎、一度に颯と懸合ひて、思ひくゝに相戦ふ。半時計切合ひて、互に勝関を上げ、四五町が程兩方へ引分れ、敵味方を見渡せば、兩陣過半濺ひて、死人戰場に充満たり。覺世の子息彌三郎元親十八歳、今日初陣なりけるが、いかゞしてか味方を離れ、戸の本の西の方に、廿騎計にて控へ給ふ。吉良の士是を見て、願ふ所の幸なりと、大窪美作其子勘十郎吉良民部・宇賀平兵衛・長越前・河村四郎左衛門を始として、五十騎計奮直に打つて懸る。元親少しも擬議せず、鎗取つて近付き、敵三騎弓手馬手に突伏せ、大音聲を上げて、昨日までも互に肩を雙べ膝を交せし同僚ぞかし。爰を引退きて、何の面目ありて再び人に面を合すべき。夫武士は、命より名こそ惜けれ。一足も引くべからずと、駈出でく下知し給へば、元より逸雄の若者共、此詞に勵まされ、黒煙立て、ぞ打合ひける。池添源兵衛は、大窪勘十郎を討取り、東四郎右衛門は、吉良民部が首を取る。宇賀平兵衛是を見て、遁すまじと打つて懸る

を、濱田久左衛門つと駈寄せて、火花を散らし戦ひしが、濱田敢なく討たれるを、弟善左衛門駈出で、平兵衛を討取りけり。吉良民部少輔是を見給ひ、一騎合の勝負は、叶はじと思はれけん、大勢を以て取籠めよと、惣軍横合に懸りけるを、覺世見給ひ、彌三郎討たすな。續けや〜と下知し給へば、長宗我部左京進親貞・吉田伊賀介・其弟江村小備後・一圓但馬・井上六郎兵衛・同喜介・高島三郎左衛門、真先に進んで鎗を入れ、敵味方入亂れ、汗馬東西に馳違ひ、追つ返しつ、旌旗南北に開き別れて、十七八度揉合ひたるに、兩方共に戦ひ屈し、東西に引分れ、暫く息を繼ぐ所に、岡豊勢の中より、洗革の鎧着たる武者一騎、八端帆の船の帆柱のせうもとを取りて、輕々と打擔げ、閑々と、小歌諷うて進み出でたり。兩陣の兵、あれを見よ、人間にてはあるまじと稱美す。敵陣近く歩み寄りて、高聲に申しけるは、敵味方互に面を相知りて候へば、名乗るも嗚呼がましく候へ共、時に取つて知らぬ人もあるべければ、申すにて候。是は江村小備後と申す者なり。日來旁とは、茶の會酒宴の席に於て、參會すると雖、弓矢の對面は是始に候へば、一際華やかなる働して、敵味方の瞳を醒させ候べ

し。すは參り候ぞと、群立ちたる敵の中へ走り懸れば、一度に崩れて逃行くを、追討に討つ程に、只卵を、石を以て押すに異ならず。誰か是に手向ふべき。漸々として式部少輔は、海際を東へ、浦戸の城にぞ籠られける。覺世續いて押寄せ、捫みに揉んで攻めにける。長宗我部左京進は、群に抜んで、糖塚に馬を控へて下知せらるゝ所に、黒糸の鎧を着て、鎗提げ城より駈出で、井の村左助と名乗りて、左京進に走懸り、胸板を丁と突くを、左京は太刀を以て打拂ひ、三打四打打合ふ所に、左京進郎等、中に取籠めんと、大勢駈寄するを見て、左助叶はじと思ひけん、城中にぞ引取りける。片岡二郎左衛門とて、強弓の矢繼早、真先に進み出で、大勢を射落し、矢種盡くれば、打物を抜いて戦ひしが、敵皆城に入り、堅く守りて出合はざれば、斯くて城を見上げて日を送るも徒然なるぞ。一番乗して眠を覺させんと狂言いひて、切岸半計上りけるを、城中より放つ鐵炮に討たれて、真逆様に落ちて失せにけり。其後覺世下知して、若宮の前南北海際まで柵を結び、海には番船を浮べて、四方の通路を留めければ、城中には、籠鳥の雲を戀ひ、涸魚の水を求むるが如くなれば、いつまでの命を、此

世中に残さんと、寄手は是を歡び勇み、味方は是に弱りて悲めり。斯る所に覺世、いかなる所存にやありけん、攻口を開きて、種崎へ引退き給ひければ、茂辰頓て浦戸を出で、朝倉の城にぞ籠られける。

元親潮江城を乗捕る并覺世卒去の事

さる程に覺世は、種崎にて人馬の息を休めて坐しけるが、少し例ならぬ心地なりければ、先づ岡豊へ歸陣ありて、療養を遂げられ、重ねて發向あるべしとて、浦戸の城には左京進親貞、種崎には江村小備後を置かれ、長濱の城は破却して、船にて歸陣し給ひける。元親も共に歸り給はんとて、既に船に召されけるが、此事は潮江より起るなれば、重ねて先づ潮江を攻むべし。然れば此序に、宇津山より見分して、西孕より、船にて岡豊へ歸るべしと宣へば、老臣共、宇津山は城より山續きにて、手指す計に近く候。只是より岡豊へ御歸陣、然るべしと申しければ、いや何程の事かあるべきとて、手廻りの勢三百騎、御奥瀬・河古目・横濱を経て、宇津の山に至りて、先勢坂を半

計り上り行く所に、いかにしてか聞きたりけん、潮江の郷人百二三十人、宇津の山の峠へ駈出で関の聲を上げ、石を落し大木を倒し、喚き叫んで攻懸る。先手の勢、思ひ寄らざる事なれば、一度に吐とぞ崩れける。元親是を見て、貳き者共の有様かな。あの郷人原に、後を見するやうやある。鐵炮をつるべかけ、其勢に乗りて押上れ、懸れ懸れと齒嚙をして下知し給へば、逸雄の若者共、鐵炮を打かけ、曳々聲を出して捲り立て、持して攻上りければ、郷人共、我れ先にとぞ逃去りける。山傳ひに、西を指して行くもあり、鹽屋崎を北へ逃ぐるもあり。元親は峠にて、暫く見分し給ひ、いざ此城を攻むべしと、真先に懸りしかば、老臣諫めけるは、城中の勢量り難し。此の小勢にて寄せ給はん事、覺束なく候。本山をさへ亡し給ひ候は、斯様の端城は、獨り落ち候べし。大義の前の小事、聞き給ひ、平に御歸陣候べしと申しければ、いや、元親見所あり。此城には人はなきぞ。急ぎ攻入れと宣ひければ、若者共承り候と、われと攻寄せ、逆茂木を除け塀を越え、門押破つて見れば、實にも元親の推量に違はず、爰の木の枝彼處の梢に、旗馬印を結付けて、敵一人もなかりけ

長宗我部
元親沈勇

り。老臣共大に驚き感じて、暫く閉口して居たりける。元親の前に畏つて、抑城中に、人なきを知召され候は、如何なる御思慮に候やと申しければ、元親仰せけるは、つくづく此城を見るに、天に飛ぶ鳥、林に居る鳥、嘗て驚く事なし。是一。又旌旗動かざるは詐なりといへり。城の旗印、所定まりて動く事なし。是二。扱逃ぐる者、城に味方ある時は、出づるを待兼ねて、必ず城を見やるべし。然るに城の方を見るも一人もなし。是三。人城より必ず打つて出づべし。是四。城に人なき事明らかし。疑ふ所にあらずとぞ宣ひける。此元親は、生得背高く色白く、柔和にして、器量骨柄天晴類なしと見えながら、要用の外は物いふ事なく、人に對面しても會釋もなく、日夜深窓にのみ居給ひければ、姫若子と異名を付けて、上下囁き笑ひけり。されば當家も末になりぬと、覺世深く嘆き給ひ、數度の軍にも具せられざりしが、今年既に十八歳なりければ、戰場をも見せんとや思しけん。此度初めて長濱へ伴ひ給ふ所に、戸の本の合戦に、味方を離れて坐しければ、覺世見給ひ、あのうつけを見よ。唯捨置きて、打殺せとぞ宣ひける。斯る所に元親、大きに勇を振ひ給ひしかば、覺世悦

び給ふ事限りなし。又小勢にて、敵城近き宇津の山に至り給ふのみにあらず、此城を乗取り給ひしかば、諸軍舌を振ひ、是凡人にあらず。後には天下に譽を顯し給ふべしと、稱歎せぬはなかりけり。さる程に覺世は、岡豊に歸り給ひ、種々の醫療をされけれ共、針灸調劑の術も絶え、既に臨終に及びしかば、彌三郎を呼びて、我病命今に迫りぬ。本山は怨敵の張本なれば、報酬の志深しと雖、時至らずして打過ぎぬ。然るに今度彼が領内に入りて一戦に打勝ち、三ヶ城を乗取る事、生前の本望、死後の思出なり。されば我爲には、本山を討つより外に供養なし。我死せば、一七日の間は、世法に隨ひて、汝が心に任すべし。夫過ぐれば、喪服を脱ぎて甲冑に換へ、軍議を專にすべし。此旨堅く心得よと宣ひ、永祿三年六月十五日、五十七歳にて、遂に卒去し給ひけり。さらぬ別れの悲しけれども、扱あるべきにあらずとて、岡豊の東北千歳山謙序寺にぞ葬りける。斯くて元親は、一七日の作善、心の如く執行ひ、悲涙未だ乾かずと雖、亡父の遺言に任せ、吉良退治の評議をなし給ふ。

長宗我部
國親死去

吾川陣井一條殿蓮池城を攻め給ふ事

浦戸・長濱・潮江・落城すと雖、吉良は素より多勢の城の多かりけり。先づ本山には本山佐渡守、森には和田美濃守、白箬には種田岩右衛門、梅本には大黒與七兵衛、今井に今井左馬助、尾立に中内記、杵田に大黒主計、萬々に吉松式部、秦泉寺に秦泉寺大和守、久萬に久萬豊後守、一宮に近藤某、國澤に國澤將監、高坂に大高板權頭、井口に井口勘解由、福井に稻毛右京、神森に神森出雲、木塚に木塚左衛門太夫、其外吉良・秋山・西畑・仁野村・森山・神田等、詰りくくに城廓を構へ勢を入置き、其身は朝倉に在城して、本山阿波・義井修理・鶴來巢紀伊守・吉良五郎兵衛・徳久左助・島田善左衛門・川村四郎左衛門・長越前・同左近左衛門・竹中彌右衛門・中島新介・高石與七・岡崎與左衛門・河村兵庫・森本六郎次郎などいふ究竟の者共、是を守護す。柏尾山・鷺尾峯・三谷の時・久禮野山・檜山・國見峠、其外山々峯々手寄々々に、烽火の場を定め、時々刻々に相圖をなし、相救ふ事、毒蛇の首尾を合すが如くなれば、吉良を攻傾けん事は、中々思ひ

も寄らず見えにける所に、式部少輔長濱の軍に討負け、朝倉へ引退き給ひしかば、俄に事の出で来るやうに、上下周章騒ぐ事斜ならず。城々大きに恐怖すと聞えければ、元親時は且くも失ふべからずとて、同廿五日、急ぎ岡豊を打立ち、種崎に一日逗留ありて、長宗我部左京進・江村小備後を先手として、吾川郡へ發向あり、木塚の城へ押寄せらる。城主左衛門太夫出向ひて戦ひ、勇を振ふと雖、多勢に無勢叶はず、人質を出して降参す。夫より秋山・森山・西畑・仁野村等の城を攻伏せられて、腹を切るもあり、明退くもあり、降参するもあつて、手向ふ者なかりければ、直に吉良の城を取巻き、一日一夜息をも繼がず、新手を入替へ攻むれども、本山の一族、多勢にて籠りしかば、固く守りて降らず。元親城の體を看得して、一旦には攻干し難し。先づ此陣を引くべしとて、攻口を開き、森山の城には富家刑部を入置き、秋山・吉原・木塚にも加勢を籠置き、既に歸陣に趣かるゝ所に、一條權中納言兼定卿より使者を以て、先年蓮池の砦を本山に攻取られ、無念少なからずと雖、勢微にして本意を遂げず、年月を打過ぎぬ。然るに足下出勢の折を窺ひ、其費に蓮池を取返すべしと思立ち、勿論其

方より、彼地へ人數を差越されまじく候とぞ仰せける。元親委細畏り承り候。高岡郡に於ては、些も手を指す覺悟に候はず。急ぎ彼表へ御勢を差向けらるべく候。若御人數不足に候はゞ、加勢進上仕るべしと即答ありて、八月廿七日、岡豊へ歸られけるが、頓て名を改めて、宮内少輔とぞ申しける。さる程に兼定卿、卅餘騎の軍兵を率して、宇佐浦より三森を経て、蓮池の城へ押寄せらる。城中の者共は、土佐・吾川の城歿落の沙汰、日々に聞えければ、吉良・朝倉もいかゞあらんと、唯岩に腰かけたる心地する折なれば、防ぐ兵一人もなく、我先にくくとぞ落行く。扱こそ蓮池・高岡の郷、再び一條家の采録となりけり。

一條兼定
蓮池城を
攻む

土佐郡城々軍の事

爰に大高坂權頭國澤將監・大黒主計は、多年本山の幕下にて、政事を談じ軍議を評し、茂辰も他に異なる思をなして、自然の時は、一方の大將にと頼み思はれける所に、彼等は皆長宗我部が一族なれば、日來の契約を變じて、元親にぞ屬しける。是を始と

して秦泉守大和守・吉松式部・稻毛右京、人質を出して降參し、近藤某は、城を明けて失奔す。久萬豊後守俊宗は、固く守りて降らざるを、谷式部左衛門先登して攻入りければ、久萬叶はず、城を明けて落行きけり。此久萬と申すは、左馬頭義朝の五男希義、父の縁座に依りて土佐國へ流され、吉良に坐して、吉良の冠者と申しき。其一子八郎終に吉良の城主となり、數代連續して、十六代の孫吉良常陸介俊國が次男次郎高俊、此久萬を領してより氏とす。今豊後守俊宗までは、五代とぞ聞えし。俊宗、元親に攻落され逐電して、久萬の城は、久武肥後に給はる。然るに豊後守は、國澤三河守が長女を娶りて、親族たるに依つて、三河守口入して、後に元親へ降參す。此時久武肥後老年に及び、法體して正源と改め、一宮のととくに隱居せしかば、豊後守には、本領久萬を給はりて還住す。斯くて土佐郡へは、長宗我部右兵衛・吉田備中入道周孝・同次郎左衛門・福留隼人・中島大和を差向けらる。中にも備中入道は、一年聊所用に付きて、本山へ立越え、暫逗留せし事ありしに、井口勘解由と一所にありて、心安く語りしより、常に書音を通はしければ、使を以て、急ぎ降參候へ。周孝取持つべし

といひ送りける。勘解由使の者に向つて申しけるは、御心入祝着せしめ候。迎もの事に、元親是へ御向ひ候へかし。降参の印に、一矢進上申すべしと、嘲哂してぞ返しける。周孝聞きて、憎い井口が言分かな。さらば返禮申さんと、手勢計を引具して、井口の城に押寄せける。勘解由聞ゆる勇者なれば、百七十騎を左右に備へ、寄手の城中へ駆入りて、七横八縦に打破る。寄手泳へず、一度に崩れて逃げければ、二郎左衛門馬駆居る大音上げ、扱も黒き有様かな。返せくと呼ばはりければ、家臣吉田九郎右衛門・同又兵衛・西内助左衛門・同助七横田九郎左衛門、大將を捨て、逃ぐるといふ事やあるべきとて、惣軍取つて返し、時移る迄、火を散らして戦ひけるが、互に兩方へ颯と引きて息を繼ぎ、井口は馬駆廻し、下知する所を、三郎左衛門が郎等中野新八、岨を傳ひ繁みの際より狙ひ寄つて、ひやうと射る。井口が左の脇より右の方へ、矢先六七寸射抜きたり。さしもの勇者と雖、究竟の矢強なれば、一言に及ばず、うんと計を最後にて、馬より落ちて亡せにけり。新八箆を叩ひて、城の大將を射止めたるぞ。續け人々と呼ばはりければ、寄手悦び、二度にとつと懸りける。城兵共、何

の爲に惜むべき命ぞと、駆出でく一人も残らず討死す。周孝父子城に駆入り、勝鬨をぞ上げにける。頓て使を馳せて、岡豊へ事の由申しければ、元親感悦ありて、井上城を周藤にぞ給はりける。神の城へは、長宗我部右兵衛・福留隼人中島大和向ひける。此城は、雲に聳えたる高山にて、四方皆嶮岨なり。中にも北の方は、屏風を立てたる如くにして、鹿兎も通ふ事能はず、西一方のみ山に續きたるに、大木を倒して、逆茂木とし、石を疊みて垣としければ、人の上るべき様もなし。されども攻めずして、城の落つべき道なければ、惣勢曳々聲を出して押上る所に、弓鐵炮の手垂共籠りたれば、只寄手手負ひ討たる、計にて、城中恙なかりけり。只麓に控へて進み得ず、徒に日をぞ送りける。隼人申しけるは、今の如く味方討たる、計にては、城を落す事難かるべし。此城、四方を放れたる高山なれば、城内に水はあるべからず。西の方の山續より、汲み運ぶと覺えたり。勢を廻し是を防ぐならば、城中渴に臨んで、獨り落つべしと、西の方芝牧山へ勢を廻し、鐵炮を備へ、城より人の出入を留めけり。斯くて六七日過行けば、城中今は渴に及ぶらんと思ふ所に、夕つかた城内西の方少

し小高き所に、馬引出し、瀧の如く水を汲みかけて洗ひける。寄手興をさまし、いやいや城に水は澤山なるぞ。晝夜爰を守りたるは何事ぞ。方便てだてを替へて攻むべしと、攻口をぞ開きける。後に是を聞けば、城中既に渴に臨み、草柴の露にて咽を濕し、雨を待つとも降らざれば、城主出雲、敵の機を取らんと、日暮物の色さだかならぬ時分に、米を馬に酌みかけしかば、外へは、水のやうに見えけるとかや。斯りし程に寄手も退屈して、皆面々に陣取りて、帷幕の内にぞ休みける。爰に福井の住人共、一所に集り居たりけるが、或夜一人申しけるは、方々は何か思ひ給ふ。我々共は此度降参の者と雖、案内者にせられ、此寄手にも加へられたり。然るに人並に、城の族計を守り居て、仕出す事もなくては、人口を塞ぐに所なし。思ふに此城北の方は、鳥も翔り難き嶮岨なれば、敵爰をば油断して、番人をも附置くまじ。いざや人々、他の勢を交へず、我計此所より忍入り、城を攻落さんといひければ、傍より、いや／＼若仕損じたる時は、二なき命を失ひ、而も人に笑はれん。無益なりといひければ、始の男、士の言は、再び返さず。我忍び得たらば、城に火をかくべし。其時は各関を作りて寄せ

給へ。火の手上らずは、討たれたりと思召し、念佛して給はれと打笑ひ、いひ捨てて立出でけり。其中に一人、申さるゝ所潔し。日頃一所に語りし傍輩を、一人見放すといふ事やあるべき。我も伴ひ行かんと立出づれば、我々も見繼がんと、三人跡より續きける。頃は九月廿三日亥刻計の事なるに、空搔曇り小雨降りて、目刺すも知らず暗き夜に、神の森の北の岨へぞ向ひける。元より此所、木もなく竹もなく、切岸の如くにして、一片の雲に聳えたるを、死出の山よと戯れて、楸茅の根荊などを力とし、足も耐らぬ所に、命を限りに上りける。二時計辛苦して、今は半を過ぎぬらんと、一息繼いで見上ぐれば、何とは知らず笠の如く覆ひ懸れり。雲影に能く見れば大岩なり。取らんとするに便なく、歸らんとするに道もなし。進退爰に谷りて、草の根一つを命にて、大息繼いで居たりける所に、廿三夜の月、ほの／＼と出でにけり。其光に邊を見れば、茂りたる楸あり、一人手を延べて取付き、兎角して岩の上に入り、頓て差繩を岩角に結付け、其端を下しければ、四人是に取付きて、岩の上に入りつゝ、是より上は嶮しからず、人の行交ふ道見えたり。今は是迄なりと五人立別

れ、二所に火をかけ、静り返つて、事の様をぞ見居たりける。暫くあると城中より、黒煙を巻きて燃え出でたり。五人の兵八方に駆廻り、関の聲を上げければ、山彦に答へて、大勢の聲とぞ聞えける。残りし者共是を見て、扱は五人の輩、乗り得たるにこそあれ。續け者共と呼ばれば、惣軍取る物も取敢ず、鐘太鼓を鳴らし貝を吹き、関を作りて押寄せたり。城には思ひ寄らざれば、防がんとする兵一人もなく、我先にと逃げにける。出雲が妻女は、周章て、やありけん、北の岨より逆に落ちて死にけり。即其處に葬りけるが、後に人に祟をなしければ、近隣の野人村老集りて、落神と名付け、一社の神に齋ひて、今に祭禮をなすとかや。出雲は焔の中を逃れ出で、東の尾崎に駆上り大音聲して、神森出雲腹切るぞ。寄つて首を取れと呼ばれば、我討取らんと、七八人先を争ひ駆寄るを、真先に進む二人を、同じ枕に切倒せば、残る者共膽を消し、かゝふつて逃げにけり。出雲是迄なりと、腹搔切つて亡せにけり。されば此所を郷人共、腹切森とぞ申しける。石立にも神田にも是を聞きて、叶はじとや思ひけん、兩城共同日に明けて、皆朝倉の城にぞ籠りける。さる程に本山領、南

長宗我部
元親勢威
振ふ

郡は吉良朝倉の外は、皆岡豊へ随ひ靡きければ、元親下知して、城々を守らせらる。先づ一宮・米本には、谷忠兵衛を差置かれ、近藤某が居城近藤谷、并にはけ谷・嶋が峠の城をば、皆破却せらる。神田城は細川備前入道宗桃、石立の城は吉田三郎左衛門・廣田四郎兵衛を入置かる。此外降參の輩は、舊領に安堵して在城す。神森・鷺尾は勝れたる高山にて、遠候の便よければとて、鷺尾には番手の士を籠置き、神森城をば非有に預けて守らせらる。此非有と申すは、元は眞言坊主なり。當國瀧本寺の僧侶にて、元親の歸依僧なるが、其器にや當りけん、國政の奉行になし、山内三郎右衛門・久萬二郎兵衛・豊永五郎と相並び、公事評定軍議に預かる。諸方の問者にも行きしとかや。元親頼て落墜せよと宣へ共許容せず、一生精進潔齋にて居たり。毛利に安國寺、長宗我部に非有、時の人は是を一對坊主といひ習はせり。されども安國寺は名利に耽り、一度發名しけるが、佛意にや違ひけん、終に生捕られて、首を刎ねられぬ。此非有は國政に交はると雖、毫髮の私なく、利慾に耽らず、武功もなく勇名もなく、一生終りけるとぞ聞えし。此森の邊は、非有が知行なればとて、此城を預けられた

り。楠瀬隼人・岡村平兵衛・同善左衛門・同與四郎などいふ家の士を、遣し置きてぞ守らせける。谷忠兵衛とて、元親の肱股の臣なりしは、非有が弟なり。

秋山城夜討^并吉良城軍の事

斯りし後は、長宗我部へも附かず、吉良へも歸らず、勝負を兩方に窺ひける近隣の者共、皆岡豊へ靡き隨ふのみにあらず、本山相傳譜代の家人、厚恩異なる郎従共の中にも、縁を求め便に隨ひて、降参する者多かりけり。さる程に爰の亂妨、彼處の放火、苗代返し、荏田、麥薙、鐵炮の競合、永祿三年より同五年に至る迄、日々夜々止む時なく、死生存亡を宗とする程の軍はなけれども、吉良は日に添へて衰へ、長宗我部は月を隨つて猛威を振ひけり。式部少輔申されけるは、亡父入道殿、土佐・吾川二郡并長岡郡の北の山分を領して、一度先祖の家を興し、後榮を子孫に残す。茂辰苟も遺跡を繼ぐと雖、全く保つ事能はず、三年を経ず、長濱の合戦に打負け引退きしより後、數ヶ所の城廓を攻落さる。我生前死後の恥辱なり。一度是を取返さずんば、縦ひ元

親と死を共にすと雖、嘗溺の口をば雪ぎ難し。亡父尊靈、草の陰にて、さこそ言甲斐なく思召すらんと、忿れる眼に涙を浮べて宣へば、義井修理、御誕御理に候。さり乍ら故入道殿、忍の字を額に書きて、御座の側に掛けて、常に仰ぎ候ひしは、忍にあらざれば功をなすことなし。汝等構へて忍の字を忘るゝ事なかれと仰せられ候を、只幾度も、忍の字を御心に味ひ給ひ、兵を伏し武を隠し、時を待ち給ふべしと、詞を盡して申しければ、茂辰の理に打たれて、古人の詞に、敗軍の將は再び謀らすといへり。兎も角も修理に任すべしと宣ひけり。茂辰の嫡子將監親茂は、默然として聞き居たりけるが、潜に吉良の城へ立越え、諸將に向つて申されけるは、式部少輔殿の所存、義井修理が諫言斯の如し。然れども我是を信服せず。抑膝下の城を敵に取られ、餘所に見て、晴天として守るといふ事やある。是を取返さんに、何の難き事あらんや。畢竟味方の士共、皆敵に機を呑まれ、攻取らんと思ふ心なき故なり。いざ今宵秋山の城を夜討にすべし、手近き森山を闇き、秋山へ寄せんとは、よも思ひ寄るまじ。太公望も疾毀其不意といへり。若し森山・木塚より後詰をせば、夫こそ願ふ所

なれ。豫て手分をして、兩方へ附入り、一度に乗取るべしと、謀細やかに、義に當つて宣ひければ、一座均しく此一言に勵まされ、尤然るべしとぞ同じける。さあらば暫くも猶豫すべきにあらずとて、夜討に馴れたる兵四百人勝りて、二百人をば秋山の寄手とし、二百人をば後詰の手當として、笠符を一樣に付けさせ、合詞を約束して、夜既に二三更の程なりければ、秋山の城へ押寄せ、二百人同音に、鬨を吐と作る。城中大きに震動して、馬よ物具よと犇く程に、暗さは闇し、分内は狭し、馬放れ人騒いで、手負ひ討たる、者數を知らず。我先にと逃げふためきて、生捕らる、者も多かりけり。頓て城に火をかけ、勝鬨を上げて、吉良の城へ引取りける。扱こそ長濱の返報はしたりと悦ばれけり。木塚左衛門太夫は、浦戸城へ所用ありて立越え、夜更けて歸る所に、何とは知らず、大勢崩れ懸りて來る音す。左衛門驚き、人を遣して何事ぞと問へば、爾々と答へて、足早に行くを追懸け、木塚の城はいかにと問へば、秋山より先に、焼落され候と云捨て、逃延びけり。左衛門、扱いかせんと思案す。郎等共、急ぎ岡豊へ立退き給ひ、重ねて大勢を以て取返され、然るべしと申しければ、

本山親茂
秋山城を
襲ふ

左衛門、いや、我れ城に在合はず、焼落されたる事、誠に不運至極なり。其焼跡も見ずして立退きたらんには、後日の嘲哂逃れ難し。思ふに敵は、未だ城の邊にあるべし。紛れ入りて、よからん敵と組んで、刺違へ死すべし。爰を遁れて、逃げたりと沙汰せられては、再び人に面は向けられず。後るなくと真先に進みければ、諸人此議に同じて、揉みに揉んでぞ歸りける。城近くなりて見れば、城は恙なし。不思議に思ひ、人を先達て、左衛門殿御歸りぞと呼ばはりければ、城中には、悦合ふ事限なし。左衛門若し長濱より、直に岡豊へ落行きなば、世の物笑となるべきに、勇は面を起し、名は義を汚さずと、諸人舉つて感じける。此由岡豊へ聞えければ、油斷すべきにあらず。さらば討手を遣せとて、長宗我部左京進、江村小備後、福田隼人、中内惣右衛門、桑名彌兵衛、木塚左衛門太夫、富家刑部、其勢一千三百餘騎、吉良の城へ差向けらる。吉良よりは、森美作、大窪美作、本山阿波竹中彌右衛門、岡村與左衛門、河村兵庫、城を出でて駈向ふ。さる程に兩方の軍勢、弘岡の野に打臨みて、敵三度鬨を作れば、味方も鬨の聲を合す。馬の足に障る草木もなき、平々たる廣き野に、兩陣相懸り

に懸りて、一所に颯と入亂れ、火を散らしてぞ戦ひける。汗馬の馳違ふ音、太刀の鏗音、矢叫びの聲、山彦に答へて夥し。辰の刻より未の終まで、十七ヶ度の駈合に、兩方に討たる、兵八百餘人、疵を蒙る者は數を知らず、兩陣互に戦ひ屈し、相引に引退き、城兵は城に入れば、寄手は陣を取り、帷幕の内にぞ休みける。其後は互に弓鐵炮軍にて、抄々しき合戦はなかりけり。

朝倉合戦の事

長宗我部元親は、永祿五年九月十六日、朝倉へ發向あり。香宗我部内記・同右兵衛久武肥後・同内藏介・中島大和・吉田伊賀助・同二郎左衛門・馬場因幡・國吉甚左衛門・岡左衛門太夫・桑名丹後・野田甚左衛門・十市備前守・池豊前守・横山九郎兵衛・工文將監・國澤將監・大高坂權頭・秦泉寺大和守を先として、以上其勢三千餘騎、朝倉城に押寄せ、関の聲を揚ぐれば、城中にも関を作り、辰の刻より、兩陣互に矢合して、入替へ入替へ息をも繼がず。其日は一日戦ひ暮らし、相引に引取りける。翌日早旦岡豊勢、

長宗我部
元親
本山
茂辰合戦

関を作りて押寄せ、兩陣相挑みて、未だ戦はざる所に、若武者一騎、糸火威の鎧に、同毛の甲、龍頭打つたるを着て、塗籠藤の弓を持ち、葦毛の馬に乗り、大門開かせ、大音聲にて、是は本山將監親茂なり。伯父に向つて弓彎かん事、大の恐れ候へ共、うけて御覽候へと、暫く堅めて、元親の旗を指してぞ射たりける。其矢三町餘を越えて、宮内少輔の前に立ちたる兵の、甲の金物射削り、元親の草摺に、裏をか、せてぞ立ちたりける。即此矢を取つて見給ふに、本山將監親茂と、漆を以て書きたり。元親、世倅めはいつの程に、是程に射習ひたるぞと宣ひけり。親茂生年十六歳、背高く骨太く、心も剛に、手も利いたり。祖父梅慶入道は、無雙の精兵なり。式部少輔は些し劣りけるが、將監は壯年の頃、父を越え祖父にも勝るべしとぞ、人皆申しける。親茂二の矢を取つて、一陣に進み來る。興津左衛門太郎を、狙ひ澄してはたと射る。思ふ矢坪を違へず、胸板をかけず射通して、後に控へたる野中三郎左衛門が乗りたる馬の平頭に、沓卷責めてくざと射籠みたりければ、興津は、あつといふ聲と共に、馬より倒に落ちて死す。野中が馬は、屏風を倒すが如く倒れければ、主は、弓杖突きて下立

ちたり。長宗我部は、隠れなき精兵なるが、是を見て、いで某も一矢仕らんと、十五束三伏の金磁頭、沓巻を残さず引詰めて、弦音高く切つて放つ。遙後に控へたる蒲原彈正が甲の眞向より、眉間を碎きて射抜きたりければ、一言に及ばず、馬より落ちて、起きも直らで死しけり。其後二人立並びて、矢種を惜まず差詰め引詰め、散々にぞ射たりける。沓の子を打つたる様に控へたる敵なれば、何かは外るべき。馬武者十六騎射落されければ、惣軍前へも進まず、後へも返さず、矢面なる人を楯にせんと、背を縮め色めく所を見澄し、得たり賢しと、鶉來巢紀伊守・義井修理・中内記・金井左馬助・川村四郎左衛門・島田善左衛門・長左近左衛門、勝鬨を作りて七百餘騎、轡を雙べて駆けたりければ、寄手立足もなく、一同に崩れてぞ逃げにける。元親目を怒らし、貳し返せと、馬を駆居るて下知し給へ共、大勢の靡き立ちたる習なれば、返し合する者一人もなく、我先にと引きける間力なく、勇將も猛卒も、同じ様にぞ落行きける。朝倉勢勝に乗つて追懸けゝる。元親も、既に危く見えけるを、野中五百藏が一族返し合せ防ぎ戦ひ、一所にて皆討死しける。其間に元親は、急ぎ遁れて、神田の城に

ぞ籠られける。茂辰透さず押寄せ、前後より追取巻き、只一揉みにと、息をも繼がず攻めたりければ、城中にも、爰を専途と、喚き叫んで防ぎける。逃げ散りたりし岡豊勢、爰彼より馳集り、寄手の跡を遮らんと取巻くを見て、後より捨鼓打つて引きける間、式部少輔も朝倉へ引返すを、岡豊勢、追打に、其數あまた討取りける。扱こそ兩方、牛角の戦になりけれ。明くれば九月十八日の卯の刻に、元親神田を立ちて朝倉へ押寄せ、茂辰は朝倉を出で、鴨部の宮の前に馳向ひ、兩方鬨の聲を上げ、火を散らし、て相戦ふ。先陣互に討たれて引退けば、二陣入替り、喚き叫んで切合ひ、討たる、者多かりけり。其時式部少輔、三百騎を左右に立て、元親の旗本へ、一文字に駆入り、天を響し地を動して攻戦ふ。卯の刻より酉の下まで、卅餘度の戦に、吉良一族廿三人、頼み切つたる郎従八十五人、其外軍勢二百卅五人まで討たれければ、岡豊方の討死五百十一人と記しける。互に續きて敵にも懸らず、暫く手負を助けて、元親は岡豊へ引退き給へば、茂辰は城を守りて、中々軍もなかりけり。

草薙陣附茂辰本山へ退去の事

兎角する程に年も暮れて、明くれば永祿六年正月元日、年の始を祝ふ所に、朝倉の在家より失火出来、北風盛にして、黒煙天を焦して焼上る。あはや城にも火かゝるかと見る所に、俄に風替り、西より東へ吹卷りける間、城は恙なかりけり。後に是を聞けば、大黒主計・吉松式部、朝倉を焼拂ひ城を乗取り、功に備へんと密に内談して、在家に火をかけ、れども、城には恙なく、火を防ぐ者の外は、静り返つて居たりければ、流石城へ寄する事も叶はず、守り居たる所に、俄に風替りて、猛火を味方へ吹きければ、吉松・大黒、跡をも見ずして逃歸りける。是を憎しと思ふ者やありけん、草薙陣と名付けてぞ笑ひける。是は日本武尊東夷征伐の時、草薙劔の事に準へて斯くいひしとぞ。朝倉には、味方に返忠の者ありて、敵を引入れ火をもかけ、ると云沙汰して、互に心を置き合へり。三軍の敗も、狐疑より生ずといへり。斯くては當城にて、功を立てられん事難かるべし。本山へ引退き、國見檜山兩所を差塞ぐ程ならば、敵

縦ひ何萬騎向ふとも、恐るゝに足らず。但し本山は、餘り山深く人里遠くして、四方へ往來の便悪きに依りて、故入道殿、當城に移り給ふと雖、本山は究竟の要害の上に、田畠廣く兵糧澤山なれば、攻の城に扱ひ置かれ候なり。是へ取籠り、五年十年も相戦ひ候はゞ、元親も退屈して和談あるべし。其時に至りて、猶計策をなし給へと、諸臣一同に諫めければ、茂辰實にもとて、既に打立ち給ふ所に、領家の郷人數十人馳來りて申しけるは、領家山こそ、究竟の要害にて候へ。先是へ御開きありて、兎角の御評議遊ばし候べし。彼山の西の方に、一宿城と申す城あり。是は御當家御草創の始、本山より朝倉の城へ押寄せ給ふ時、俄に彼城を取立て、御一宿ありし故に、所の者共、是を一宿城と申習はせり。其時輒く朝倉を攻取らせ給ひ候。されば御當家の爲には、御吉例に候間、彼地へ御退きありて、御計略を廻らされ、程なく是へ御歸城なされ候べし。御迎の爲に參り候と、謹んで懇情を盡し、誠に他事なげに見えければ、大將も士卒も、皆頼もしき思をなして、永祿六年正月十日の夜、朝倉の城に火をかけ、其光を道のしるべとして、領家山にぞ籠られける。尾立・大梯内・行川・宗安寺・伊野。

賀田・横矢・大理・今井・白岩、其外裏山等の軍勢馳集り、深山を堺うて楯籠りしかば、岡豊勢、輒く攻寄すべき様もなかりけれ共、分内狭く諸事自由ならざれば、本山に至り給ふべきに衆議一同して、同月廿八日、領家山を立ちて、茂辰夫婦父子其外軍勢、皆佐渡守茂定が居城本山の城にぞ籠られる。吉良の城にも、朝倉と同夜に明け、一所に落行きけるとぞ聞えし。さる永祿元年夏の頃、朝倉山にて女の聲して、本山は又本山になると諷ひしは、斯る前表にやと、今こそ思ひ知られけれ。さる程に長宗我部左京進親貞、吉良の城主となりて、吉良左京進とぞ申しける。

本山茂辰
本山城に
籠る

土佐物語卷第四終

土佐物語卷第五

瑞應寺建立附豫岳寺の事

長宗我部元親、老臣を呼びて申されけるは、亡父臨終の遺誡背き難く、悲涙未だ乾かずと雖、供佛御施法の勤もなく、軍門に臨む事、衰亂の時とはいひながら、歎きても猶餘あり。然るに天運に叶ひ、土佐・吾川兩郡南分、悉く存分に屬し、吉良朝倉を攻取り、亡魂の鬱憤を晴らす事、生前の大慶、何事か是に如かんや。此上は佛事供養すといふとも、遺言を背くにあらず。謙序寺を再興し、父母の追善をなさばやと、思ふはいかにと宣へば、各承り、冠昏葬祭は、禮の大なるものといへり。齊家治國の大本に候。急ぎ思召立ち給ふべしと申しければ、元親悦び給ひ、其役々を定め、人夫を揃へ、大工小工を集め、北谷の地形を倣し、石木を刻み、丹青を飾り、珠玉を鏤め、日を重ね

月を積みて成就しければ、巍然として輝き、儼然としてあらたなり。御父瑞應覺世大居士、御母祥鳳玄陽大姉の菩提寺なればとて、千歳山謙序寺を改め、祥鳳山瑞應寺と號して、千石の田地を寄せられければ、家臣の面々、四百石の知を、司堂田と稱して寄進す。月々の祭貢、朝暮の勤行怠慢なく、佛法繁昌の靈地なれば、二親尊靈、成道正覺疑なしとぞ見えにける。此時の住侶は、通安和尚とて、高才有驗の活僧なり。其生國は知らず。去る弘治三年丁巳、長門國碧雲寺の輪音を勤め終りて、西國順禮の爲め四國へ渡り、岡豊の城下に來り、泊り給ひける。爰に阿波塚とて、岡豊の東に古墳あり。是は往昔、當國豊永の領主、阿州勢を語らひ、當所に攻め來りしに、當山八幡大菩薩、不思議の瑞驗ありて、敵を悉く討取り、其死骸を山中に埋めたりと言傳ふ。然るに彼墳、夜々鳴動する事夥しく、月を積みて止まざりしかば、男女恐るゝ事斜ならず。宿の主、彼僧に向つて、爾々の事あり。法力を以て鎮め給はれといひければ、易き程の事なりとて、彼墳に行き、一偈を書きて立てければ、其夜より忽に鳴止みけり。翌日旅宿を立出でんとし給へば、主又鳴出づる事もやあらん。今暫しと止め

ければ、我れ急ぐ旅にあらずとて、一七日逗留ありけれども、再び鳴る事なかりければ、今は仔細あらじと、宿を立出で給ひける。此由覺世入道へ申しければ、左様の活僧を兼々願ひしに、それは何方へとか聞きつるぞ。豫州へ赴くとこそ仰せられて候ひしがと申しければ、急ぎ呼返せとて、人を追懸けさせけるに、吾川によぶ・贊殿川にて追着き、伴ひてぞ歸りける。覺世大きに悦び、對面ありて、先づ山田郷豫岳寺に移して、もてなし給ひける。此豫岳寺と申すは、文正元年丙戌、雪心和尙の開基なり。山田下總守大中臣元道、此年卒去ありて、豫岳常悅と謚し、其菩提の爲に、一字の伽藍を建立して、豫岳寺と號し、山田氏代々の位牌所とす。曹洞宗越前國永平寺の末派なり。長門國碧雲寺の輪音を勤め來れり。開山雪心和尙より、今通安和尚までは、十二代とぞ聞えし。此寺の境内に藥師堂あり。本尊は、下總守元道一年上京の時、不思議の靈夢を蒙り、洛陽因幡藥師を盜取りて下國し、此所に安置す。因幡堂には、其頃の新佛を崇めけるとかや。さる程に元親は、謙序寺を再興して、通安和尚を住侶にせんと宣へば、老臣共申すやう、謙序寺は、豫岳寺の末寺にて候。本寺より末寺へ、

移住然るべからずと申しければ、然らば謙序寺に在りて、豫岳寺を支配せさすべしと仰せければ、是は餘儀なき御計らひに候と、其儀にぞ定まりける。斯くて通安和尚を開山として、瑞應寺に入院あり。今に至りて瑞應寺の住持、豫岳寺を支配するとぞ聞えし。其後文正年中、元親居城を高坂へ移されたる時、常通寺をば、土佐郡石立村岩戸に移され、瑞應寺は同郡高坂の北、猿が馬場國島に移して造營あり。其後又浦戸へ城を移されて、此兩寺をも引取らるゝに極りける所に、元親卒去あり、程なく盛親も亡び、國替りて其事止みけるとぞ。

元親縁邊の事

永祿六年の夏、元親家老の面々を召集めて、我れ既に廿五歳に及ぶなり。妻女を求めばやと思ふはいかにと宣へば、家老共承り、是は目出度御思慮、御家門繁昌下民安泰に候。何れをか迎へさせ給はんやと申しければ、元親、美濃國稻葉伊豫寺伊が孫、齋藤豊後守政吉が息女を娶らばやと思ふと宣へば、家臣共驚きたる風情にて、暫く閉

口の所に、中島大和謹んで申しけるは、遠國よりの御縁邊、深き御了簡候か。當國は申すに及ばず、阿讃豫の三國に、大名城主數輩御入り候。是をこそ御縁者になされ、自然の時は、御方に頼ませ給ひ候べし。近國をさしおか閣れ遠境御縁組は、豫て御容色の御事など聞召し及ばせ給ひての上に候か。戰國の時節と申し、遠國といひ、世上の人口をも御思惟候へかすと申しければ、元親打笑ひ、申す所理なり。さり乍ら天神地祇にかけて、全く彼息女が、容色の沙汰を聞及びたるにあらず、色は兎もあれ角もあれ、祖父伊豫守父豊後守、武名香ばしき士なれば、彼腹に出生の子、父祖にあやかる事あらんと思ふ計なり。昔和田の義盛が、木曾義仲の妾巴と嫁したるは、色を好むにあらず、彼が勇力を望みて、朝夷三郎といふ、天下無雙の勇者を産めり。誠に宜しからずや。但それは、其武勇を面の當り見ての事なり。今の世に、巴如きの女あるべきとも覺えず。よし又ありとも、其者を見るべきやうなし。唯父祖の武名を慕ふなれば、遠國をも、強に厭ふべきにあらずと宣へば、何れも大きに感歎して、天晴武將の器なりと、上下擧つて稱しける。斯くて吉田左衛門佐を使者として、濃州へ遣しけ

れば、豊後守も伊豫守も大に悦び許諾あり。頓て吉日を選び、婚禮をなし給ふ。政吉子三人あり。長子は石谷兵部少輔。其次は齋藤内藏助政治、後に利三と改む。三は女子、元親の北の方はなり。内藏助も子三人あり。嫡子は明智孫次郎入道立本。二男齋藤土産左衛門。三は女子、稻葉惣左衛門に嫁す。後に台徳院殿秀忠公の御乳母春日の局是なり。され共兄土産左衛門も召出され、與三右衛門と改め、御旗本の數に加へさせ給ふとぞ聞く。斯くて元親、子供あまたあり。第一は女子、一條左中將内政朝臣の室。第二は彌三郎信親。第三は女子、吉良左京進親實妻。第四は香河五郎次郎親和。第五は津野孫次郎親忠。第六は女子、佐竹藏人妻。第七は右衛門太郎盛親。第八は女子、善松十右衛門妻。是皆政吉娘の腹なり。第九は右近某。第十は女子、小宰相と號す。これは小少將といふ女房の腹に出來たり。家門の繁昌いふ計なし。

秦泉寺并白岩夜討の事

吉良式部少輔は、領家にも怵へずして、本山へ引退れしと聞えしかば、昨日までも、

朝倉へ追従したる輩、岡豊へ随ひ附く事斜ならず。中内記今井左馬助大黒與七兵衛横矢が一族、皆降參す。種田岩右衛門は、白石の城を明けて、本山へぞ籠りける。されば岡豊には、春雷聲を發する勇をなせば、本山には、蟄虫戸をさす思をなせり。中島新介申しけるは、唯今の如くにては、味方日に増し月に随ひ通り行きて、獨り首陽に餓死すべし。夫武士は、唯戦ふべき所を戦はずして、身を慎むを以て恥とす。扱も本山の者共が、敵を恐れて混逃ひたひたに逃げ藏れて、頸をも出さぬ事の可笑しさよと、諸人に笑れん事こそ口惜けれ。迎も死する命を、只蹲り居て、徒に死期の來るを待つ事、且は云甲斐なく、且は武士の本意にあらず。いざ敵地に入り、民家を焼拂ひ、或は亂妨し、其費に乗つて、漸々に岡豊へ攻入るべしといひければ、諸卒皆此議に同じて、究竟の兵を勝りて、一手は中島新介高石與七森本六郎次郎を大將として、久禮野より一宮へ向ふ。一手は岡崎與左衛門徳久左内桑川久助を大將として、白岩より今井大理邊を放火すべしと、相印合詞を定め、遙々の山坂を凌ぎて、兩方へ馳向ひけり。頃は五月五日の夜なれば、月は宵より入りにけり。時刻よくなりぬとて、

二百餘人久禮野の坂を下りて、一宮の在家に火をかけたれば、魔風盛に吹かけ、民屋撫づるが如く焼通り、餘煙四方に覆ひて、西御前・東御前・三所若宮五十八所・稻女社・七所の王子・天神社・竈殿へつひだの・惠比須の社・辨才天・津宮若王子・御奥社・犬宮・仁王堂・護摩堂・鐘樓堂・三昧藏・經寶藏・國司屋・天上屋・厩屋・經所・井屋・東西堀門・一鳥居・二鳥居・三鳥居・三重の塔・社僧社人神主の居所、悉く一時に灰燼となり果て、煙蒼天に立登る。淺猿しかりし事共なり。されども大明神の本社計、残らせ給ふぞ不思議なる。本山の軍兵共、一宮に火をかけて、爰をば闇き、秦泉寺の在家へ打入り、老若男女をいはず、撫切に打つて捨て、三谷の方へ引取りける。秦泉寺大和守是を聞きて、我領内に入り来る敵を、安穩に生けて返すといふ事やある。遁すまじと、手勢八十餘人引具して、揉みに揉みて追懸けたり。本山勢、山の麓にて返し合せ、火出づる程にぞ戦ひける。大和守手繁く切りければ、寄手引色になる所を、森本六郎次郎真先に進みて、駈入り打破り、兩方へ相引に颯と引きて、大和は麓より引返しければ、本山勢も、難なく三谷を越えてぞ引取りける。斯くて一手の本山勢、是も同じく五日の晝より、谷

原・白岩に集り、夜更けて近邊へ押入り、亂妨放火せんと議しける所に、野心の者ありて、方便の次第を、細に今井左馬助に告知らせけり。今井頓て一族親友へ觸廻し、今井六郎左衛門・同彦左衛門・大黒太郎左衛門・弘瀬甚左衛門・同三郎左衛門・同三郎兵衛、其外近邊の軍勢相催し、敵の後へぞ廻りける。本山勢は、夢にも知らず休み居たり。夕陽山に隠るゝ頃ほひ、大勢後より来るを聞きて、味方の油斷者共、遲馳に來ると覺えたりと、一同に大笑して居たる處に、大勢咄と関を作りて押寄せたり。本山勢仰天して、鍵よ太刀よと周章ふためく所を、縦横無礙に駈破り、追詰め追廻し、切臥せ突伏せければ、戦ふもの一人もなく、我れ先にと、前後不覺に逃散りける。恥を思ひ名を惜む輩は、馬を控へ、貳し返合せよと呼ばはれ共、耳にも更に聞入れず、ちりちりになりて落行けば、力及ばず、猛將も銳卒も、本山迄ぞ引取りける。

馬上の城番人狼藉の事

安藝の郡安藝の領主安藝備後守蘇我の國虎は、蘇我赤兄の大臣の末裔なり。元暦の

古、平家滅亡の時、能登守教經と組みて入水せし、安藝の太郎が後なりけり。數十代此所を領して、繁華又並ぶ方もなかりしに、永祿六年の秋、不慮の小事より事起りて、同十二年の秋、安藝の家亡びけるこそうたてけれ。其頃長宗我部元親、中郡大略討隨へ、人勢日に増し月に盛なり。素より秦家興立の志なりければ、幡多・安藝兩郡をも窺ひたく思はれけれ共、幡多は厚恩の主君なり、安藝は一條殿の聳なり、同根一枝なれば、天の恐れをや思はれけん、又は中郡未だ悉く治まらざりければ、先づ其内を整へて、外を窺はんとや思はれけん、其色もなく、互に音信通路ありて、障る事もなかりけるに、不慮の亂出來にける。其濫觴を尋ねれば、千丈の堤の壞も、僅に蟻穴より起り、大厦の傾き覆るも、唯一楔の甘きに初まるとかや。安藝郡和食の郷に、金岡馬の上とて、二つの城あり。是安藝よりの砦にて、香美郡の堺なれば、用心の爲に數十人の士を籠置き、寄手に替へてぞ守らせける。或時馬の上の番の若士申しけるは、香美・長岡・土佐・吾川の邊は、此の城攻、彼の合戦などいひて、慰ありと聞く。長宗我部殿は、唯手に合ひたるもの計を、侮り廻らるゝと見えたり。當郡は多勢なれば、

手さす事もなし。我々淋しくて暮し兼ねるに、あはれ元親、些し指をなりとも指されよかし。よき慰ならんといひければ、又一人進み出で、其方が如何程願ふとも、宮内少輔殿は來られまじ。唯何卒して、眠を覺すやうにせよといひければ、尤なりとて、腕押・脚押・首引・枕引・手綱引・盤持・飛こくら・杯して、日を暮らし夜を明しける。又始の男のいひけるは、日毎に同じ遊なれば、事古りて面白からず。手を換へて遊ばんといひければ、さらば何をがなして遊ばんと、あらぬ事共を企てける。一人進み出で、爰に究竟の事を思ひ出したり。今は菓多このかき時節なり。いざや郷民の園へ、理不盡に押入りて取るべし。主答めば、城番の若士、慰に取るぞといふべし。若し又強ひて咎むるならば、一當當て、見知らすべしといひければ、是に過ぎたる事あらじと、一番二番の鬪取をし、東西南北の手分をして、役所をば打捨て、少々番に残置き、方々へ立越えける。實にや世俗の諺に、垣越ゆる馬一疋あれば、千足の馬垣を越ゆるとは、斯る事をや申すらん。人の園に押入り、栗柿などを取りければ、亭主之を見て、何者ぞ、狼藉なりと、捧ちぎり木にて向へども、さらぬ體にて居たりける。亭

主呆れて、抑誰人なれば、斯る振舞をばし給ふぞと問ひければ、是は馬の上の城番の若士、慰の爲に來りたりと、打笑ひてぞ居たりける。亭主聞きて、始より御名乗候はば、慮外を致申すまじきものを、眞平御免ありて、御心任せに御慰み候へと、慇懃に述べてぞ歸りける。始の程は、斯様にも會釋すれ、度重なり、樹木菜園を荒しければ、郷人共腹を立つれどもすべきやうなく、もてあつかひてぞ居たりける。金岡の番人之を聞きて、若き者共、是は面白からん。何にても珍しき遊をせんといひければ、其中に老人共、いや／＼無用なり。我々如きの役にも立たぬ老人を、番人の數に入れらるゝは、斯様の時の爲なり。全くばさらを働かする事なるべからず。見よ／＼馬の上の禍、近日にあるべし。油斷大敵、堅く慎むべしと制しける。若士苦笑ひして、孔子臭き男が見聞く所にては、何をしたりとも面白からじ。詮ずる所、幸予が流を吸みて、晝寝せんには如かじと、互に呶き笑ひける。爰に香美郡大忍の庄、夜須といふ所あり。是は大備後重俊が城地なり。此庄は、其先安藝に屬しけるが、近年は岡豊の領となりければ、元親の下知として、安藝の境なればとて、大備後、上夜須の城に

移住す。此城を、大藏が城といふ。其外二丈松・釣鐘の森、尼が森とて、三の城を構へてぞ居たりける。馬の上の溢者共、始の程は近郷を立廻りけるが、次第に取るべき菜葉もなくなりければ、私領他領の遠慮もなく、四方を駈廻りける間、上夜須の郷へ押入り、例の如く、人の園の姉の實を、是非なく押倒してぞ取りにける。主是を見て、やゝ大膽の晝強盜、遁さぬぞと、大聲上げて喚けども、さらぬ體にて居たりける。主愈腹を立て、子供隣友呼集め、大勢一度にはつばより、押へて繩をぞかけにける。溢者共肝を消し、我々は、馬の上の番人なり。斯様々々の次第なりと、始終を申しけり。主聞きて、よし何者にもせよ、盜をしたれば盜人よと、取つて引立て、吉田に斯くぞと申しける。大備後、誠に禍は下より起るとかや、國虎知らるゝ所にあらず。以來互の爲なればとて、若士一人相添へ、此者私領に押入り、不義を働き候に付、郷民共搦取り候間、引かせ進じ候。若し此方の下部共、御領に於て不義ばし候は、召捕り下さるべしと、慇懃にぞ申しける。國虎聞き給ひ、何吉田の領へ押入り、狼藉したるものなりとて、搦捕りて差越したりとな。其吉田といふもの、昔は兎もあれ角もあ

れ、今は元親が家臣なり。禮儀を存せば、黒岩か有澤が方へこそ使を越すべきに、國虎に直に使を越すのみならず、彼が下部共、此方へ來りて不義あらば、召捕り給ひよなどとは、誠に緩怠過ぎたる詞かな。其召人召せとて引寄せさせ、仔細を尋ね給へば、始終を申しける。國虎、若き者共徒然の餘りには、あらぬ事をもすまじきものにあらず。是は竊盜強盜の類にもあらず。それごとく、使の前にて繩を解きてぞ許されける。使驚き、返答は聞くに及ばずとて、つい立ちて急ぎ立返り、吉田に斯くぞ申しける。吉田が嫡子伊賀介、忪へぬ男にて、討つて捨つべきものを、手延にしたる事の無念さよ。此上は馬の上の城を乗捕り、本望を達せんと、究竟の若者廿三人勝り立て、先一人百姓の體に作り、馬の上へ遣し案内を窺ひけり。番の者共は、安藝より咎もなかりければ、愈恐るゝ方もなく、遠近を駈廻り、あらぬ惡事をなしにける。斯る所に彼百姓行きければ、番の者四五人残り居て、晝寢して居たりけるが、此者を見て、何者ぞと咎めける。彼者畏りて、是は和食村彌五介と申すものにて候。當所の御番と仰せられ、若き御士衆御越なされ、野菜樹木を荒され、迷惑いたし候。重ね

て御越なきやうに、御取成下され候はゞ、有難く候はんと、謹んでぞ申しける。番の士起きも上らず大笑して、いかにも理なり。當國の名物といひ、汝が住所の物といひ、和食蘿蔔持參せよ。其返禮に、よく取成し得せんといひければ、彼者、それこそ易き御事に候へ。近日蘿蔔差上げ候べし。能きやうに頼み奉り候と、打笑ひて立返り、此由を申しければ、伊賀介喜び、我先にと押寄せける。番の者、人音を聞きて、又郷人共が大勢來ると覺えたり。物ないひそと、空寢入して、高聲かいてぞ臥しにける。吉田が勢、一度に吐と押入れば、番の者驚き、こはいかにと起上らんとする所を、起しも立てず、一人も餘さず討捕り、吉田が家の三引兩の旗押立て、関の聲を上げてける。廿餘人が聲なれども。山彦に答へて、數百騎が聲とぞ聞えける。方々へ立越えたる溢者共大きに驚き、立歸らんと見上ぐれば、吉田が旗を差上げ、大勢乗入りたりと見えければ、詮方なく右往左往に落行きけり。金岡には是を聞きて、老人共、さればこそ、いはぬ事かとぞ申しける。國虎此由聞き給ひ、大きに驚き、吉田めに謀られぬるこそ口惜けれ。頓て取返し、無念を晴らすべしとぞ忿られける。何

者の仕業にやありけん、一首の歌を高札に書いて、安藝の町にぞ立てにける。

伊賀の介やりを廻して馬の上唯一散に乗取りにけり

斯くて伊賀介は、直に馬の上に在城して、壘を高く塹を深くして、用心厳しくぞ見えにける。

吉田伊賀介妻女の事

さる程に元親は、本山へ大勢を差向けられ、日々夜々関の聲鐵炮の音鳴止む隙なく、此に攻寄せ彼に押寄せ、打合ひ切合ひ、利を得て進む時もあり、怯れて退く時もあり、互に雌雄まぢくにして、いつ果つべき軍とも見えざりける。吉田伊賀介も、寄手の人数にて、本山へぞ向ひける。斯る所に過し頃、馬の上の城を取られし番の者共、留守の折をや窺ひけん、百四五十騎相催し、馬の上へぞ押寄せける。折しも伊賀介が妻女は、女房共を集め、四方山の物語をして居たりける。其中に年十四五計なる女の童、何心なく縁に立出で、遠見して居たりけるが、大勢寄せ来るを見て大きに驚

き、敵寄せ來り候と、大聲上げてぞ申しける。伊賀介が妻女些も騒がず、立出で見渡して、いかさま是は彼番人共が、城を取返さん爲に、留守の隙を窺ひ、寄せ來ると覺えたり。さらば此方にも用意せよとて、城中にあらゆる何がしが女房下女はした、扱は言甲斐なき下部の男迄を呼集め、下知をなして、頭に甲を着せ、手毎にも甲を持たせ、塀の上へ差出し、或は左右に鎗長刀を持つもあり、前後に印を挿すもあり、大旗小旗を木の枝塀柱に結付けて、大勢籠りたる體にぞ見せかけゝる。寄手の者是を見て、案に相違やしたりけん、暫し猶豫しけるが、さらぬ體にて城へは寄せず、西の方へ打通り、頓て安藝へ引返しける。一朝の謀にて、虎口の難を遁れ、夫の名をも揚げにける。其頃何者か詠みけん、

打落ちし馬の上人今もまた乗りも得ずしてかちでいにけり

上下男女笑ひ匂りければ、國虎忿りて、其臆病の者共、一々縛首打とぞ宣ひける。斯くて伊賀介は、和食・赤野をも領しける。和食に永松寺といふ寺は、伊賀介が菩提寺なり。

一條殿御簾中御離別の事

一條黃門兼定卿は、去る永祿元年戊午、伊豫國宇津宮某娘を迎取り給ひける。一度笑ひば、百の媚ある御粧、優にやさしく御座しければ、二葉の末かけて、變らぬ色を頼みつゝ、淺からぬ御中に、一男一女出來させ給ひければ、偕老同穴の御語らひなるべきに、定めなきは世の習ひ、月に叢雲花に風、いかなる障や出來さけん、黃門御心に叶はぬ事ありとて、俄に御離別あるべしと聞えければ、長臣土居宗三大きに驚き、兼定卿の御前に出で、涙を流し申しけるは、斯る御事候の由粗承り候。若君姫君をば如何にと思召候ぞや。且は輕々しく、且は御情なしと、詞を盡し理を責めて諫め奉れども、更に承引御座しませず。同七年甲子、終に道理通されける。連理も枝折れ、比翼も友を離れつゝ、御子達を捨置き給ふ御心の内ぞ痛はしき。其後程なく、豊後國大友宗麟入道の息女を迎取り給へり。容色無雙の美人なれば、御寵愛淺からず。さればこそ此御事を聞召し及ばれて、先の御簾中を出し參らせ給ひけん、移り安く

一條氏衰
微

頼み難き御志なれば、此後も又、いかなる御心か出來んすらんと、呷かぬ者はなかりけり。晝は晝日遊宴をのみ事として、國の危をも顧みず、夜は終夜姪樂にのみ昵みて、世の政をも聞き給はず、唯長時の樂にのみ誇りて、禮儀の事をば忘れてもいはず、天理に背き人法にも違ひ、上荒み下廢れて、終に一條の家、衰へけるこそ淺ましけれ。

一條殿豫州合戦の事

人腸胃虚則外邪易侵、國政亂則盜賊易起。頃日幡多中村の野風、上情り下怨みて、天地否をなし、かば、豫州宗和郡の盜者共、斯る所をや窺ひけん、一揆を催し、幡多の山々里々へ打入り、亂妨放火す。是のみならず同國久留島の賊船共、幡多の浦へ押寄せ、在家を焼拂ひ追捕しける程に、浦里の男女怖ぢ恐れ、四方へ逃隠れて、幡多は人なき里となりけり。一條殿此由を聞召し、郷人原に邊境を侵されて、上下驚き騒ぐ事こそ安からね。急ぎ馳向ひて、狼藉を散らせよとて、軍勢を伊豫國へ差向けらる。同國法華津播磨守則延は、常に味方に志ありければ、頓て馳加はりて、

宗和郡の在々に押入り、苗代返し麥薙刈田、亂妨放火して、爰に戦ひ彼に競合ひ、老若男女を選まず撫切にして、西園寺左衛門太夫公廣が屬城三所まで攻取りける。公廣聞きて、安からぬ事共かな。三ヶ城を取返し、直に土州へ攻入るべしと、軍勢を駆催し、黒瀬の城を出で馳向ふ。土佐勢是をば夢にも知らず、三城を輒く乗取る。郷人共皆逃散りて、手向ふものあらざれば、豫州勢恐るゝに足らずと思ひ悔りて、城には言甲斐なき老人下部共を殘置き、富家に入りては押取し、酒家に入りては數盃を酌み、狼藉頗甚し。公廣此由聞き給ひ、軍勢を三手に分け、旗を卷きて擔がせ、静まり返つて、土佐勢を三方より取廻し、同音に鬨を作りて押寄せれば、土佐勢驚き、すはや敵の寄せたるぞ。馬よ物具よと犇く所へ、公廣眞先に進みて、喚いて懸けて、七横に追廻し、八縦に打破り、駆通り打通し、無法無礙に揉みける間、討たるゝもの數を知らず。希有にして逃延びたる者共も、鎧腹巻太刀刀弓鐵炮を打捨て、赤裸になり、命計を遁れつゝ、這々土佐へ逃歸る。見苦しからける分野なり。二ヶ城の者共是を聞きて、叶はじと思ひけん、敵未だ寄せざる先に、城を明けて落行きけり。

一條兼定
西園寺公
廣合戦

さる程に公廣三ヶ城を取返し、勢に乗つて國中を打靡け、近日土佐へ立越え、中村の城を攻取らんとぞ議せられける。一條殿は、軍兵あまた討たるゝのみならず、儲けたる城を取返され、天下の人口に落ちたる事、生涯の恥辱と思召しければ、自身馳向ひ、雌雄を一戦に決せんと、岡豊へも臼杵へも、加勢をぞ乞はれける。元親は、江村小備後を大將として、五百餘騎差遣はす。大友義鎮入道宗麟は、合圖を定め、豊後の臼杵を立ちて、豫州へ向はる。兼定には、法華津播磨守と牒し合せ、其勢五十餘騎、中村を打立ち給ふ。西園寺左衛門太夫公廣是を聞き給ひ、居ながら敵を待たんは、武略の足らざる所なりとて、二千餘騎を率し、城を出でて馳向ふ。兩陣鬨の聲を合圖に、打物抜いて一度に入亂れ、東西に分れ南北に合せて、七八度揉合ひたるに、土佐勢戦屈して、引色に見えければ、公廣、爰を揉めや者共と、眞先に進み給へば、惣軍一同に打つて懸る。あはや土佐勢破れぬと見る所に、武者一騎駆出で、江村小備後と名乗りて、洗革の鎧着て、大身鎧の四尺計なるに、檜木の八九寸廻なるを四間柄にして、尾なし鹿毛とて、隠れなき駿足の、五尺計の馬に乗り、競ひ懸る敵の中へ、無二

も嫌はず駆入り 縦さま横さま前後左右を、突伏せ打伏せ擲り伏せ、或は甲の鐵を
胴へ打込み、或は胴中を裏表かけず突通し、又は小手・髓當・太刀・長刀を微塵になし、
或は人馬共に尻居に打居る、當るを幸に薙ぎ廻りける。此勢に辟易して、さしも勇
ある黒瀬勢、開き靡きて引退く。公廣大音上げ、一騎合の勝負は叶ふまじ、大勢懸つ
て取籠めよと、駆出でく下知し給へば、惣軍取て返し、咄と喚いて打つて懸る。兼
定打見給ひ、江村討たすな、小備後討たすな、續けやとて、相懸りに懸りて、火を散ら
して攻戦ふ。互に味方を恥しめて、引くな進めといふ聲に、退く兵なかりけり。大
友宗麟は、兩方戦屈し、力疲れたる所を見て、荒手に替へんと、遙の外に控へて居給ひ
しが、時分を見澄し二千餘騎、唯一手になりて、横合に懸りけり。黒瀬勢暫く支へて
戦ひけるが、敵は大勢なり、味方は疲れたり、馬強なる新手に駆立てられ、あまた討
たれて引退く。寄手勝に乗つて、鬨を作り懸けく追ひける間、黒し返せといふ族
多かりけれども、大勢の靡き立ちたる習にて、一度も更に返さず、我れ先にと城に入
り、門戸を差固め、爰を專とぞ防ぎける。兼定卿にも宗麟も、軍は十分に勝たざるを
よしとす。一旦敵にしほを附けぬれば、重ねて發向すべしとて、是より引分れ、互に
開陣し給ひけり。

江村小備後歸陣并五倫切の事

一條黃門兼定卿は、豫州より御歸陣あり、江村小備後を召して仰せけるは、汝此度の
武勇、兎角詞に述べ難し。傳聞く栗生・篠塚にも、何か劣るべき。比類なき高名なり。
我れ四國・九州に譽を得る事、唯汝が一刀の功に依れり。感謝するに餘りあり。急ぎ
在所に歸り、休息せよとて、鎧一兩・太刀一腰をぞ下されける。此の鎧、黃門御召の
領に拵へたる韋の鎧なり。黃門は背高く骨太く、力飽く迄強ければ、自ら頼みて拵
らへたる、した、かなる鎧なれば、若士二人して昇出でたり。小備後有難しと、謹
んで戴き拜謝して、頓て岡豊へ立歸り、元親に見えて、軍の次第を申しければ、元親
悦喜淺からず、我年來四國を打取り、漸く興行の志ありと雖、時至らずして過ぐる所
に、今度量らざるに、汝豫州に至り武勇をなし、四州はいふに及ばず、九國・中國に譽

を顯す事、我本懷を達する前表なり。是れ事の始といひ、此度の歸陣といひ、祝儀の規式あるべしと宣へば、小備後悦び様々の設をなして、元親御夫婦御子達女房以下、残らず請じ入れ、二日二夜、善盡し美盡してぞ饗應しける。色々の品を捧げ奉る其中に、五倫切とて、二尺一寸の小刀を、彌三郎殿へ差上げける。此五倫切と申すは、先年此江村の近邊に人多く失する事あり、死しても失せず、飛んでも失せず、座敷に連つて、集り居たる中に立つとも見え、出づるとも見え、搔消す様に失せて、其行方も知らず、恐しなどいふ計なし。いかなる化生の所爲とも、人の目に見えざりしが、後には化物顯はれ、或は鬼形となり、又は女に變じ男に化して、上下を選ばず男女を嫌はず、思ふ程に取失ふ程に、近邊の貴賤、申の時より下りになれば、人をも入れず、出づる事もなく、門を閉ぢてぞ居たりける。小備後其頃十三なりけるが、よし何者にもせよ、我住む邊にて、障目附をなすを、餘所に聞きて暮らすといふ事やあるとて、或夜深更に及びて、人靜つて後、人をも具せず唯一人、西江村の住居を出で、丑寅の方へ向つて行く所に、七尺有餘の大の法師、物をもいはず道に立つて居たりけり。

小備後、是なん聞ゆる化者よと、さらぬ體にて近付き、過ぎ様に抜打にはたと切る。太刀音高く手答して、倒るよと見えしが、搔消すやうに失せにけり。其時聲を上げ、化物を切つたるぞ。續け者共と呼ばはりければ、近所の者驚き、手にく、松明を燈し、馳來り見れば、血流れたり。是を追行く程に、遙北の山に、大きな古墳の五倫倒れて、空の倫牌二つに割れ、血の流れけるこそ不思議なれ。所の者共、是程の古石に誑らされ、あまたの男女惱されしこそ安からね。いざ墳を掘崩し、白骨と五倫とを、大路に曝すべしと評議しける。國親此由聞き給ひ、是は奇代の不思議なり。罪業深く、惡趣に墮せし人なるべし。誠に不便の事なりとて、石塔をあらたに立て、僧を請じ、墳の前にて經を読み弔はせ給ひける、情の程ぞ有難き。其後は化物なかりけり。夫よりして此刀を、五倫切と名付けたり。天晴源氏重代の髭切にも、争で劣り候べき。是を帶ばせ給ひて、敵を亡し國家を保たせ給ふべしとて、彌三郎殿へぞ捧げける。斯る所に一條殿より、土居宗三を使として、國行の太刀一腰、栗毛馬一匹、是は薩摩國瀬崎牧下しなり。下山弓百挺、内五十挺は白木、五十挺は塗籠なり。元

親へ送られけり。是今度加勢合力の御禮なり。彼下山弓と申すは、當國の名物なり。初め高岡部深崎に、市川とて、隠れなき弓打の名人あり。後に幡多部下山の江川といふ所に移住せしに依つて、下山弓と申すなり。文治三年八月廿日、民部大夫行景使者、土佐國より參着、弓百挺并魚鳥干物以下を以て、一艘の船に積み、鎌倉殿へ進上せしも、此市川が弓なりといへり。島彌九郎へも、腰物をぞ給はりける。此彌九郎と申すは、元親の弟なり。何故に今此太刀をば給はりけるにぞと、其仔細を尋ね聞けば、去年馬の上の番人狼藉より事起りて、安藝岡豊不和になり、既に鋒楯に及ばんとす。されば一條殿、元親に御心置かれぬ事はあるまじ。是全く元親が心底より起るにあらず、其御疑を晴らさせ奉らん爲にとて、舍弟彌九郎を、中村へ人質に參らせしかば、黄門大きに感悅ありて、即彌九郎へ、佐賀にて千石の知行を與へ置き給ひけるが、豫州より御歸陣の時、小備後と共に、彌九郎をも返し給ひける故とぞ聞えし。宗三は、隱溪寺といふ城下の禪寺を宿として止め置き、城へ請じて、七五三の饗膳、様々善美を盡されけり。斯くて宗三へ、元親より國俊の刀一腰・馬一匹、是は依

光鹿毛とて八寸六分あり。綿三百把、彌九郎より鐵炮二挺引出物にし、三日三夜、馳走奔走を盡してぞ返されける。

安藝より幡多へ加勢乞はるゝ事

安藝備後守國虎、老臣を集めて申されけるは、扱も馬の上の城を取られたる事、生涯の恥辱なり。其時人數を以て、取返すべしと思ひ立つと雖、旁が諫に任せて聞きぬ。然れども唯餘所に見て、年月を経ば、愈武略の言甲斐なき謗に落つべし。近日大勢を遣し、馬の上を攻取るべしと宣へば、有澤石見進み出でて申しけるは、御詮御理に候。さりながら衆愚の謬々は、一賢の唯々に如かずと申候へば、道を知らぬ人の譏は、取つて評するに足らず候。勇將銳士多勢にて籠りたる城、輒く攻落されたる例珍しからず。況少勢にて守る城をや。是れ時の運による事に候へば、一偏に戦の科といひ難く、合戦の習、一旦の勝負は、見る所に候はず。大行不願細謹、大禮不必辭讓。大將の宗とする所なり。小事を聞きて大事を忘るゝ時は大功ならず。昔新

田義貞は、無雙の名將と雖、赤松圓心に誑られしを憤つて、尊氏を闇きて、日を経て是を攻めらる。其際に尊氏、西國の大軍を率ゐて攻上られ、義貞敗軍す。其後又義貞、大敵の尊氏を忘れ、小敵の黒丸を目に蒐けて、無法に戦死せらる。是れ一時の憤に天下の草創を忘れて、莫大の佳名を失ふ。古人の詞に、若先暴怒唯能自害。豈能害人といへり。誠なるかな後醍醐天皇、朝敵の爲に傾けられさせ給ふ事、聖運開くる時、未だ至らずといひながら、元此人の戦死によれり。されば君の爲には不忠にして、身に於ては瑕瑾なり。是併し乍ら本を捨て末を求め候事にして、大事忘るゝの誤なり。彼を以て此を思ふに、今岡豊を闇きて、馬の上を攻められん事、然るべく候はず。但宮内少輔が軍功を尋ね承るに、其向ふ所、傾けずといふ事なく、其攻むる所、落さずといふ事なし。中郡大略彼手に屬して、其威漸く近邊に振ひ候。國中悉く討隨へん事、程あるまじきと、諸人舉つて沙汰し候。然れ共幡多は、厚恩の主君なり。御當家は、一條殿の御親族に候へば、兩郡に於ては手指す事もあるまじく候處に、不慮の變義出來しぬれば、是を幸にして、御當家を窺はん事必定なり。先づ内を調へ

安藝國虎
一條兼定
に加勢を
乞ふ

て、外を窺はんが爲に、中郡平治の後を待つ事疑なし。御油斷あるべきに候はず。然れば頃日、本山の城攻合戦にて、岡豊は定めて無勢なるべし。軍は不意に起す時は、必らず敵を拉く習にて候。此時岡豊へ急に取懸る程ならば、暫時に攻落し候べし。當郡の勢を差向けられなば、不足はあるまじく候へ共、一條殿へ加勢を乞はせられ、大軍を以て、一戦に功を顯さるべし。然る時は夜須・馬の上は、攻めずして獨り落ち申すべし。此議いかにと申しければ、國虎も家臣も、然るべしとぞ同じける。さらば一條殿へ加勢を乞ふべしとて、頓て使者をぞ立てられける。元親は、本山を攻めらるれば、國虎は又岡豊を攻めんと議す。螻蛄を窺へば、野鳥螻蛄を窺ふと、人間世を譬へたる、莊子が詞ぞ誠なる。一條殿家臣を召され、此事いかいすべきと、損益を問ひ給ふ。安藝左京畏つて申しけるは、是は勇々しき大事に候。其故を如何となれば、安藝殿は、御親子の御中に候へば、御望に任せて、御加勢遣されん事勿論なり。若さなきに於ては、御中悖亂に及ばせ給ふ事揭焉なり。又軍勢を差遣し候時は、宮内少輔恨み奉るべし。彼は御當家の御恩深く蒙り候へば、偏に主君と仰ぎ奉

り、無二の忠貞を盡し候事、上様にも能く知召して候。然るに其志を無に處し給ふ上は、怒を起し恨を含みて、怨讎となる事疑なし。然りと雖親疎遠近を以て考ふる時は、御親子の御中捨て難き事に候へば、先づ安藝へ御加勢を遣され、其上にて御扱を入れられ、和平の御取持なされなば、兩方恨もあるまじく候と申しければ、兼定卿實にもとて、三千人竊に安藝へ遣し給ふ。

安藝勢岡豊を攻むる事

さる程に國虎は、幡多よりの加勢到着しければ、此事洩れぬ先に、急に岡豊の不意を襲ふべしとて、都合其勢五千餘騎、矢流・和食・手結山を、終夜打越え、香美部岸本にて勢揃して、安岡〔並カ〕左京・専常右馬丞に三百餘騎差添へ、夜須の城の押に置き、赤岡を西へ物部川を打渡り、久枝ひさえだより二手に分れ、一手は野田・立田を北へ、國分寺の前より押寄する。一手は大埴おほなれ・篠原を経て、布師田の東へ打出でたり。斯くて東西の在家に火をかけて、関の聲をぞ上げにける。折節岡豊は、無勢の上に俄の事なれば、騒

安藝國虎
長宗我部
元親を襲
ふ

動する事斜ならず。上下南北に馳せ散じ、男女東西に逃迷ひ、周章する事窮なし。元親見給ひ、素より城は要害の地なり。敵寄せ來るは覺悟の前、驚くは未練の至なり。それ〱とて在合ふ番の士以下、大手搦手の手分して、靜に下知をなし給ひ、其後西山治右衛門を召して、敵の様を見て來れと宣へば、治右衛門畏つて立ちて、坂本より馬に打乗り、石清川を打越え、布師田近く乗寄せ、夫より東の手へ廻り、急ぎ立歸り、寄手は安藝の勢にて候。西の手は惟宗これむね右衛門尉・一圓但馬守安岡〔並カ〕三河守、其外一條殿よりの加勢と覺えて、大略幡多の士の旗印にて候。東は安田又左衛門・有井玄蕃・安藝内藏丞、并に松田宗圓むねまろ宗武・恒光・光國等と見えて候と、備の次第を委細に申しければ、元親甲斐々々しき物見、神妙なりとぞ宣ひける。斯る所に近邊に住居の士一領具足等聞傳へ〱、山傳ひ阻傳ひして駈付け〱來る程に、城兵既に五百騎計になりければ、今は人數に不足なしと勇み進み、一同に打つて出で、敵味方入亂れ、火花を散らして戦ひける。爰に上夜須の城主吉田大備後重俊は、敵より押への勢を置き、岡豊へ寄せたりと見てければ、先づ足輕を出し、弓鐵炮にて會釋、日

を暮らして打破らんと計りける。寄手是をば知らず、城中は無勢なり、打出づる事は思ひも寄らずと、仕寄の陰に休みけり。斯る所に手結山の方より、武者百四五十騎押し来る。城中にも寄手にも、敵か味方かと見る所に、近付く儘に、三引兩の旗を颯と差上げ、吉田伊賀介重康と名乗りて、一文字に打つて懸る。寄手扱は敵なるかと、後を防がんとすれば、前に城兵支へけり。前に當らんとすれば、後より攻懸る。前後に途を失ふ所を、城中よりも打つて出で、揉立て追廻し駈破りける間、寄手立つ足もなく、四方へばつと逃散りたり。大備後是を見て、逃ぐる者をば追ふべからず。岡豊の軍心元なし。敵の後を遮り、引包み討取るべし。後より續け者共と、伊賀介と相共に、諸鎧を合せて、揉みに捫みてぞ急ぎける。案の如く岡豊勢、心は猛く勇めども、多勢に無勢叶はず、殘些なに討なされ、城中に引いて入り、爰を専途と防ぎける。寄手は機に乗つて、大手の門を押破らんと、息をも繼がず、喚き叫びて攻めにける。既に斯うと見えし所に、不思議や八幡の社大に鳴動して、白羽の矢二筋飛出で、百千の雷の落懸る如く鳴はためいて、寄手の上を飛廻りければ、大將も士卒も、

安藝國虎
敗走

是唯事にあらずと肝を消し、皆地に平伏して居たる所に、暫ありて又本の如く、宮中へ飛返りける。其矢今にありて、毎年祭禮に、神主是を携へて、神樂の先を行くとかや。敵味方奇異の思をなす所に、吉田勢追々に駈け來り、鬨の聲をぞ上げにける。寄手、すはや後卷するはといふ程こそあれ、一度に吐と崩れつゝ、子は親を捨て、郎従は主人を知らず、物具・太刀・長刀・旗・差物をも打捨て、我先にとぞ逃げにける。名を惜しむ勇者共は、黒し返せ〜と呼ばはれ共、大勢の引立ちたる事なれば、耳にも更に聞入れず、右往左往に落行きけり。城中には是を見て、涸魚の海に出でたる心地して喜び勇み、門を開き打つて出で、我劣らじと、鑑かみの野三里の間、追打にぞしたりける。中にも福留隼人・熊谷源助、相並びて追懸けしが、隼人、源助を呼かけて、是程の大崩れに、荒切して通るべし。小切は若者にせさせよといひければ、源助心得たりと、福留廿人切れば、熊谷は十八人ぞ切つたりける。此時國虎が、一人當千と頼みたる兵共、其數あまた返し合せて討たれける。

峯寺觀音緣起附國虎・元親和談の事

爰に吉田伊賀介が三男孫助俊政は、常に峯寺の觀音を信じけるが、取分宿願の事ありて、一七日參籠してぞ居たりける。中島藤藏人は是を聞きて、結願を祝せんとて、酒肴持ちて參りければ、住持も立出でてぞもてなしける。孫助申しけるは、俊政當山觀音を信じ奉ると雖、未だ緣起を知らず。參籠の次に、御物語承り度候と申しければ、住持、當寺は往昔數度失火にて、舊記悉く焼失せて、委しき事は知れずと雖、今日の御慰に、あらまし荒増語り候べし。抑當寺、八葉山求聞持院禪師、ぶじ峯寺俗に峯寺と號す。嗟哉天皇の勅願、弘法大師草創の所なり。本尊は十一面觀音にて御座す。昔此寺初めて回祿の時、本尊光明を放ちて、南方補陀洛界に飛去り給ふ。其後寺堂再興ありて、本尊を勸請せんと、供養の規式執行の所に、本尊の種子、空中より忽然と壇上に降り給ふ。又當山の西の方に、石土の神社あり。是當國廿一社の其一なり。社の側に、福蛇毒蛇の穴とて、巖穴二つあり。其古き事計りなし。彼穴中より大蛇出で、此山

峯寺觀音
緣起

へ常に往來しけるが、或時遽に身より火出で、林木に燃付きて、餘煙寺堂に及んで、再び焼亡す。其身も焼死して蛇骨残りけるを、厨子の下に納め置くと云々。其後又度々回祿にて、靈寶舊記悉く紙滅して、代々帝王の勅裁將軍家御下文・田島寶物・寄進狀等、多しといふ説のみにて、今詳ならず。二王は湛慶が作なり。其側に紅葉あり。是を飛鳥井紅葉といふなり。是昔よりは候はず、近頃飛鳥井曾衣、御寄進の爲に植ゑ給ふに依つて、所の老父共、申習はし候。御覽候如く、惣じて此山の石、大となく小となく、皆南へ傾きたり。是觀音の淨土南方無垢補陀洛界に向ふといへり。當山は南の峯にて、去斯不遠の補陀洛界なれば、菩薩鎮座の道場なる事著し。一度歩みを運ぶ輩は、二世の悉地を得る事疑なし。況常住歸敬尊信する人をやと、詞に玉を連ねて語られければ、孫助歡喜の思をなして、感涙をぞ流しける。斯くて四方山の物語になりて、酒肴取散らし、餘念なく樂しむ所に、藏人が郎等、慌しく走せ來り、今朝より北に當りて、鬨の聲鐵炮の音聞え候間、道行く人に尋ねて候へば、安藝より大軍にて岡豊へ押寄せ、今軍最中なりと語り捨て通り候と、大息繼いで申しけ

れば、各驚き、一座の興もさめて、暫しは茫然として居たりける。中にも孫助は、今年十六七の若者なれば、一應の思慮なく、南無觀世音菩薩、力を加へ給へと、大音聲に太刀押取つて出でんとす。藏人引留め、其儘にて向はれんはいかゝなり。館へ立越え、武器を認め給へ。我も人數を連れて、俱に行くべしといひければ、孫助打笑ひ、運は天にあり、鎧は質屋にありと戯れて、山下へ走り降り、馬に打乗り、諸鎧を合せ、北を指して馳せたりける。恒河山を過ぎて東を見れば、大勢崩れ懸り逃走る。扱は敵はや敗軍したると心得、東を指して追懸けたり。久枝の邊を見れば、十四五騎眞丸になりて、靜々と立退く武者あり。孫助大音にて、やさしく見え給ふものかな。返し給へ。斯くいふは吉田孫助俊政と申す者なりと、詞を懸くれども、聞かぬ由にて落行きけり。孫助腹を立て、臆病者遁さじと駈寄りて、後なる武者二騎切つて落す。残る者共膽を消し、散々になりて逃げにける。中にも大將と思しき者、大太刀抜いて打つて懸る。心得たりと二打三打打合ひしが、押並んで引組み、孫助取て押へて、首掻切つて立上るを、敵一人返し合せ、鎗を以て丁と突く、孫助さしつたりと、

鎗のしほくびしつかと取る。敵鎗を取られしと引合ふ所を、孫助、こはやさしやと、力に任せて捻ぢければ、鎗の柄、中より折れにけり。敵肝を消し、跡を見ずして逃げにけり。藤藏人は手勢引連れ、遅馳に來りて見れば、人の死骸は數知らず、算を亂して臥したりけり。敵はや物部川をも越えて、味方の勢、長追なせそとて、川より歸るに行逢ひたるに、首三つ取らぬもなく、勢ひ懸つて見えたりける。藏人餘り本意なさに、川端へ行向つて見れば、三人浮きぬ沈みぬ流るゝ者あり。それ〱と引上げさせ、何者ぞと問ひければ、是は安藝の夫丸にて候と答ふ。藏人、彼奴等が首を切りたりとても、譽にもならず、助けてやるべしとて、彼等に向ひ、汝等が首は、某がものなり。取つて行かんと思へども、定めて惜しく思ふらん。皆々首を取らすぞ。急ぎ安藝へ歸り、中島藤藏人といふ大善人に、首を繼がれたると申すべしとて、渡瀬を教へてぞ返しける。孫助是を見て、藏人殿はいつに替り、大慈悲者になられたりといひければ、我素より佛教をうけて、殺生戒を保つなり。南無阿彌陀佛と大笑して、岡豊へぞ參りける。さる程に元親は、此勢に乗つて、安藝を攻亡さんと義勢あれば、

國虎は又、今度諸將の拙き故に仕損じたり。自身岡豊へ馳向ひ、安否を一戦に決せんと、互に牙を剛ぎ、不日に打立たんと、軍勢上を下へぞ返しける。一條黄門此由を聞召し、是兩家滅亡の機、一國動亂の端なり。措くべきにあらずとて、安並爲松を使として、様々扱を入れ給へば、兩方其理に服しつゝ、互に和談をなし、軍兵弓を袋に入れ、太刀を鞘に納めて、皆故郷に歸り、父母妻子寄合ひ、安堵の思をなして、萬歳を唱ひける。

長宗我部
元親安藝
國虎和睦

土佐物語卷第五終

土佐物語卷第六

本山陣の事

吉良式部少輔茂辰朝倉を落ちて、領家にも怵へず、本山に籠られければ、味方の兵、氣を失ひ力を落して、此に集り彼に集ひ、逃支度の外は、させる義勢もなかりし所に、高津野比浦古味伊野窪片見廣野西川黒岩八畦立石大石大砂子柳瀬長淵を始として、葦生の小松萩野縦屋我野白川太郎丸五百藏野尻吉野五王堂槇山の專當山崎押谷別役豊永の小笠原森の土居北泉宮古野相川地藏寺石寺和田瀬戸本川の高野船戸大藪桑瀬寺川の越裏門大森裏山の桑尾高川西川東川都積楮谷中村郷の腊賀瀬楠瀬梁瀬上八川下八川寺野古郷程野清水津賀才黒瀬徳光新別椋木安居大崎の者共、馳集りける間、其勢雲霞の如くなれば、とはかうと勇

み喜ぶ事限りなし。彼本山と申すは、國中第一の要害なり。山重なり岸高く、數百丈斷えざる峯の腹に、僅に足を側つ計の細道あり。見下せば青岩峨々として、澗水音遠く、旅客行人胸を冷す。見上ぐれば白雲峯を埋み、空の衣を溷す馬ならでは。駈り難し。西に檜山、東に國見峠とて、二の道あり。中にも國見峠は、雲半腹を廻つて、國中を二瞬に見る高山なり。若一夫怒つて關に臨めば、萬侶通るを得難き難所なれば、何萬騎向ふとも、攻入るべき様もなし。本山の境内に入りては、田あり畠あり、村あり里あり、大河流れて林木多ければ、幾十年籠城すとも、疲勞困窮の患なし。故梅慶入道、攻の城に構へ置かれたる、智慮の程こそ淺からね。斯る要害に、多勢にて籠られければ、元親今討手を差向けられ難くぞ見えにける。されども攻めずしては、敵の落つべき道なければ、多勢を遣すと雖、寄手手負び討たる、計にて、毎度利を失ひて引退きければ、元親も退屈して、軍議に肺肝をぞ碎かれける。爰に森近江といふものあり。是は其先森の城主森右近頼實が一子なり。本山左近大夫入道梅慶草創の始、森を攻むる事度々なりしかども、右近は聞ゆる勇者なれば、大きに防ぎ

戦つて降らず。梅慶、和田若狹を語らふに、和田が一族與力して押寄せ取圍み、攻むる事隙透間もなかりければ、右近力盡き、大きに勇を振つて討死す。其子千松丸、虎口を遁れて、爰彼さまよひ、程經て岡豊へ行きて、覺世入道を頼みければ、深く勞り、懇に扶助せられける。頓て元服せさせて、近衛とぞ名乗らせける。其後元親、潮江の城主となし給ひければ、近江大きに悦び、いかにもして本山を討ち、覺世父子の恩を報じ、父の讎をも返し、身の恥辱をも雪がんと、念慮骨髓に徹りければ、よりく、森の地下人共を語らふに、舊恩を思ふ者共多く與して、潛に岡豊の人數を引入置き、此の古城に取籠りける。茂辰此由聞き給ひ、大きに驚き、急ぎ討手を差向けんと議せらるゝと雖、味方に、又何れか野心を企て、いかなる手立をかせんずらんと、互に心を置合ひて、勇む兵なかりけり。斯くては此城にて、始終の功を立てられん事叶ふべからず。瓜生野うりふのの要害に引籠り給ひ然るべしと、諸臣一同に諫めければ、茂辰議は宜しきに隨ふに如かじとて、永祿七年四月七日、本山の城を明けて、瓜生野にぞ籠られける。岡豊勢續いて押寄せ、日夜の境なく、様々質てたてを替へて攻むれば、城中色

吉良茂辰
本山近衛
合戦

色工たくみを替へて防ぎける程に、勝に乗つて進む時もあり、負けて退く時もあり、兩方相引に引く時もあり、雌雄區々なりと雖、寄手は日々に勢加はりければ、城兵は夜々に落失せて、身を放れぬ一族、厚恩異なる郎従の外は、残り留まるはなかりけり。斯る所に西谷口へ、大勢押寄すると聞えければ、義井修理罷向つて追拂ひ候はんとて、既に打立ちけるが、是を最後とや思ひけん、人數をば残し置き、手勢八十五騎を引具してぞ向ひける。寄手大浪の如く、同音に喚き叫んで、一面に押入る中へ、些とも擬議せず駈入りて、蜘蛛十文字に打通り、引通しては駈破り、四方八面に追散らし、とある松の木に馬を控へて息繼ぐ所に、流矢來りて、胸板にはつしと中る。ものゝしやとかなぐり捨てけれども、痛手なれば耐らず、馬より落ちて亡せにけり。郎等共は主を討たせて、何の爲に命を惜むべき。二足も退かず、枕を並べて討死す。さる程に西谷口も破れて、敵押入るとて、上下周章騒ぎければ、茂辰、今は遁れぬ所なり。あらぬ敵と討死せんも口惜し。只尋常に自害して、恨を死後に報せんとて、鎧を脱置き給へば、是を見て北の方、些もわろびれたる氣色なく、二人の姫を取り、右に並

べ、守刀を袖に隠し、茂辰の左の方に座し給ふ。嫡子將監親茂二男内記茂廉三男又四郎茂直、其外一族郎従二行に列んで、大將御自害あらば、御供申さんと、腰の刀に手をかけて、静まり返つてぞ居たりける。屠所に赴く羊の歩み、近付く命ぞ哀れなる。斯る所に本山佐渡守が郎等、慌しく馳來り、軍は御和談になりて候ぞ。粗忽に御自害候な。佐渡守はや參り候へども、先達て知らせ奉ると、勢ひ懸つて申しける。こはそも何とある事ぞといふ所へ、佐渡守來りて申しけるは、義井修理討死いたし、御方の軍勢氣を失ひ、色を損じたる體を見候ひしに、斯くては西谷口破られぬと覺え候ひつる間、茂定罷向ひ候所に、吉田大備後人を越して、暫く失留をいたし候へ、申すべき仔細ありと申に付、其の意に任せ候へば、吉田來りて申候は、誠に不慮の事より起りて大義に及び、骨肉同胞の道絶えて、吳越を隔て候事、管禍一朝一夕の故にあらず。覺世入道殿舊讐を報せんと欲し、臨終の遺言にも申置かれて候へば、宮内少輔殿、亡父の遺誠背き難く、是迄の沙汰に及び候事、唯天理を思召し給ふ故なり。然りと雖、親にも超えて睦しきは、同氣兄弟の愛なり。甥は猶子の如しといへり。聲は